



マンガ大賞2026決定!  
選考員コメント掲載!

マンガ大賞  
Cartoon grand prize  
2026 マンガ読みが選ぶ2025年の一推!!

# マンガ大賞2026 大賞受賞作品

ハルタ / KADOKAWA

## 「本なら売るほど」 児島青

### 選考員コメント・1次選考

- 「本」を題材にする作品がヒットする確率が高い。が、この作品はそれ以上のものを感じる。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 本にまつわるいろんなエピソードがまるで宝石のようにちりばめられていて読了後気持ちがじんわりするコミック。

ブックエース上荒川店 / 倉本かおり

- 本が好きなのはもちろん、それほどでもない人もちゃんと出てきて、いろんな人の視点から、本の在り方を教えてくれます。ここ数年じっくり読書することもなく、実は自分が思っているほど本が好きなのではないのかも、と思い始めていたのですが、この漫画を読んだ後、断捨離をしてもなかなか手を付けられない自分の本棚を見返してしまいました。やっぱり私も本好きの端くれだったのだ、と思い出させてくれたことに感謝です。

主婦 / 堀江千秋

- マンガに限らず、「本読み」なら誰もが共感できるような設定とキャラクター。客や周囲の人々との交流を通して、本に対する愛情やコンプレックスなどさまざまな感情がないまぜになる。現役の本読みはもちろん、昔本読みだった人でさえも、積ん読していた本を開き、書店に出かけたくなるはず。郷愁感って、心を豊かにする栄養だ。

ライター／編集者 / 松浦達也

- 本に携わる者として読まねばならぬ一冊。ストーリーはもちろん画力も申し分ない。改めて本っていいものだなあと思った。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 棚で探して手にとって、ビビッときたり、なんとなくだったり、強い想いのもと見つけ出したり、そういう流れにこそ味わいが宿るんだよなと。そして古本も、ただ安く買うための手段じゃなくて、捨てられずに誰かへ継がれていく大事な道の一つなんだなと。いくら旧時代体質だと言われても、紙の本って、実物って、こういうことがあるからやっぱり好きなのかもなって。そんなことを思わされた、いろんな人と想いが優しく交わる、小さな古本屋が舞台のオムニバス。ふとした時に1話ずつ読み進めるぐらい、じっくり味わっても良いかも。何なら、ぜひ紙本でどうぞ。

会社員 / 伊東敬祐

- 自分自身が多くの本によって物事の見方や価値観の一部が育まれた経験があったこと、そして、この作品のコンセプトから、美しい絵、テンポのいい展開、どれをとってもしっかり楽しむことができた作品でした。

会社員 / 平沼良章

- 読むたびにこんな古本屋が自分の住んでいる地域にもあったらいいのにと思います。

会社員 / 林 礼春

- 本が出会わせるのは、物語だけではない。古本屋「十月堂」を軸に交差する、様々な人、様々な記憶、様々な生き様。状況も世代もバラバラな人々が、それぞれに本とのエピソードを見せてくれる。なるほどそうか、古本には、一度誰かに選ばれたという想いの一部が付着しているのかもしれない。そう思って、あらためて自分の書棚を眺めてみて、これはこれで味わい深いと思えた。本なら売るほど。心を打つストーリーもまた同じだけ。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 古本屋「十月堂」の若き店主とお客達を描いた物語。本を愛する人たちなら共感できるストーリーばかりだと思います。あと私や実家が古本屋なのですが、古書店の描写がとてもしっかりリアルなのでそこにも驚きました。作中で出てくる古本たちも本好きなら「おっ」と思うものばかりなのでそこにも注目して読んでほしいですね。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 読み切りの各エピソードが、「うーん」と唸るうまさ。発端で引きつけ、展開で驚かせ、そしてオチで余韻が心に沁みる。お仕事ものとしても魅力。もちろん本好きにゃ堪らない。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 古本をめぐる物語と聞いてなんとなく想像していたイメージを裏切って何倍も奥が深くて、読み心地が非常に気持ちのいい作品でした。漫画を読んでものに名作や名著のおいしい部分をかいつまんで読んでいるかのようなお得な体験ができます。登場人物もみな非常に魅力的で（嫌な奴はいますが）、紙の本が好きなら全ての方皆に読んでいただきたい作品です。

フリーランス / 金輪英恵

- 本棚からは持ち主の人生が見える。良質な連作短編。映画や音楽を題材にしても同じような物語が作れそうだが、やっぱり本だから成り立つ話もあるよなあと思う。

駿河屋梅田茶屋町店 店員 / 小磯 洋

- 本という「モノ」の中身だけでなく全てを愛する人間に刺さるあたたかみのある作品。古本屋の表もウラも、そこにまつわる人生も。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 古本屋の若い店主の物語。自分の住んでた街にも何処かにあった古本屋。いま住んでいる家の近くにもある古本屋。漫画以外はあまり読んで来なかったが、読んで来なかったのが悔やまれるほど素敵に本にまつわる話が描かれています。古本を通して前の持ち主の思いが伝わってきたり、店主の本への想いも凄く素敵で、まだ二巻が出たばかりですが、どうか沢山の物語を読ませていただきたいです。

お笑い芸人 / ムーディ勝山

- 本が好きで書店で働いていた私でさえ、家が狭い等の理由で最近は電子書籍を購入することが多くなった。でもやっぱり、『紙の本』にはそれにまつわる縁、物語や思い出が生まれるんだよなあ。守っていききたい文化だよなあ、と、この作品を読んで改めて思った。

主婦 / 赤坂真実

- 古本屋さんの物語と気軽に読み始めたが、ここまで広大な世界が描けることにただただ驚いた。自分はずっと中古CD屋さんに通っていて、こんな店主たちとずっと音楽の話をしてきたなあとなつかしさがこみあげてきた。自分の通っていたお店は全部なくなってしまった。この古本屋さんもいつかはなくなってしまうのだろうか？本はしぶといものなのだという作中の言葉を信じて、潰れずに続くこの店をもっともっと見たい。今のところ今年ナンバーワンの作品。

October Beast デザイナー / 北山 友之

## 選考員コメント・2次選考

- 本にまつわる様々な物語。それぞれが優しく、絵柄も相まって読後感がよいものが多い。本好きなら共感してしまう話がたくさんあるはず。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- タイトルの「本なら売るほど (いや売ってます (笑))」は書店員にとって一番身近である感否めない。が、そういったアドバンテージを抜きにしても、やっぱり今回はこの作品がイチオシ！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 澁澤龍彦の「高岳親王航海記」が登場。女子高生が学校で読んでいる、という設定でした。そういえば、その本を読んだのは高校生の頃だったか。近くの団地の小さな本屋さんで出会って、歴史好きな立場からふと読んでみたら、なんかいろいろ違った！でも不思議面白い！という本でした。それから澁澤龍彦を読み漁った、、わけではなく、読まなかったのですが。たぶん、夢のような、麻薬のような、そんな魅力にかえて危険を感じたのかもしれませんが。それから30年。近藤ようこさんによるマンガ「高岳親王航海記」。これまた不思議な画風で、魅力的に世界観を見せてくれました。あの、幻想的な雰囲気も蘇る。嬉しい体験でした。そして、今回、また3度目の出会い。作中の女子高生が高校の教室で読んでいたことがエモかったのか、古本屋店主がすかさずその話を拾ったのが嬉しかったのか。ふと電車の中で泣いてしまいました。遠い記憶のリバイバルと、作品が世の中にあるからこそこのこれまた不思議な出会いと。またどこかで出会えるかな。こんな出会いがまたあるといいな。そんな、本との出会いを楽しめる作品です。

弁護士 / 三葛敦志

- 本ってこんな風に人を繋いでいくんだな、と本という物が宿している縁を知ることができました。手にする、重みを感じる、紙の匂いを思い出すきっかけとなり、気持ちがほっこりしました。本を読んだことがない人にも読んでもらいたい作品です。

ツクリビト代表取締役 / 小野裕子

- 人と人との間の失われかけてるコミュニケーションにグッと来ました！

OKAMOTO'S / オカモトショウ

- 本屋に勤めていますが、読み終わった後に本屋さんに行きたいなあと考えるお話がぎゅっと詰まっていた古本屋を営む主人公の人柄もとても魅力的で一話読む毎にいろんな気持ちにさせてくれる魅力的なコミックです。

ブックエース上荒川店 / 倉本かおり

- 本を通して紡がれる個々の思い。一話一話が心に染みる。画力も然ることながらストーリーでも魅せる。こんな漫画をずっと待ってました！

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- この作品がいいのは、“本が好き”の形をひとつに決めないところ。たくさん読む人もいれば、忙しくて読めなくなる人もいるし、思い出が詰まっているからこそ手放せない人もいる。そういう距離感の違いを、優しくそのまま描いてくれるのが心地よかったです。

会社員 / 平沼良章

- 古本屋に、様々な人生と浪漫。それこそ売るほどの。どんな人にも、それぞれの人生と浪漫。売れないけど。どのエピソードも噛めば噛むほど味が出るような、懐の深さが愛おしい。10年たって読み返してみるとまた違った味わいになるかもしれませんね。

めがねっ娘教団教務大司教 / 田中海渡

- 古本屋を舞台に、本を手放す人と受け取る人の思いをつなぐ物語。自分自身、本棚の容量の問題から最近の蔵書のほとんどは電子書籍へ切り替わりつつありますが、それでもなお紙の本の手触りや、書店という場所の豊かさを再認識させてくれました。読後、本屋に立ち寄りたくなります。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 『コーヒーもう一杯』という漫画に似たような感じですが『コーヒーもう一杯』も大好きなので好きな気持ちに抗えないので、一位

tetote 代表 / 力丸真

- 漫画しかほぼ読まない人間なので、実際の本のタイトルが出てくるタイプの作品は苦手意識がありまして、この漫画も読まず嫌いをしていました。一巻の最後の話に本は好きで沢山買うが、最後まで読みきれなくてつい積読してしまうという人が出てきて嬉しくなりました。これでもいいんだと、少なからずあった活字コンプレックスが拭かれる思いです。古書店十月堂を中心に描かれる人と本の話は、型にハマらずさまざまに飽きない。いろんな意味で胸を打つ話が多かったです。そして綺麗な線で丁寧に描かれた絵はとても読みやすい。

マンガバー店主 / 岡部愛

- 沢山生まれ続ける書籍は最後にどこにいつてしまうのか？古本屋は本を復活させる職業であり、息の根を止めてあげる職業でもある。この仕事が大変でありながら夢を感じさせるのがとてもいい。無料紙ごみ収集所に本を捨てるシーンはとても切なかったけど、リアルさに秒で引き込まれた。

October Beast デザイナー / 北山 友之

- 本を好きな人ってこんなにも本を好きなの？と、本読みの「本愛」を知ることができる作品です。全ての話が面白く、締めくくりも気持ちが良い。漫画でこんなこと言うのは的外れかもしれないんですが、この話は活字だけでも楽しめるだろうと思える脚本の良さが素晴らしいと思いました！必ず映像化するでしょうし、必ず見ると思います。この漫画、左には受け流せません。

お笑い芸人 / ムーディ勝山

- 江藤農林大臣が「コメは売るほど」と言ったのは、2025年5月20日。この作品は2025年1月15日初版初刷り発行。大臣失言とは無関係のようです。街の小さな古本屋というか、本をめぐる人たちを描く作品。年齢に近い岡書房の主人に共感してしまいます。いろいろとよく調べて描いている作品。古本屋の営業の舞台裏がよく分かる。「背取り」は確か、つげ義春の漫画にも出てきました。病院のCTスキャンの様子もリアル。画が抜群に上手い。実在の書籍も登場。読書欲を刺激します。「ガダラの豚」、確か自宅の書棚につんどくしてあるはず、探して読んでみよう。直木賞候補だもんね。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

- 昨年発売した当初から、2026マンガ大賞にノミネートするだろうと確信していた作品。そして本に携わるいち書店員としては、やはり選択せざるを得ないし、こういう漫画が売れてくれないといけない、売らないといけないという使命感も深く思いつつ、おすすめしたい。漫画を通して、作品内に出てくる書籍に関心を持つこともいいと思うし、古書店でもいいので書店という場所にもっと興味も持って欲しいし、やはり最後は本って魅力的で、人と人を繋ぐもので、学びがあり、感謝が深まるものであって、何も失うものはない、プラスになるものしかないものだという感じを感じて欲しい。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 古本屋の日々なんて別に珍しいものではないから探偵なんて要素を足してビブリオミステリとかいったフォーマットにしてストーリーの中で古本屋って仕事の面白さだったり本そのものの楽しさだったりを伝えようとする。そのこと事態はとても良いことだけれどありきたりな古本屋の日々は物語にならないなんて思われたらきっと古本屋としても寂しいだろう。『本なら売るほど』はそんな古本屋の古本屋としての思いをこれでもかって詰め込んで描いた漫画と言える。店を閉めようとしていた古本屋の店主の老人が通い詰めている不動産屋の青年と会話しつつこちらも100円の棚から本を買っていき美大生に心を許していたら、売った本が壊され破かれ作品にされてしまって呆然とするエピソードの痛さ。ガンの手術を受けることになった女性が死にたくなるような本を求めて中島らもの『ガダラの豚』の文庫本を出してそれを読んで女性が次を読みたくって頑張るエピソードのなるほど感。『ガダラの豚』を読んでいる人には納得しかたないけれどそうでない人にもそれならと思わせ本屋なり古本屋へと走らせる。古本屋はそれ自体がドラマになると改めて分らせてくれる作品だ。

書評家/ライター / タニグチリウイチ

- 読めば読むほど古本屋に足を運びたくなるマンガでした。作者さんは本への思いがとっても強いんだと思います。どれだけ電子書籍が場所を取らずいつでも読めても、やっぱり本を手にとって、ちゃんと時間を取って読む方が心に残るものだと最近感じていたのもう少し本屋さんへ足を運びたいと思いました。何も用事のない日曜の午後のような、ゆったりと、少し贅沢な時間を感じさせるマンガだと思いました。

自営業 / 玉澤綾子

- 心臓がギュッとなる話がたくさん詰まっていて、とてもいろんな感情を教えてくれる漫画。間違いなく今年一、人に勧めた漫画。

ヘアメイク / 北原由梨

- 少し埃っぽいような古書店の独特の空気感が伝わってくる作品。長いこと古書店街の神保町で仕事をしてきた身からすると、とても懐かしいような気持ちになるけれど、うんと高い価値のある専門古書店ではなく、少し前までは町には一つあるような「普通の」町の古本屋さん。その若い店主を中心に、本と、本を愛する人たちのオムニバス。本好きにはたまらない！新しい本との出会いを求めて本屋さんや古本屋さんに行きたくなる作品です。

元書店員 / 内野智未

- 物理的な本好きとしてはどうしても外せない作品。本を通して繋がる人と人。やっぱり私は本が好きなのだを改めて教えてくれた作品。

女優 / 齋藤明里

- 最近はスマホの小さな画面に流れる濁流を流し見るだけの日々を過ごしていますが、紙の本に救われる、救われた経験は覚えてるうちに手放さないように、今のうちに大切にしないと改めて思いました。人と人をつなぐ本の運命に思いを馳せる生き方に眩しさすら感じます。今大切なことを教えてくれる作品なのかもしれません。

フリーランス / 金輪英恵

- 古本を通じて織りなす人の人生が、味わい深い。同じ本でも手にとる者によって価値が大きく変わる。大切なものを学ぶ一冊。

デザイナー / シンガーソングライター / 平松新

- 本が好きで人達のエピソードはどれも心打たれます。自分もかなり本を所有していますが今後どうしようかなーとか思ったりしました。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- 「青木まりこ現象」ってそんな言葉知ってました！？時には楽しく、時には悲しく、時には切ないストーリーが古本屋さんから紡がれるとてもステキな作品です。本が好きでも、そうでなくてもこの作品に出てくる本を手にとってみたいくなります。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 人に薦めたい作品を選ぶという「マンガ大賞」の原点を強く思い出す。お薦めし、読んでもらって、どのエピソードが一番心に残ったかを語り合いたい。そこには多分に個人の自分語りエピソードが入ってくるのではないと思う。

駿河屋梅田茶屋町店 店員 / 小磯洋

- 本という存在が仕事、商品、日常と化していた私にとっては、本の魅力をあらためて感じられる作品になりました。買った本を鞆に入れて宝物のように持ち帰って、読むための時間を確保し、飲み物やお菓子を用意したりして、大昔の人や今同じ時代を生きてる人が作った本の世界に没入する。自分の1回の人生じゃ体験しきれないたくさんの世界を旅する。何度も読み返して思い入れのある本になり、でもあの世までは持って行けず、やがて次の誰かへと引き継がれる。贅沢で豊かな永い永い時間を、楽しむ人がもっと増えたらいいなと思いました。本屋には、本なら売れるほどありますのでぜひお近くの本屋へお越しください。2巻ラストのお話良かったです。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 古本を愛し、探し求めた経験がある人には刺さる作品だと思います。その本を初めて読んだ時の思い出や、憧れの本が読んでみたくて手に入れたくて渴望した時の想い、そして運命的な出会い…古本って単なる“古い本”ではないんですよね。確かな画力と落ち着いた物語の運びは幅広い年齢層の人にも読みやすいと思います。沢山の人の人にお勧めしたい作品です。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 古本の裏側に隠れ、ページの余白に透けて見える、人の遺した想い。粋です。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 読者層へのベタな訴求力が強いぶん、書籍ネタのフィクションは評価しにくいけど、抑制の効いたエピソードと感情を丁寧に綴った作りは賞賛に値する。つまりは正真正銘の良作。

書評家・ライター / 福井健太

- 久しぶりに小説を読もう！という気にさせてくれる心沁みる作品。今後も幅広い文芸作品を取り扱ってほしい

会社員 / 齋藤隼

- 派手な事件は起きないけど、本を探す理由も、それぞれ違う人間模様がとても心に良い。絵の美しさやテンポもいいし、1話完結だから読みやすい。忘れていた自分自身の「一冊の本との思い出」がきっと浮かんでくる、そんな作品。「本好き」なら、是非一度手に取ってほしい。

図案家 / 橋本 寛子

- 本好きなら一度は頭をよぎるであろう古本屋という職業。本を好きになってしまった人たちの面倒くさくも少々笑えるエピソードが数多く出てくる。電子書籍だって良いし、目録で購入したって良い。でも、古本屋という場所で買うのはまたそれらとは違った魅力がある。手軽じゃないだけに一冊の本がいろいろなエピソードをまとうので、特別な一冊というと古本屋で買ったものが多い気がする。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- 本と精神世界を繋ぐ解釈がとてもロマンチックで感動しました。

PENICILLIN / HAKUEI

- とても静かな作品なのに、読んでいると感情があちこちに揺さぶられます。舞台は古書店。店主と古書を中心に、ひとりひとりのエピソードが丁寧に描かれていて、気づけば物語の中にずっと入り込んでいました。大好きな人の「なんでだろう？」と思う行動に、ちゃんと愛のある答えが用意されているところも素敵で感動的でした。「古書が好き」というのは、ただ読むだけじゃないんだと感じさせてくれる場面も印象的。そして、本好きにはちょっとつらい描写もありますが、そこからきちんと救いがあるのもこの作品の魅力だと思います。いろいろな出会いが詰まっっていて、ページをめくるたびにわくわくする一冊。静かなのに、しっかり心を動かしてくれる物語です。

株式会社アニメイト / 鈴木寛子

- 本が売れるほどある場所に集まる、本を愛する人々。彼らが紡ぐ言葉や交流を見ていると、本を読む時間が人生をどれほど豊かにしてくれていたかを思い出します。一人で深く潜り込む読書の時間で得た感情を誰かと分かち合うとき、デジタルとは違う、体温の通った「つながり」が生まれ、かけがえのない絆へと繋がっていくような気がします。本を愛する人はもちろん、しばらく本から離れていた人がこの豊かな時間を思い出すきっかけになるマンガだと思います。

システムエンジニア / 廣瀬公将

## 「壇蜜」 清野とおる

### 選考員コメント・1次選考

- 事実に勝るものはなし。想像を超えるものが現実だと言ったのは誰だったのか。ここに登場する「壇蜜」は私たちが勝手に想像していた「壇蜜」をはるかに凌駕する。親族に会うたびに自分の写真集を名刺代わりに渡すのはほんの序の口。「壇蜜」の魅力を伝えきることが清野氏が漫画家になった目的だったのかもしれない。

October Beast デザイナー / 北山 友之

- 一風変わった方向から芸能シーンに現れ、独特の存在感と他にないキャラクター性を発揮した壇蜜さん。清野とおるさんとの結婚や、その後の休養にも驚いた方はみな、そのミステリアスさの裏側の一端なりとも垣間見られぬものかと本作を手にとられたかと思いますが、垣間見たのは裏側の真実どころか果ての知れぬ深き森であったという...

会社員 / やのこうじ

- ひょんなことから有名芸能人と結婚したマイナー・カルト系マンガ家が、妻との新婚生活を赤裸々ドキュメンタリーとして描く。あまりにウケ狙いな企画と想着て、長らく敬遠していたが、年末に読んでみたらひっくり返るほど面白い。現代が舞台なのに、もう「日本昔ばなし」の趣。数百年後、壇蜜という名前、清野とおるという名前が忘れ去られたとしても（失礼）、やっぱり「面白い」と言われるに違いない。いや参った。

元新聞記者 / 石田汗太

- 「壇蜜」さんと清野さんがご結婚されたことは知っていましたが、どんな夫婦生活を送られているのかはずっと気になっていました。なんの気なしに手にとった単行本でしたが、あまりの面白さに一気に読み進めてしまいました。間に挟まっている対談や読み物も豪華すぎるコンテンツで本当に素晴らしいです。お値段以上の満足感。まず壇蜜さんが「エンターテインメント」すぎます。テレビに出ている時とは全く違う種類の、魅力的な「人間」。これを清野さんがコミカルに描き出していて、これまで読んできた夫婦エッセイマンガとは全く違う奇妙な魅力がありました。デートのシーンはそれでいてとてもかわいく、そのギャップも素敵です。あの「壇蜜」さんを夫の手で新しい魅力を発信するなんて素敵だなと思いました。作中にあるように「ハッピーエンド」であってほしいし、できるだけ長く読んでいたい作品です。

クラスター株式会社広報 / 西尾美里

- 『東京都北区赤羽』から多種多様な個性的な変人を愛を持って描いてきた清野とおる先生が満を持して描いている「壇蜜」。まさかあの美しい壇蜜さんが1番の変人だったなんてという衝撃！面白さとともに清野とおる先生と壇蜜さんが凄く仲良しなんだという事がわかって、凄く嬉しく幸せな気持ちになりました。どうかいつまでも元気で幸せでいてほしいと心から願っています。

主婦 / 岸本しのぶ

- 正直、面白すぎます！『東京都北区赤羽』の清野とおる先生が、妻・壇蜜さんの実像を夫目線で描いた、愛と怪異のエッセイ漫画。清野とおるさんにしか描けないのすぎるすぎます！世間を賑わせた結婚の裏側が、出会いから語られていくんですが、赤羽の奇人たちを観察してきた清野先生の「描写の腕力」がとにかく凄まじいです。ミステリアスな壇蜜さんの真相に迫るだけでも面白いのに、彼女の周囲で起きる出来事は唐突で奇妙なことばかり。もはやホラーや怪異の域に達する壇蜜さんの存在感に、ページをめくる手が止まりません。愛とミステリーとホラーが混ざり合う唯一無二の漫画体験。近年稀に見るレベルで「ずっと読んでいたい」と思われる、中毒性抜群の傑作です！

芸人 / 吉川きっちよむ

- 妻を、しかも壇蜜を描いているのに通常運転の清野作品。プレッシャーはあるとのことだけど、やはり夫も只者ではない。

医師 / 岸本 倫太郎

- 女優の壇蜜と共演した後プロポーズされたサブカル漫画家の清野とおるさんが描く実録漫画。発表当時の衝撃は結構なモノで SNS 上の漫画家に「奇跡ってあるんだな、自分にもワンチャンあるかも」と。世知辛い御時世になにがしかの希望をもたらしたインパクト大な作品。

住職・ライター / 蟬丸 P

- 壇蜜が、非常に魅力的な“おもしれ一女”で、高感度爆上がりしてしまった。作者と壇蜜家で会話をしているとき、テーブルの上に猫（久石）が行儀よく座っている図が好き。どの程度の脚色がされているかはわからないけれど、ほぼ実話ベースなんだと考えると、世の中の平凡な日常にもまだまだ楽しいことが転がっている可能性があるんだな〜と、なんだかワクワクできる作品です。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 壇蜜さん、テレビでみる度に気になるなぁ、と思っていましたが、想像をはるかに越えていました。可愛らしくて、所々（ほぼ）ぶっとんですと言いますか…。清野さんに出会えたのも、何かの引き合わせだったんだろうな…。出会えて、良かったですね、としみじみとしてみたりなんかして。早く続きが読みたいです。

書店員 / 桶谷佳代

- 何度読んでも飽きることのない奥行きが…とか、清野とおるさんのぶっ飛んだ視点が…とか、壇蜜さんの生態の謎が…とか、色々あるんですが、もうそういうことはどうでもよくて、とにかく面白すぎます。清野とおるさんの作品、これまで数々読ませていただいておりますが、まるでそれらの集大成みたいに感じる濃厚さと丁寧（丁寧？）さ！今、誰かに清野とおるさんの作品をオススメするとしたら、「まずは『壇蜜』を」と言わせていただきます。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 世は、大自分語り時代。SNSには自分が経験したストーリーはもちろん、自分がおすすめしたい対象のこと、店やゲームや映画やマンガや、町や子供のことなどが、もう、あふれんばかりに供給されています。まあ、私もラジオパーソナリティなんてやっていますから、見たり聞いたりしたことを喋る、自分語りも商売の一部なわけですが、そういう職業だからこそ、自分語りのクオリティが自然に気になっちゃうことも…！と、思っているところで現れた、これ「壇蜜」！！自分語りって、結局はどんな「ネタ」を仕入れて、どんな「腕」で調理するか、いわば料理と同じなんですが、清野とおるさんと言えば、『東京都北区赤羽』で磨かれし超絶料理人。ポテトチップスがすごく好きなだけの人のエッセイすら面白い！という人が、どんな経緯があったのかも含めて、歴史上最上級の素材になっちゃう、『壇蜜』さんと結婚しちゃったわけですよ！？どう考えたって面白くならないわけじゃないですかー！！！！どういことですか、壇蜜さんと自分の伯父さんが謎の中国語で会話するところとかと出くわすところとか普通ありますか？！これ、死ぬまで描いてもらえる可能性、あるんですよ…！超期待！！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- あの驚愕の結婚報道！世間の「なぜ？」に真正面から？答える一作。いやはや合縁奇縁、摩訶不思議。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 清野とおるのルポ漫画家としての経験が生み出した究極の概念のような存在が実在したという恐ろしさ。漫画である以上、リアクションなど含め、多少は誇張した表現もあるかとは思いますが、それにしても驚くしかない。清野さんの愛情を持ちつつも、ルポライターとして（？）一定の距離を取って冷静に観察しているという視点も読みやすくて良い。

駿河屋梅田茶屋町店 店員 / 小磯 洋

- ノンフィクションのはずなのに全ての登場人物、エピソードがフィクションとしか思えない！事実は小説よりも奇なり、がそのままハマります。実際自分の周りにいたらちょっと…いやかなり大変かもな…というような登場人物たちに対して、清野さんのまなざしがどこかあたたかく、とことん楽しんじゃおう！というポジティブさが感じられて心地よい。作者の圧倒的な肯定感と冷静な観察眼あってこそ。しかし何回読んでもこのお二人が夫婦という事実が新鮮に面白い！

元書店員 / 内野智未

## 選考員コメント・2次選考

- 清野さんが天才。プライベートをこれだけ面白く描ける人がかつて存在したでしょうか。その天才のもとに「壇蜜」さん。全てのエピソードが面白すぎます。エンターテイメントに携わる人の9割が創作で頑張ってる中、プライベートで面白くさせているただの天才2人。面白そうな所に動いていく清野さんと、面白い事が向こうから行列を作る壇蜜さん。常人には絶対に降りてこない出来事が、この2人だから降ってくる。誰も敵わないです。

お笑い芸人 / ムーディ勝山

- 清野先生の描く壇蜜さんがとっても魅力的。清野先生の「愛を込めて面白い漫画を描こう！」という軸がはっきりしているからこそ、さすがの構成力と世界観で「面白い漫画」になっていること自体が素晴らしいことだなと。ナマケモノまで飼いはじめる場面で「壇蜜ヤベー」と思ったエピソードは完全に読者と一体化していて笑ってしまった。出会った初日に清野先生の人柄を見抜いた壇蜜さんも素晴らしい。壇蜜さんの「週末のおてがみ。」拝見しています。体調良くなりますように。

営業 / 佐々木つむぎ

- 清野とおる先生と言えば、赤羽に暮らしてそこでの奇人な人物に自ら飛び込んで、こちらもまた普通ではない独自の視点でその経験を漫画化した『東京都北区赤羽』。その後続く作品もこの好奇心と独自の視点が要点となっていると思いますが、今作ではそれが自らの奥様、しかもあの壇蜜さんに向けられているという大事件が起こっていて、これが面白くないわけがない！純度の高い超平常運転の清野とおる作品が楽しめます。この夫婦、好きです。

医師 / 岸本 倫太郎

- そもそもとんでもなくズルいこの作品、何かに負ける気がして今まで読もうともしませんでした。が、悔しい、あまりにも面白すぎる……全てのエピソードが濃く、変！変！変！！読み物として単純にめちゃくちゃ面白かったです。「壇蜜」、この二文字のアドバンテージはとてつもないものがありますが、それを差し置いても清野氏の漫画力が高いからこそここまで嫌味なく面白く読めるのだと、その巧さをひしひしと感じます。合間のフルカラーコラムも抜け目がなく、こうして補足されることで本編の解像度をより鮮明にしてくれる。なによりたびたび差し込まれる「“本物”の写真」の威力たるや……。ガチでこの人壇蜜と結婚したんだ……。いや結婚してるんだけど……。ここまで書いてても新鮮に、何度でも疑いたくなるこの『題材』の面白さの鮮度が落ちることはないのかもしれない。未永くお幸せに。

フリーランス / 金輪英恵

- どんどん面白いことになってきています。お二人は、出会うことが決まっていたんだろうな、と読む度に感じられます。これから、ますます楽しみです。

書店員 / 桶谷佳代

- 夫婦のエッセイマンガとして抜群に面白い。壇蜜さんはテレビでしか拝見したことがなく、その時に見ていたイメージとは全く違う人物なのだ知った。まるでマンガ的なキャラクターだ。肩の力を入れずに読め、さらに面白くて何度も読める。長年の付き合いのお笑い芸人のラジオを聞いているかのような安心感とクスクス笑いをもたらせてくれる。男女のパートナーとしての暮らしの一つの理想形であるのではと思う。未長く仲良くしてほしいし、連載も続けてほしい。

クラスター株式会社広報 / 西尾美里

- あの清野とおる先生がああ壇蜜を描くという、もの凄い相乗効果の漫画！！壇蜜さんって、こんな方だったんだという驚きと凄い面白さと、よく分からない感動と。好きになった女性を自分で漫画にして発表できるって、素敵だよ。夫婦で支えあっているんだなあと。壇蜜さんと清野先生が元気で幸せでいて欲しいと心から思います。清野先生の集大成的作品になりそうで、是非マンガ大賞を取って欲しいと願っています！！

主婦 / 岸本しのぶ

- 壇蜜さんの魅力を余すところなく堪能できる作品です。第1話から一気に引き込まれ、気づけばすっかり虜になっていました。毎話ごとに壇蜜さんの不思議で奥深いエピソードが描かれ、その世界観にぐいぐい惹き込まれます。壇さんと清野とおる先生のやり取りも本作の大きな魅力。清野先生の“いちファン目線”なりアクションや、壇蜜さんへの愛情が随所にあふれていて、読んでいるこちらまで温かい気持ちになります。特に第2話は板橋区が舞台となっており、板橋区育ちの私にとっては思わず唖ってしまう内容でした。壇蜜さんのことをもっと好きにならずにはいられない、そんな一作です。

株式会社アニメイト / 鈴木寛子

- 壇蜜と清野とおるの出会いの所から面白い。自分がテレビなどで見ていた壇蜜と全然違う。とにかく、壇蜜が面白いとしかいいようがないです。

デザイナー / 平沼寛史

- 「東京都北区赤羽」のときみたいに、ぜひ本人出演によるモキュメンタリーを制作してください。メディアに出演している際の「壇蜜」は、メディア側から望まれている役割を演じているという感が強く、本人の人間味があまり見えない。清野さんのフィルターを通して描かれているので面白いと思うだけで、知り合いとして直接接していたらドン引きするだけかもしれない行動の数々は、実際に見てみたいと強く好奇心を刺激する。「人間 壇蜜」を見てみたいと強く思わせる清野さんの手腕は見事と言う他ない。むしろ、こうなることを見抜いて壇蜜さんは清野さんに誘いをかけたのか・・・？

駿河屋梅田茶屋町店 店員 / 小磯洋

- エッセイ漫画の名手として揺るぎない地位を確立された清野とおる先生が、「妻」の壇蜜さんを描く。一流の料理人が一流の食材を調理するようなもので、正直「ズルい」とさえ思える組み合わせです。しかし本作は、その“ズルさ”に甘えることなく、壇蜜さんという人物の不思議さ、奇妙さ、そして人たらしぶりを、鋭い観察眼とユーモアで丹念に描いていきます。怪奇現象すら受け流す精神的な強度。シュールで少し不穏なのに、なんともいえない愛嬌がある。テレビで見てきた「壇蜜」像を軽々と裏切りながら、別の魅力を次々と提示してくれます。淡々と描いているようで、ページの端々からは確かな敬意と愛情がにじみます。読者が羨ましくなる関係性がそこにあります。「清野先生イイナー」と言う人のほうが多いのではないかと思います。私個人としては、むしろ壇蜜さんが清野先生という唯一無二の伴侶と巡りあえたことに、めちゃくちゃ尊さを感じました。

接遇スペシャリスト/ライター / 田邊加奈

- 一次でも推したが、実はちょっと迷いがあった。でもやっぱり何度読んでも面白い。だから二次でも推すことにします。迷いというのは、これは実話ベースのコミックエッセイではないか？という点。何しろ観察対象の「妻」が、誰でも知ってる芸能人なんだから、これだけでもう反則気味。7割くらい厳しく割り引いて評価せねばならないと思う。しかし、読んでいるうちに、実話だろうがなんだろうが、どうでもよくなってしまふんですね。それほど個々のエピソードが非現実的で面白い。本作を一言でいえば現在進行形の「異類婚姻譚」。清野とおるを「令和の柳田國男」と呼びたいくらい。誤解を招く書き方かもしれないが、基本明るいギャグなのに、どこか寂しい「滅びの予感」みたいなものがつきまとい、胸を締め付けられます。それが清野ワールドなのかもしれない。一次でも同じことを書いたが、この作品は100年後の読者が読んでも、やっぱり面白いと思う。実はものすごく知的で、技巧的なマンガなんじゃないでしょうか。

元新聞記者 / 石田汗太

- 「漫画のような夢の設定」の現実を漫画として描く。フィクションの世界とリアルな日常が混在しているような実録（ですよ？）漫画です。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- まず、作中にちょこちょこ出てくる写真の壇蜜が半端なく美しすぎる。こんなに現実離れしているというか何とかな人が、深めに帽子被ってたりしたら余計に目立つだろ……と思うのだけれど、本当に実体が存在する人間なんだろうか。……とってしまうぐらいに浮世離れしているというか非人間的に感じるところが多く、とても愉快。マンガとして面白いのか、壇蜜という人が面白いのか、最早どっちが面白いのかよくわからない感さえある。（きっと、相まっているんだろうと思うが）

イロイロ屋 / 杉本善徳

- この作品は、いわゆる芸能ゴシップの“裏話”ではありません。むしろ、誰もが知る名前を持つ人と暮らすことが、どれだけ日常を不思議に変えてしまうのかを、観察と実感で積み上げていくノンフィクションです。作者が「夫」であり「記録者」でもあるからこそ、距離が近いのに、どこか客観的で、笑いながらも妙にリアルです。読んでみると、笑っていいのか迷う瞬間が何度も来ます。会話のズレ、生活の段取り、外にいる“世間”との温度差。些細な出来事が、名のある存在と暮らすことで急にスリリングになっていく。清野作品らしいテンポの良さと“変な現実”の拾い方が、ここでは夫婦生活という題材と驚くほど噛み合っています。気づけば「壇蜜という人物像」以上に、「人が人と一緒に暮らして、こんなに分からないものなのか」という感覚が残る。夫婦ものとしてもドキュメントと

しても異色で、読後にしみじみ怖さと可笑しさが同居する一作です。

会社員 / 佐藤優

- テレビ越しに見ていた壇蜜さんから、ほんの僅かに感じられていた凄みというか異質さみたいなものの実態を、ありがたいことに、本当にありがたいことにノンフィクションでお届けしてくれる作品。いや作品名の強さもさることながら、内容のぶっ飛びようがすごい。たぶんだけど清野さんも相当すごいから成り立つ関係性だと思います。知性×奇人ってというのはこういうカオスを見せてくれるんだなあ、という新鮮な感覚を教えてくれるというか…ピロリ〜とか「でも いないよ」の恐怖とかえりちゃんとか…怪異が怪異すぎてるんだけど壇蜜さんの能力で調和されてんのかな…サブカル界のトップランナーである清野さんがマンガ大賞 1 位になった場面を見てみたいのもあり推します。

会社員 / 布施直人

- この人にしか描けない作品、というものが大好きです。この作品がすごいのは、そもそも「壇蜜」という題材が他の人には誰も描きようがないものでありながら、夫である視点から、人間「壇蜜」を漫画に描き起こす清野とおる先生の手腕も唯一無二であるという点です。誰も手に入れられない最高級食材で、天才料理人が極上の料理を作って、なぜか路地裏で配ってくれている……。そんな贅沢でいびつな気安さに、思わず頭がくらくらしてしまいます。

芸人 / 吉川きっちよむ

- メディア越しの印象とは一味違う、壇蜜さんの素顔の魅力に引き込まれました。もし自分の身におこったらゾッとするようなオカルト的な出来事もユーモアたっぷりで描かれていて、そのバランスが絶妙。こんなに不思議で面白い日常を漫画という形で届けてくれることに、思わず感謝したくなる一作です！

会社員 / 小野塚博之

- 心理描写がとても生々しくて引き込まれました。

PENICILLIN / HAKUEI

- 本当にこんな出会いや関係性の夫婦というのもあるんだ、と思いました。人の縁ってどこでつながってどんな形になるか、本当に人それぞれで面白いです。

会社員 / 林礼春

- サブカル漫画家と有名女優の結婚エッセイというだけでフックの強さは抜群ですが、SNS 上の漫画家さん達にこういう事もあるんだ！という希望をもたらしたという点でも高評価であり、この手の作品が何年かに一度は出て欲しいという人の祈りを具現化したような話でした。

住職・ライター / 蟬丸 P

- 何度もお会いしたことがあるが底しれぬ魅力があった壇蜜さん。旦那さんが紐解きながらも更なる壇蜜沼を見せてくれる面白い漫画。まだまだ知られざる魅力を見たく、続きがとても楽しみ。

ヘアメイク / 北原由梨

- こんな、どうしたって面白いじゃん。もはやずるいけど、続きが気になってしょうがない。

女優 / 齋藤明里

- 壇蜜さんはキレイなのに不思議な人だと思っていましたが、想像のななめ上をいく謎めくおもしろワールドでした！

主婦 / 紺野泉

- 小学生の娘が読んだあとこのホラーマンガがすごく怖いと言っていた。

カメラマン / 平沼久奈

- 清野とおるさんが、この世のキワに存在する面白いもの、ことを赤羽を中心にずーっと伝えて面白くしてくれていたことはマンガファンみんな周知かと思いますが、その「型にはまらない新しい事実」を日本で一番面白く伝えてくれる人に、何百万分の一の奇跡が降り注ぐ、というのは、マンガの神様のなすこと、としか言えないでしょう！超有名人・壇蜜さんから会ったその日に結婚を申しこまれるというとんでもない奇跡から始まる一連の不思議が、生活感が透徹した清野マンガの文脈の中に据えられる。ずーっと空を飛んでいるわけではなく、毎回地上からとんでもない空中戦に連れて行かれるこの感覚。こんなに、この世は不思議なことだらけなんだ！という物証を提供してくれるマンガは、ない！！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

## 「邪神の弁当屋さん」イシコ

### 選考員コメント・1次選考

■ 戦争を引き起こした罰として、人間の姿で謹慎することを創造主に申し渡された邪神が、弁当屋さんとして暮らすお話。お弁当をテーマとしたマンガはこれまでも数多あり、絵柄のかわいさもあいまって一話オムニバスのマンガかな～と思って読み始めたら全然違いました。ストーリーが進むにつれて、背景が幾重にも増していく。人の優しさが折り重なっていく感じ。弁当箱にすき間なく詰めていくように、満たされていく。作中の「それを愛だと気づかなくとも、誰かを愛する事は出来るよ」というセリフが作品の全てに繋がっているような気がします。この作品の手触りをなんと表現すればいいのか悩みます。サラサラとした砂のような読み心地、かわいらしくシンプルな絵で描き込みも最低限で余白までセリフのように感じる。今季イチオシの作品です。

公務員 / 宇田川結衣子

■ 可愛い絵本のような絵柄に油断すると、不意に胸を打つ深いテーマに驚かされます。言葉少なに一日一善のお弁当作りを続けるレイニーの健気な姿が愛おしく、何気ないシーンで涙がこぼれる温かいファンタジーです

会社員 / 三浦佑樹

■ 戦争を引き起こした罰を受け、人間として暮らす邪神。出会うのは訳ありの人々。でもどこかユーモラス。これは隙間を埋める物語。

八重洲ブックセンター宇都宮バセオ店 / 山本さとみ

■ すでに完結していますが、もっと読んでいたいと思った作品。かわいらしいゆるい画ながら、読みやすい物語。邪神さんの弁当屋さんに訪れるキャラクターとのやりとりなどにほっこりします。ああこんな弁当屋が近くにあったら通っちゃうなあと読みながら常々思っていました。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

■ 可愛い画の裏に流れる愛のテーマ。哀しみの上の笑顔が心を震わされます。

オフィスオーガスタ・マネージャー / 樋口健

■ 絵本のように独特でシンプルなタッチと、不思議な空気感をまとった世界観に引き込まれる作品です。主人公のレイニーは謹慎中の神。罰を受けて人間となり、弁当屋を営んでいます。終始無表情な彼女ですが、人として暮らし、他者と関わっていく中で、その表情の奥に、少しずつ何かが宿っていくように見えてきます。近年はすべてを言葉で説明する作品も増えていますが、本作は多くを語りません。描かれない部分や余白を读者に委ねる、その姿勢に痺を感じます。全16話での完結は当初から決まっていたようで、限られた話数の中に物語を丁寧に詰めていく在り方は、作中で描かれるお弁当作りの姿とも重なります。レイニーたちが送る日々をもう少し見ていたかったという名残惜しさを抱えつつも、当初の構想どおりに描き切られたであろう最終回は、心にやさしい余韻を残してくれました。

接遇スペシャリスト/ライター / 田邊加奈

■ 戦争を引き起こした罰で人間として生きる元邪神レイニーが、弁当屋を営むという近年のマンガらしい思い切りのいい設定。「過去の過ちを小さな営み」で贖罪していき、救いを得る。微妙な表情や台詞回し、舞台設定に作り込みの妙が感じられ、どこか切なさや郷愁を誘われる。

ライター/編集者 / 松浦達也

## 選考員コメント・2次選考

- 童話のようなシンプルな絵柄と、やわらかな空気をまとった画面。そこに置かれているのは、かつて邪神だった存在が人として弁当を作る日々という、どこか影を帯びた設定です。主人公のレイニーは多くを語りません。感情を表立って見せることもありません。それでも、人と関わり、同じ時間を過ごし、弁当を作り続けるなかで、彼女の内側に、確かに何か芽生えていきます。そしてその変化は、彼女の周囲にも波のように広がっていきます。少しずつ積み重なる繊細な変化を、読者が読み取る余白として預けてくれる信頼感がありがたく、説明しすぎない潔さに作り手の覚悟を感じました。全16話で完結することが決まっていたとのことで、限られた話数に物語を詰め込むさまは、丁寧に具材を詰めるお弁当作りそのものです。「もっと読んでいたい」という名残惜しさを残しながら、見事に描き切られました。その余韻が、読み終えたあとも長く心に残ります。

接遇スペシャリスト／ライター / 田邊加奈

- 最初に言い訳から入ります。最終4巻が出たのが今年1月なので、選考対象に入らないことはわかっている。全4巻で評価すべきではない。ないのだが……。やっぱり頭から消し去るのはムリ。ここ、多くの選考者が悩んだのではないかと推測します。すさまじい傑作というしかない。読む前は正直、割とよくあるファンタジー+グルメものだと思っていた。(出版社はそういう売り方を意識していると思う。)ところが読んで仰天、恐ろしくハードで哀切で残酷で、そして心優しく美しいファンタジーであった。絵の巧みさも特筆もので、これだけシンプルな構成もコマ運びも完璧。全編通してレイニーの表情が能面みたいにほとんど変わらないのに、演出のみで喜怒哀楽の感情を表現するところなど、背筋がゾクッとするほどうまい。一コマ一コマがアートになっている。各巻に挿入された読み切りがまたよくて、本編の外伝風にもなっているのだが、ああ、この作者はもう揺るぎない自分の世界を持ってるんだなとわかる。あまりにも独創的でジャンル分け不能なので、宣伝しにくい作品だとは思う。でも、帯であまり「グルメもの」を強調すると、本作の真の価値が届かないような気がして、そこだけがやや気がかり。かくいう私も、この賞の候補でなかったら読まなかったかもしれないと冷や汗が出る。いや、いろいろ考えさせられました。

元新聞記者 / 石田汗太

- 完結してしまったけど、もっと多くの人に読んで欲しい、読み継がれてほしい作品。可愛らしい、愛らしいキャラクター、暖かみのある画で和ませてくれる。個性ありで雰囲気も独特だけど、引き込まれる魅力的な作品です。邪神だよね？って読んでて忘れちゃうレイニーだけど、たまに見せる邪神風もとても魅力。こんな弁当屋さん欲しいなあ。仕事の休憩に誰かさんと一緒に通ってしまうよきと。おすすめの弁当屋さんです。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 神話のような、寓話のような世界観を足がかりに、「食べること」の大切さや意味、つまり、生きものはなぜ「食べる」のか、が、さりげないエピソードと穏やかな筆致で描かれる。読んでいてなんとも心が休まり、肩の力が「ふうふう」と抜ける。いまどきとても貴重なマンガだと思う。さる理由から人間として生きることになった異形の神(魔物とも)が選んだ仕事は弁当屋。その絵姿は小柄でかわいく、ちょっととらえどころのない女性として描かれるが、それではなぜその仕事が「弁当」だったのか。そのわけを問わず語りを書く冒頭のト書きに、このマンガが描かれた意味が端的に表れている。いったん全巻を読み通してからこのページを再読すると、そのことがとても腑に落ちるし、そんな物語を通じて示される作者の考え方はとても共感できるものだ。何度でも読みたくなり、読むと「おかえり」「ただいま」という何気ない日常の挨拶すら愛おしいもののように思えてくるし、また、人智を越えた存在への畏怖や敬意や祈りのようなものも自然に自分の中に湧いてくるような気になる。これから先、この「邪神の弁当屋さん」は自分にとって、聖書のようにずっと手元に置いて時折手に取るようなマンガになるのかもしれない。描線もとてもすがすがしく気持ちのよいもので、そして食べ物がとてもおいしそうなので、読んでいるとおなかも減る。物語の始まりから、ぐるりと一周回ってラストシーンまで、過剰も不足もなく、ちょうどいい適量のおかずがおいしそうに詰められた、満足感最高のお弁当のような一作でした。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 人の心の隙間から魔物が生まれるのなら、その心の隙間は人より大きくなるか？レイニーは自分の心を埋める代わりに、弁当を詰めているのかもしれない。

八重洲ブックセンター宇都宮バセオ店 / 山本さとみ

- 最初は絵本のような漫画なんだと思って読み進めたらどんどん展開が複雑になってきて世界観に引き込まれました。絵のシンプルがとっても読みやすかったです。無表情なのにいろいろな感情が読み取れるレイニーはとっても魅力的でライラックとの掛け合いも楽しくほほえましくて大好きです。おにぎりとお焼餅が食べたくまりました。

自営業 / 玉澤綾子

- グルメ漫画なのかと思っていてそのうち読もう…なんて考えていたら、良い意味でめちゃくちゃ期待を裏切られた！神々や魔物がいるファンタジー世界だけれど、描かれているのは人々の日々の営みや静かな愛。神様たちも完全な存在ではなく、あちこち足りなくて不器用で、何とも愛おしい。優しくて少し寂しいような、不思議な感覚の物語にやられました。

元書店員 / 内野智未

- 「邪神の弁当屋さん」の話ではあるけれど、これは「人がいかに生きるか」を描いた物語だ。どう生きるべきか迷うから人なのだし、そこから生きることを肯定して日々を一步一步進められるのも人だからだ。ずっとぼけた絵柄であっても、芯の強い作品。名作と思います。

マンガ読み / サイトウマサトク

- どこまでも優しい世界。シンプルな絵柄とシンプルなセリフから色んな愛の形が伝わり、じんわりと心が暖かくなります。ライラックの旦那が好きすぎてどうにかなってしまいそうです。

会社員 / 竹本慧

- まるで絵本を読んでいるようで、不思議で可愛くて優しい。ココロが穏やかに癒されるようで。レイニーの美味しいお弁当、食べたいです。

主婦 / 紺野泉

- タイトルからして想像していなかった作品で、そこには優しさ、温かさ切なさが溢れていました。丸かったり四角い形が異なる物を、左右上下、高さも出しつつ上手くぎゅっとお弁当箱に詰め込んで。胸がギュウツとなるお話です。色んな個性的な神様が見守っているようで可愛いです。

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

- コミック DAYS での連載時に1巻相当のあたりまで読んだものの一度離れてしまったのだが、完結後に全4巻を通して読むと、改めて物語を貫く繊細さに驚いた。饒舌なマンガではないので、語られることと語られぬこと、描かれるものと描かれぬもの、小さな喜びと不穏の影、我々はそのあわいをたゆたいつつ物語の奥へと導かれ、そしてふと気づくと余韻に浸っている。

会社員 / やのこうじ

- キャラクターみんな好き。かわいい。特にレイニーのお顔はイラスト的で線が少なく表情もほとんど変わらないのに、コミカルな台詞と合わさると表情豊かになって魅力的で発明すぎる。ストーリーもやさしくてあったかくて、ちょっと危険な展開があっても、収束のさせ方がやさしくて意外性があります。ライラックが頑固そうに見えてものすごく謙虚で柔軟な性格なのが意外性の要因にもなっているかと思うのですが、とても素敵です。しばしば泣いてしまうので目と鼻がヒリヒリになりました(保湿します)。紙の本で買って手元に置いておきたいと思いました。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 主人公である邪神さんがかなりガチの邪神で驚かされた。豊穰と死を司る、異形／異貌の神。どうみても邪神…大地母神系の…おいおいマジじゃねえか。神が罪を犯し贖罪のため人に墜とされ弁当屋を開く。神代と近世あたりがしれっと同居する不思議な世界。魔物がでたり神秘が生き残っていたりもするが城勤めに福利厚生がある程度には文明化されてもいる。なにより弁当にプチトマトやお焼餅の彩りが許されている程度に豊かだったりもする。たぶん少女マンガの文法がそれを可能にしているんだと思うんだけど世界を司る神々の愛と、市井を生きる人々の愛がひとひらに並んでいる不思議なマンガだった。神も人も、迂闊に愛を語ったり、がっばがっば地上をあるったりして神代の物語ではあるんだろうが、妙にモダンだったりもする変なマンガであることだなぁと思ったことだ。

流しのソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- タイトルと絵柄から、ほのぼののグルメ漫画かと思ったら全然違いました。神が神を支配する世界を描く、生粋のファンタジーです。読み進めるほどにシリアスな話が明らかになり、最初のほほんとした雰囲気はどこへ……と思うのですが、不思議と気持ちが沈まないのは、主人公のタフさと周りの人々や神々の温かさに救われるからでしょう

か。世界が自分より大きな何者かに支配され、成す術もないとき、絶望するのか抗うのか、問いかけられている気がします。何度も、じっくり読み返したいと思う物語です。

主婦 / 堀江千秋

- 神が人の生活に関わりを持ち、お弁当を売るという設定が面白いと思いました。設定が活かされ、畏られる神の世界の捉え方や、それが人と関わることで温度を持ち始める感じが物語を通じて伝わってきます。家族で楽しく読める作品です。

ツクリビト代表取締役 / 小野裕子

- 人が生きていく上ですごく大事なことを描いている漫画。めちゃくちゃ良かった！

OKAMOTO'S / オカモトショウ

- 罰で元・邪神が弁当屋をやっているという斬新な設定。そしてゆるい絵本みたいな描写と空気感で油断していると、戦争の傷とか「罪と贖い」みたいな重いテーマがじわっと刺してくるギャップがとても良かったです。レイニー（ソランジュ）の表情がほぼ固定なのに、今なに考えてるんだろ？ってのを読ませる演出が本当に上手い。弁当の隙間を埋める話そのままま心の隙間にも効いてくる感じで毎回続きが気になって読んでいました。結局何も解決しないまま？完結しちゃって、ずっと読んでいたくて寂しく感じたんですが、でもこのエンドで良かったなとも思います。

会社員 / 三浦佑樹

- 味わい深い作品で、とても好きです。ほのぼのだったり、薄暗かったり、重かったり、あたたかかったり……いろんな要素が一つにまとまっていて、お弁当のようだと思います。絵本のようにありながら、色気も感じさせる絵が本当に良いです。描き過ぎないところに読者への信頼も感じて、そこも好きです。

声優 / 綾瀬有

- 絵が苦手……と思ったのだけど、読み進めてみたらそれがまた魅力だと感じるようになった。弁当を売りながら人間として暮らし善行を積むかつて『邪神』と呼ばれたレイニーと、街の人との心の触れ合いが描かれている。切なかったり温かかったり。とても良い作品。

主婦 / 赤坂真実

- 余分な書き込みを省いたようなシンプルな線で描いた、温かさと冷たさの両方を感じさせる独特のファンタジーな世界が魅力的。時折挟まれる切ないエピソードに胸がきゅっとなりつつも、主人公レイニーを取り巻く人々の温かいやり取りと、文字通り「目が点」の表情がとにかく可愛くてほっこりする。何より、なんでこの世界観にぱっちり溶け込んでるのかわからない、バリバリ家庭的な日本食がどれもめちゃくちゃに美味しそうで、読むと心地よいお腹の空き具合になれます。

会社員 / 伊東敬祐

- 可愛い子の正体に驚き、複雑な気持ちになりながら、色々考えるなあ、どうなるのかな…と次が気になって読み続けてしまいます。おかげさまで、良い本に出会えました。

書店員 / 桶谷佳代

- 意外と美味しい、ユニークなアプローチのファンタジー。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 最初は魅力的な絵に惹かれ読み始めたこの物語ですが、2度目は独特な雰囲気を楽しみ、3度目にはスルーしていた不穏当さに目を向け、4度目には言葉に秘められた意味を推察し、5度目には笑顔の裏に気付きはじめ、そして幾度目かの周回、お弁当のシーンでこっそり泣いてしまうようになるなんて。誰かを思って隙間を埋めるお弁当も、それでも埋まらない隙間も、双方なんと尊いことか！とじんわりした気分にあてられるまま夜中に焼いた玉子焼きは、ちょっと失敗したのです。

Tokyo Otaky Mode / モリサワタケシ

- 読んでいて色々考えさせられた作品です。個性的な登場人物が皆魅力的で良かったです。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

# マンガ大賞2026 ノミネート作品

少年ジャンプ+/集英社

## 「おかえり水平線」渡部大羊

### 選考員コメント・1次選考

■ このマンガで一番素敵なのは間違いなくおじいちゃんです。年を重ねるにつれ、大人の役割がきっちり描かれている作品を読むと涙腺がゆるみます。こうありたい、こうあらなければならないと思います。もしかしたら、かつて読んでいたマンガにもそんな大人がいたのかもしれない。当時は子ども側に共感し、行き場のない感情を受け止めてもらっていたけれど。視点が変わると見えてくるものが違うから、マンガってやめられないなあとしみじみと実感しました。この作品の中には、決して正しいとは言えない大人の存在もあり、けれど大人に振り回される子どもたちを悲観的に描くだけではない。子どもたちはそれぞれにちゃんと考えていて、その上で大人がどうあるべきかを伝えてくれる作品だなと思いました。

会社員 / 堀尾素子

■ 亡き父親の隠し子が訪ねてくるところから始まる群像劇タッチのお話です。ヘビーな始まり方ながら、遼馬をはじめ登場人物が軒並み心のあったかい良い人ばかりのため、優しいエピソードが繰り返し広がられます。亡父の隠し子である玲臣の身の上という秘密を共有することによって起こった遼馬の変化が、少しずつ周りにも影響を与えていくさまが暖かく描かれています。穏やかな日々の変化の下に、秘密を守るという危うさが確かに存在するバランスが緊張感を生み、登場人物たちを見守りたくなるマンガです。

株式会社ムービック / 岡部真矢

■ 祖父と2人で営む銭湯にある日突然やって来た、亡き父親の隠し子。なんやかんやあって一緒に住み、同じ学校に通うことになった2人が中心の群像劇。ちょっと疲れた大人なので、優しい人たちの話が身にしみる。

主婦 / 赤坂真実

■ 古びた銭湯を舞台に、突然現れた異母兄弟と暮らすことになった高校生を描く家族の物語です。重い設定も押し付けがましくないで穏やかな気持ちで読み進められました。おじいちゃんをはじめ登場人物みんなが温かく、血の繋がりを超えた絆に胸が熱くなる場面もある。静かで深い感動に心洗われるヒューマンドラマです！

会社員 / 三浦佑樹

■ 雰囲気と優しい画がとても好みのマンガです。最初重いストーリーになるのかな？と思ったけれど、そうでもなくどちらかという爽やかな感じを受けます。高校生の主人公が選りながらのセリフに優しさを感じ、温かくなれる漫画。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

■ こちらも友人に勧められ読みました。ボーイミーツボーイっていいですね……。それぞれの環境の、大人たちの毒に侵されながらも「子ども」の彼らが抗って素直に生きていく様に胸が打たれます。個人的に仲間内での時のノリと身内（家族）と接する態度がちょっと違う玲臣くんが年相応の可愛さを感じて好きですし、遼馬くんは既にスパダリ（古語）の風格さえ感じます。みんなしっかり大人になってしっかり幸せになってくれよな！！！！

フリーランス / 金輪英恵

## 選考員コメント・2次選考

- 亡くなった親父の隠し子話から始まった兄弟関係を軸に魅力的な登場人物が少しずつ増えていくのがすごい。フィクションであることを最大限に使って、人間の暖かさを描いた傑作だ。個人的に銭湯に対するあこがれが幼いころからあって、実家が銭湯という題材だけでも既に味方していたのかも。いや、そうでなくても最高だな。うん、これが1位としか言いようがない。

October Beast デザイナー / 北山 友之

- 温かく、ほかほかとした心地よさに満ちた物語が、じんわりと胸に沁みました。それぞれに事情を抱えた登場人物たちの過去や傷がなかったことにはできないけれど、それをそっと包み込んでくれるような優しい物語でした。おじいちゃんがとても素敵なキャラで大好きです。

デザイナー/イラストレーター / 鷹嘴 柊子

- いやー染み込んだ！とてもいい作品です。優しく自然に沁みました。いろんな形の家族があり、ゆっくりと家族になっていくところを見てグッときました

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 死んだ親父の隠し子登場……あらずじ読んでそこまで惹かれなかった。だが、一話二話と読んでいくうちに、涙腺崩壊した。じいちゃんもだが、主人公遼馬の懐の広さと言ったら泣ける。どんな育て方したらこんな考えが出来る子に育つのか？「慣れん環境で頑張って自分の場所作ってんやから自分のこと褒めこそすれ責める必要もないやろ」このセリフ刺さった…切なくもあり、クスッと笑えて、ほっこり心が温くなる。個人的にはじいちゃんバリバリイケイケで好き…。後、一湯入魂、湯水の如く、湯るがぬいし。トンデモTシャツが毎回気になる(笑)

元コミック担当 / 実松由夏

- 少しだけ寂しくてとっても優しい彼らにとって、暖かな居場所が出来たということ。それは読者である私たちの心も穏やかにしてくれました。これからの彼らが暖かな場所で笑顔でいられますように、と願いながら読みたくなる作品です。

女優 / 齋藤明里

- 亡父の不倫の末に生まれた異母兄弟との奇妙な共同生活と、その生活が始まったことによって少しずつ波紋のように起こっていく世界の変化のお話です。不貞の子という玲臣の出自の秘密を共有しながらの生活を送っていくという緊張感と、それをやさしく受け入れていく人々の温かみが魅力。遼馬と玲臣だけでなく、彼らを取りまく登場人物がみな繊細で思慮深く、心地よい空気が流れているマンガです。

株式会社ムービック / 岡部真矢

- 銭湯っていう設定が良いですね。彼らの仕事でもあるから避けられないことだし、風呂でしか話せない内容もあるし。登場人物それぞれの事情がちゃんと重くて、読むほど沁みます。例えば急に現れた異母兄弟の関係とか、学校と大人に振り回される感じが切ないんですが、淡々と優しい主人公とじいちゃんの包容力でちゃんと救われる。これは読む銭湯、デトックスです。心があったかい湯に浸かれる漫画です。

会社員 / 三浦佑樹

- 余韻のように静かに胸が躍る感じがたまらない。達観したおじいちゃんのような、凧のような主人公が個人的にツボです。

教師 / 持丸 宏司

- 銭湯を中心に描かれる高校生の物語。登場人物達の色々と不器用だけど真っ直ぐなところに心打たれます。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- この作品に登場する子どもたちの生きる世界はけて優しい世界ではないけれど、主人公のマイペースさと舞台となっている銭湯で流れるゆったりとした時間に癒される、そんな作品です。

会社員 / 津田圭

- 読めば読むほどおじいちゃんが魅力的で…そう、大人が、大人がしっかりしないとイケないんだよ！と机を叩きながら、つい熱くなってしまいました。子供が子供でいられる環境というのは絶対に必要で、またその一方で、子供には子供の世界があり、時には大人以上の力がある。見てきたものが違えば、見える景色も違う。けれども全てが違うわけではない。ほんの少し重なり、交差する部分があるのだと思います。まだ2巻ですので、明かされていない

いこともたくさんあるはず。子供たちがそれぞれ納得のいく道を進めますようにと祈る気持ちで、見届けたいと思います。

会社員 / 堀尾素子

- 高校生だからまだ自分では解決できないことを背負わされている登場人物たち。大人になると大概のことは自分で解決してしまうけど、そういえば子どもの時は家族のことや人間関係とか、いろんなものについて解決もできないながらいろいろ考えてたなあ・・・と思いました。みんなハッピーな形で完結してほしいと心から思う作品だと思います。

会社員 / 林礼春

- 子ども＝守られるべき存在だときっぱり描いてくれる作品が大好きなので、このマンガが大好きです（じいちゃん、ありがとう）。海辺の町に住む彼らは、今日も幸せしているかな？ 幸せだといいなと思いを馳せられるのがうれしいです。

ライター / 門倉紫麻

- 我が家は家族みんなが大好きな作品

カメラマン / 平沼久奈

- 海辺の街の銭湯を舞台に、ひとりの高校生のもとへ“父の子”を名乗る少年が訪ねてくる。入り口だけ聞くと重たい題材なのに、この作品は泣かせにかからず、日々の手触りでじわじわと心に入ってきます。湯気、準備の音、常連との会話。銭湯という場所のあたたかさが、そのまま物語の呼吸になっているのが魅力です。血縁や家族という言葉は、時に人を救い、時に人を刺します。登場人物たちは大人の都合の後始末を背負わされながらも、簡単に誰かを悪者にしきれない。その曖昧さを抱えたまま、同じ場所で働き、同じ湯に浸かり、少しずつ関係を作り直していく過程が丁寧です。読み終わると、胸の奥が少しだけほぐれる。だけど甘いだけではなく、ちゃんとビターさも残る。そのバランスが見事で、「帰る場所」とは何かを静かに問い直させるヒューマンドラマとして推薦します。

会社員 / 佐藤優

- 銭湯が舞台の作品。ふぞろいな家庭で育っている高校生たちの話。年齢的に近いお祖父ちゃんに共感。2人の孫たちは、決して熱血漢ではない故に、その行動は面白い。遼馬の着ているTシャツは秀逸。「銭湯開始」「一湯入魂」「湯水の如く」「湯あたり注意」、個性の光るメッセージが書かれたTシャツ。是非とも商品化してほしい。猫の「のり天」も、可愛い。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

- 読めば読むほどおじいちゃんの優しさに涙ぐんでしまいました。そして遼馬君の大人すぎるけど学校と銭湯と全然違うキャラクターが好きです。玲臣くんが必要以上に気を遣うのに対してちょうどいい距離でちゃんと接している銭湯のように温かいマンガだと思いました。これからお父さんのことで修羅場が待っているとと思うけど、この家族ならそれを乗り越えてちゃんと関係を深めていけると思います。でももう少しこの銭湯のような温かい関係を見守っていきたい気持ちもあります。

自営業 / 玉澤綾子

- 話の始まりは全然穏やかじゃないのですが、和みます。出てくる子どもたちが、それぞれ抱えるものがあったりもまっすぐ素直で、他者を思いやる気持ちを持っているから爽やかに読めるのだと思います。舞台が銭湯なものすごく効果的。誰にでも開かれた場所であるからこそ、誤魔化したり取り繕ったりすることのない関係性が築けるのかもかもしれません。自分が経験しなかった青春を追体験できるのが漫画のよいところで、あの頃こんな場所があったら、こう振る舞っていたらと、あれこれ思い出しながら読みました。

主婦 / 堀江千秋

- ひよんなことから、って漫画が好きなんです。この作品はそのツボを押さえまくっており、作品の一部に自分がいるような感覚がしています。世間にささくれた気持ちを整えてくれる作品だと思いました。

ツクリビト代表取締役 / 小野裕子

- 海辺の街で祖父と銭湯「柿の湯」を営む高校生・遼馬のもとに、父の隠し子を名乗る玲臣がやって来る。重くなりがちな設定なのに、随所に差し込まれるコミカルな描写が“湯加減”みたいに効いていて、構えず読めるのがいい。銭湯という裸の付き合いの場には、事情を抱えた人々が自然に集まり、交差し、ひとつずつ心のこわばりがほぐけ

ていく。その過程を追っていると、こちらまでじんわり温まってくる。遼馬は玲臣に「ええやん 甘えても」「だって俺ら子供やし」と声をかける。けれど、その遼馬自身が誰にも甘えていないように見えるのが、まっすぐで、危うくて、はがゆい。柿の湯に集う人たちの小さなドラマも含めて、これから二人をとりまく環境がどうなっていくのか、続きを待ちたくなる作品。

弁護士 / 田邊幸太郎

- 満たされない思いを抱えながらも、それと向き合い、赦しながら力強く日々を送る登場人物たちの姿に心が動かされました。自分がこれまで過ごしてきた、もしくは今見つけることができた居場所。それを大切に思ったり、愛おしく思えたり。そんな優しい気持ちを思い起こさせてくれる作品でした。自分もこんな風に強くなりたい…！

会社員 / 杉佳尚

- 二人の少年の関係が、素直に良いなと思えます。そして銭湯に入りたくなるのも魅力です。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- 柿の湯の3代目柿内くん、最初は少し変な子かな？と思ったけど読めば読むほど魅力的！スパダリでは…となるくらい男前で、彼がいる銭湯に通いたい～。大阪の海の方って行ったことがないから行ってみたいもなった。実写化したら、聖地巡礼したいな。

マンガバー店主 / 岡部愛

- 一次に引き続きの投票です。もはや当事者目線ではなく親か神目線での読者になるのだけど、若い子達が傷つきながらも成長していく姿を見て、ただただ応援したい気持ち。

主婦 / 赤坂真実

- 読んでいて温かいマンガだなと思いました。物語の場所も銭湯で暖かいものの組み合わせが自分も暖かくしてくれます。近くにこんな銭湯あったらよいなと思いました。

デザイナー / 平沼寛史

# マンガ大賞2026 ノミネート作品

熱帯 COMICS/ 光文社

## 「友達だった人 絹田みや作品集」 絹田みや

### 選考員コメント・1次選考

- 表題作含む絹田みや先生の作品集。SNSで繋がった顔も知らない相手。SNS上で沢山のやり取りをしてきた。その相手を友達と呼べるのだろうか……。今の時代を映しながら、それでも優しく温かく包み込んでくれる漫画。ぐっとくる、心に響くという言葉ではもったいないくらいもう一度読みたくなる作品。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 代表作の友達だったひとを読んで、あ〜〜やっぱり同じ思いを感じてる人がいるんだな。と共感できました。すてきな短編集です。

ブックエース上荒川店 / 倉本かおり

- SNSが舞台の表題作はまさにSNSで知ったもので……Twitterが生活の一部になっていた人には刺さりまくるお話に違いありません。SNSが登場したことで、フォロワーという知人や友人とも違う、新たな関係性が生まれましたよね。この近くで遠い絶妙な距離感から生まれる温かさや切なさを、わかる、わかるぞと思いながら読みました。他の収録作も、儼然と人生にエールを送るようなお話で、今読むことができてよかったです。

主婦 / 堀江千秋

- コミティアで出していた短編をまとめた短編集。とても待ち望んでました。全ての話が良くて泣いちゃうのですが、やはり表題作の「友達だった人」は何度読んでもいい！絵の綺麗さと可愛さと、可笑しさと読みやすさと丁寧さと、バランスがすごくいい、ずっとこのままで描き続けてください。

マンガバー店主 / 岡部愛

- 実際会ったことはないけれどSNSで何年も何年も繋がっている人、います。私にも。その人たちとのやりとりを別の誰かに話す時、私は「この前友達がね」からスタートする。本名も年齢も知らないけれど、好きそうな写真やエピソードなら知っている。落ち込んでたら声をかけたいし、怒ったり喜んだりを分かち合いたいなと思える存在って、それはもう友達でしょう！無駄がなくシンプルで、とーん！と心の真ん中を突かれたような感じ。安っぽくなりそうな言い回しだけど、泣きました！

元書店員 / 内野智未

- 「生きづらい」という惹句があまりにもありふれてしまった時代に、それでもささやかな希望を持って前を向こうとする主人公たちの決意に心が救われる。優しく温かい掌編が4本収録された短編集。

コミティア実行委員会 会長 / 中村公彦

- 友人に勧められて読んだのですが、あまりにも“私自身”で驚愕しました。私みたいな人ってこの現代日本にたくさん居るんですか？もしかして……？皆同じように悩んで苦しんで、でもこんな救いを夢見ていて暮らしてるんだなと思うとちょっと心が軽くなります。あとミームネタとツイッターの解像度が段違いで高くてもはや怖いです。優しすぎない、けどあたたかい作品なので私と同世代の人間は読んだらきっといいことがあります。

フリーランス / 金輪英恵

- 収録された4編のどれもが、どこか突飛で、でもなんだか嘘とも言い切れない「ありそうだな」と思われるリアルさと、じわーっと広がる温かさを備えている。自分も疲れているタイミングが多かったりするから余計に刺さってるのかもしれない、けど、出てくる人物の誰かひとりには、己を重ねられそうな人が居て、何かしら染み入るものがあるんじゃないでしょうか。読んでみた人同士で、どの話の、誰にぐっと来たとか好きだったかを話したりして、そのまま自分たちのことを色々話してみたりも楽しそうだなって、思いました。

会社員 / 伊東敬祐

- 誰もが一度は想像すると思う。私が死んでも、フォロワーさんには何となく忘れられていだけなんだろうな…と。そこにいるのは、私であって私でないもので、あなたであってあなたでないもの。ツイッターを舞台にした表題作をはじめ、日常の小さな棘を抜いてくれるような短編が揃っています。永遠に読める…！今後の作品もとても楽しみです。

会社員 / 堀尾素子

- 表題作を読んで涙しないツイ廃の人間がこの世にいますか…いや、いるまい。読み終わってから表紙の絵を見返して、さらに涙…。どの作品もコミティアで頒布された自主制作作品ということにまた驚き。ふだん商業マンガを中心に追いかけている身としては「わたしの知らないところに、こんなものすごいマンガを描く方がいたんだ…」と、思わず遠くを見つめてしまった圧倒的な魅力。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

## 選考員コメント・2次選考

- 切なくて悲しい話もあるのに、何故かポカポカした陽だまりの窓辺でコーヒーでも飲んでいそうな気持ちになります。短編の作品にも関わらず読んだ後に物足りなさを感じないステキな作品です。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 今の空気感を感じる設定、台詞の中で、温かさのあるお話が紡がれます。現代は案外殺伐としていない。SNS で燃えているような事象や人物は、私の目の前の現実世界にはほぼ存在していないし、見えないだけだったとしてもそれでいいはずで、また現実世界にある煩わしいようなものも、それだけが私の世界のすべてではなく、他にいくらでも心地よくいられる場所は存在する。例えば SNS の中にも。「お友達だよ」のシーンと名刺のシーンめっちゃ泣きました。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 生きることによって不器用な人たちを温かく描く短編作品が、収められています。「友達だった人」は、SNS の発信者とフォロワーとの話。どの話も、どこか共感してしまいます。登場人物の背中を押してあげたくなります。印象に残る小品集。活字にしても、心に沁みるような作品です。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

- ひとりぐらしの主人公が、SNS で互いをフォローし合った女性と言葉を交わすようになって、もうひとりを入れた3人でお喋りしていたけれど、オフ会のようなものをするところまでは進まないまま、間もなく女性は亡くなってしまふ。リアルでは1度も会ったことがなかったけど、気になってお葬式に行ったらちょっとしたアクシデントに遭遇して、そこで自分がネットを介しただけの知り合いではなく、ちゃんと友達になれていたことを感じ取る。SNS なんて薄くてその場限りの関係だよって割り切っているけど、ちょっと期待してしまう本当の繋がりへの希望を開いてくれるそんな表題作を始め、子供の頃から仲の良かった女性は漫画を描くようになり、自分は普通に暮らしていたところにコミティアを手伝ってという誘いがあって、ついでにちょっとした漫画を描いた主人公の劣等感と誘った女性の嫉妬心のすれ違う様子を描いた「青色のうさぎ」にもっと自分を慈しもうと思えてくる。ささいでもドラマチックなエピソードをひよいとつまんで絵にしてみせてくれる短編集だ。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

- 自分が大事に思っていることを、大切にしよう。それが読後に思い浮かんだ言葉でした。どの作品も眩しいほどの優しさに溢れていて、つい自分自身にも優しくなれたのだろうか、なんて考えてしまいました。「指先に星」の遠藤さんみたいに、私もこれからひとつずつ思い出していこうと思います。きっと何度も読み返すし、誰かにお勧めしたい。そう強く思った作品です。

会社員 / 杉 佳尚

- 現代は「生きづらい」時代なのか？ 少しばかりの無理がいつしか積み重なり、自分をごんじがらめにしていないか。大切なのはその無理に気づき、自らの手でいましめを解くこと。4編が収められた短編集だが、それぞれのお話に通底する主人公のささやかだけど前向きな姿勢に救われる。

コミティア実行委員会 会長 / 中村公彦

- 友達ではないようで、けれど確かに大切な友達だった、そんな関係を描いたやさしい物語が詰まった本でした。静かであたたかくてそれでいて胸の奥をそっと揺らしてくれる、素敵な作品集でした。

デザイナー/イラストレーター / 鷹嘴 柊子

- 大事に1ページをめくりたくなるような作品。読み終えた後明日も頑張ろうと思える優しい短編集。表題作も好きだけど、他も好き！

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- インターネットの友達って友達なの？ 友達って思ってるけどそう思っていないの？ 誰もが一度は考えたことのある気持ちをスッとさせてくれた表題のお話はすごいと思います。人間のいろんな気持ちを一冊に詰め込んでいて読んだ後じんわりとなります。

ブックエース上荒川店 / 倉本かおり

- 本棚のいつでも手が届くところに置いておきたい。大事なものがたくさん詰まっている作品集です。

オフィスオーガスタ・マネージャー / 樋口健

- 近年たくさんのマンガが単話で簡単に読めるようになり、よほどのマンガ好きでなければ「単行本の作家買い」をしなくなったのでは？と店頭に立っていて感じます。この絹田みやさんこそ、「この人の描くものをずっと追いかけて！」と思わせてくれる作家さん。次はどんな作品を描いてくれるんだろう？と楽しみでしょうがありません。絹田さんのいろいろな表情が凝縮されている素敵な本です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 全4篇の短編集。仕事に追われるうちに自分が何人もに分裂してしまう『3人いる』では、増えた"自分たち"との生活を通じて、見えなくなっていた本来の自分の輪郭が浮かび上がってくる。幼い頃に描いたうさぎの絵が幼馴染の本音を運んでくる『青色のうさぎ』では、憧れと嫉妬のあいだで揺れ続けた関係の、その奥にあった気持ちに胸を突かれる。どちらも派手な事件は起きないのに、淡々と、けれど確かな温度で描いてくるのがすごい。全4篇に共通するのは「わかるわかる」という感覚。名前のつかない感情を、押しつけがましくなくすくい上げてくれる。そしてその共感の先に、日々をやり過ごすうちにいつの間にか手放してしまっていた大事なものを「ここにあったよ」と静かに差し出されるような瞬間があって、はっとさせられる。読後に残るのはじんわり温かいもので、もう少しだけやれそうだな、と思わせてくれる一冊。

弁護士 / 田邊幸太郎

- ジャケットの、可愛いニワトリとパンダちゃんの意味が、それでなんだ、と分かりました。読みながら、自分の友達を思い出し、胸が熱くなりました。

書店員 / 桶谷佳代

- 大好きー！！センスのかたまりかよ！！ストーリー、コマ割り、セリフ、ページの隅々まで良すぎる！全話良すぎる！後書きまで良すぎた！泣いた！私はこの漫画を友人への誕生日プレゼントにします(o^^o)

主婦 / 岸本しのぶ

- 「人は物語の中に自分がいないか探してるんだって」とは本作の登場人物のセリフ。それはもう見事なまでに、この短編集に収められたすべての物語に僕が発見され、勝手に救われたり期待したりと心を動かされました。きっと誰もがそれぞれの超個人的な自分を、さまざまなページに見つけられるだろう、そんなお話たち。

Tokyo Otaky Mode / モリサワタケシ

- 去年出会えて一番嬉しかった作家さん、絹田みやさんの短編集。表題作は何度読んでもグッとくる。親しみやすい絵柄、時代を捉えた物語、ポップで楽しく上手い表現、胸を衝くキャラクターの想い、全て大好き、ブラボー！！これからの活動を本当に楽しみにしています！

マンガバー店主 / 岡部愛

- このタイミングでこの作品が単行本として世にあることが幸せだなと思えるほど、人を優しくさせてくれる短編集。表題作はすでに各種 SNS で話題になっていたとのことですが、それがまた作品世界とリンクしていてとてもよいですね。会社で顔を合わせる同僚や、遠くにいる一緒に暮らしていた故郷の家族よりも、顔すら知らないけど生活の隙間でふと言葉を交わすオンラインのフォロワーのほうがずっと心が近いかもしれない。別に太鼓判を押されなくてもいいんだけど、でも誰かに「友達だよ」って言ってもらえてよかったな。読んだあとのふわっと広がるなんとも言えない優しい気持ちはなかなか味わえないです。他作品についてもどれも柔らかい雰囲気、子を持つ親として、責任持って働く社会人として、立派なおとなとして、でもそんなふうにいるんな顔を持って生きていかなきゃ！と気負うことが多い今、素直にただただ癒されました。この時代の日本を生きるお疲れの皆様、そっと寄り添ってくれるような一冊です。こういう世を映し人を描く短編集のなかでも、本作は今年ノミネートされたとおり今っぽさを感じました。だからこそ今たくさんの人に読んでもらいたいです。

公務員 / 宇田川結衣子

- この先も絹田さんの作品を読み続けたいと思わせる素敵な作品集です。私たちはいつもどこかに少しの違和感を抱えていて、ある時出会った作品によって、それは露わになり、夜な夜な一人でのたうち回っている。人生はこの繰り返しであるといつも思います。いくらでもファンタジーを描けるマンガという世界の中で、ひたすらに日常と向き合ってくれる作品があることに感謝しています。

会社員 / 堀尾素子

- 表紙も、もくじもとっても可愛い！どの作品も印象深く、自分のことのような感覚になる心温まる優しい物語。

生きていくこと、人と関わることに疲れてる時に読み返したい。

営業 / 佐々木つむぎ

- 物語は根っこで繋がっていて、人と人の距離が少しだけズレた瞬間の温度や、言えなかった言葉の重みがじんわり沁みて、読み終えたあとに小さな切なさが残り、静かな余韻が長く続く。

ロングランプランニング株式会社 / 小森和博

- 人と人との出会いや想いあう気持ちの強さ、深さについては、どんな形でもたとえ短くても、その価値に優劣はないはず。SNS だけの繋がりという、ある意味関係性の希薄さの象徴みたいなものをフックにしているけれど、描かれているのは人の気持ちや繋がりあたりのあたたかさで、じんわりと心に沁み込むような優しい読後感。表題作以外も作品の本質に同じような想いが感じられます。

元書店員 / 内野智未

- 表題作のあまりの切なさと、繊細な（そして現代的な）関係性が心を打つ。ネット越しにだって、あるいはそれだけだったとしても、人はつながってられる。

マンガ読み / サイトウマサトク

- 友達の定義や自己愛・他者愛も加齢とともに形を変えていく中で、その過渡期に居る私は読んでいてゆっくりと優しく背中をさすられ、励まされた気持ちになりました。あまりにも「今」の私」の物語で、だからこそ推さねばならぬという気持ちで一票投じます。

フリーランス / 金輪英恵

- 最近（昔からかもしれませんが）コミティアから本当にすごい才能が発掘されるのだなあと実感させられる一冊。登場する主人公たちは、誰もがどこか身近で、友達になれそうだったり、自分に似ていたりする存在。そんな彼らがそれぞれのシチュエーションで、ほんの少し勇気を出す物語にじんわりきます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 決して派手ではないありふれた日常のような物語が、自分の中に静かに響く。自分では気付かなかった「こうあって欲しい」という願いのように。

教師 / 持丸 宏司

# マンガ大賞2026 ノミネート作品

月刊コミックビーム / KADOKAWA

## 「怪獣を解剖する」サイトウマド

### 選考員コメント・1次選考

- 災害としての怪獣が存在する社会で、女性怪獣学者が被災者たちの想いや偏見と対峙し、学者の矜持を貫いて好奇心を優先する骨太のドラマ。同じ著者の短篇集『解剖、幽霊、密室』も好著だった。

書評家・ライター / 福井健太

- 「これを読みたかった！」と心の中で叫んでしまった怪獣エンタメの傑作です！瀬戸内海の島に倒れた怪獣を巡り、被災者としてのトラウマを抱える女性研究者が、使命感と好奇心で解剖現場に挑む物語。特撮への愛はもちろん、民俗学や生物学など著者の約20年に及ぶ読書メモの蓄積から描かれる世界観は、圧倒的なリアリティを放っています。解剖現場を通して見えるのは、ジェンダーや環境問題、風評被害など、まさに現代社会の縮図。そんな重層的なテーマを扱いながら、説教臭さを一切感じさせずマンガの巧さが光る、上下巻でサクッと読める極上の社会派エンターテインメントです！

芸人 / 吉川きっちよむ

- タイトルからも、物語の出だしからも、こんなにリアルで緊密で滋味と落ち着きのあるアンサンブルドラマは想定できなかった。ラストが軽やかで鮮やか。映画化希望！

朝日新聞記者 / 小原篤

- 好奇心に勝てないものだけがたどり着ける景色がある。抗えない災厄が降りかかっても、願いを持ち、人の営みは続いていく。越えた先の未来のために、目の前の危険に挑む。SFは絶望と希望がワンセットなのがイイですね。研究者とエンジニアそれぞれのプライド、学術と技術の集結など、某監督の某有名怪獣映画が好きな方には刺さると思います。無慈悲な展開に過去の日本の災害を思い出すようなシーンもありますが、それがまた現実との地続き感があってリアルです。お仕事マンガでもありながらアカデミック・ジェンダー・環境問題などなどいろんな要素が入っているのに、絵柄がシンプルで無駄のないページ展開、SFとしての型をとりつつ上下2巻にきっちりまとまっており、読み応えがあるのにごちゃつかずスイスイ読ませてくれます！

公務員 / 宇田川結衣子

- 各種ランキングですでに評価が高く、今更感もあろうが、やはり1票入れないわけにいかない。本作の原型となった短編を収録する「解剖、幽霊、密室」も大変面白く、どちらにしようか迷うほどでした。

元新聞記者 / 石田汗太

- あの大地震のあと、我々は巨きなモノたちを組織と社会の力でもって倒し、治め、解剖する術を身に着けたのだなあとしんみりと思わされたマンガ。怪獣を望む者たちの、想像力の行きつく先というか。でも、そこにこそ人の生活もあるのだよな、という思いとか。そういうものを感じられるマンガだ。

流しのソフトウェアエンジニア / 第式齋藤

- 科学者のあるべき姿や、日本における災害との向き合い方を考えさせられる名作！設定や物語はハードながら、シンプルで可愛い絵柄とのバランスが絶妙。上下巻で非常に完成度高くまとまっており、ぜひ手に取ってほしい作品です！

会社員 / 小野塚博之

## 選考員コメント・2次選考

- 登場人物の名前などに、知らなくてもストーリーには何の関係もない小ネタ入れてます的なSF・特撮ファンらしいノリが感じられて楽しい。人間の一生を通じて、その一端が垣間見える程度しか進まないであろう、また解明しても対策など不可能かもしれないという怪獣の謎の研究がいかにも雄大であるかを感じさせてくれる構成が見事。災害でトラウマを負った少女が災害の研究者となって立ち向かうという骨子は王道だが、SF的な設定の味付けや、描かれる人間ドラマの演出は素晴らしく、大作映画を観たという満足感がある。

駿河屋梅田茶屋町店 店員 / 小磯洋

- 怪獣という巨大な、謎の存在が現れ、都市を脅かすようになった世界で、野垂れ死んだ怪獣の遺骸を、解剖し、解体し、分析しようとする人たちの物語。東日本大震災後の想像力と、その想像力によって作られた怪獣フィクションの結実点のひとつ。天与の未知の災害である怪獣と、組織と人智とでもってそれにあたる人々という対比で、お仕事マンガの様相も強い。かくあれかしと望まれた物語であるな、というのが俺の感想。せめて理不尽をもたらす大災害は、ただの事象として、ただ人の死と無力と怠惰を示すものでなく、スペクタクルと新たな発見をもたらすものであってほしい、という淫した願望の現れ。そんなものにも、我々は重機と防護服と規約と多重請負構造とで立ち向かうしかねえのだ、という呆れ／諦念の現れでもある。未知との遭遇、って点においてはびっくりするほど愚直なサイエンス・フィクションだったし、すげえ率直な、人間の知の営みに対する賛歌だったわ。

流しのソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 「怪獣もの」のパロディーか？とタイトルだけ見て勘違い。中を開けば、サスペンス×ホラー×お仕事ものなど多彩な要素を、芯の通った人間ドラマでまとめてみせる。サラリとした絵柄、シンプルな作劇、軽やかにボンと飛ぶ心地よいラストも、きれいにまとまっている。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 「怪獣」を描きながら、これは私たちの現実の話であると思わされる作品です。怪獣と名の付くものに縁がなく、普段は自ら手に取ることがないのですが、今回このような形で出会えて本当に良かったです。読み進めるうちに、これは…？と思い、下巻の巻末を見ると、参考資料に科博の田島先生の本が。なるほどと一人で頷きました。一般的な怪獣の定義というものがあるのだとすると、私はそれに関しては全く理解をしていないのですが、この作品で重要なのはそこではないのだと思いました。「私は私という現象」という台詞が心に残って、目から鱗が落ちたと言いますか、不思議と少しだけ気持ちが軽くなりました。

会社員 / 堀尾素子

- 学者の価値観と被災者の想いを対置し、立場が異なる人々のドラマを上下巻にまとめた大型新人の単行本デビュー作。短篇集と併せた三冊同時刊行は期待の大きさを感じさせる。

書評家・ライター / 福井健太

- 災害、環境、男女格差等、様々な問題を怪獣の解剖というテーマを中心にうまくまとめた作品。この作品で初めて作者を知ったが今後も追いつきたい。

会社員 / 齋藤隼

- 巻末の三宅乱丈先生の寄稿にあった「それが何であるかを解剖するという作家の力で」という一文に全て詰まっていると思った。私が後悔していること、言えなかったこと、悩んでいたこと（つまりは過去）が全部入っていて、知りたかったこと、思いもよらなかったこと、こうであってくれという願い（つまりは未来）も、全部入っているマンガでした。マンガでやれること全部やったださってありがとうございます、私もがんばります、という気持ちです。

ライター / 門倉紫麻

- 「怪獣」という巨大なファンタジーと、「研究」という地に足がついたリアルなディテール。その間を行き来するうちに、すっかりこの物語にのめりこんでいる自分がいました。まず惹かれたのは、怪獣被災者でありながら、怪獣学者の道を歩む本多さんの弱さをも飲み込んで突き進む強さです。好奇心を原動力に、未知を既知へと変えていく姿には痛快さすら覚えます。そして、「怪獣を解剖する」というシンプルかつエンタメ性に満ちた導入から、「怪獣」とその怪獣を取り巻く社会そのものが、現実に抱える問題を映し出す鏡のように作中で機能していることに感動しました。サイトウマド先生が次にどんな長編を描いてくれるのか、今から楽しみです！

芸人 / 吉川きつちよむ

- 骨太なテーマを、軽やかで可愛い絵柄で描く絶妙なバランスに脱帽。科学者のあるべき姿や日本における災害との向き合い方を問う名ゼリフの数々に、何度もハッとさせられます。怪獣の謎に満ちた生態や神秘性も丁寧に描かれ、SFとしての面白さも抜群。上下巻で過不足なくまとまった名作です！

会社員 / 小野塚博之

- 今回のノミネートをきっかけに本作を読みましたが、すっかりハマってしまいました。怪獣を解体するという題材に少し思うところもあったのですが、読み始めるとリアリティとSF的ファンタジーのバランスが絶妙で、登場人物たちの人間関係にも惹き込まれ、一気に没入してしまいました。怪獣というファンタジーを通して現実社会の課題に触れる構造の巧みさと、重くなり過ぎない画のバランスが素晴らしかったです。読了後に残る「もう少し読みたい」という程よい飢餓感も心地よく感じました！とくに金子君が好きで、思わず「続き出ないかな〜！」と願ってしまいます。

声優 / 綾瀬有

- おしゃれな表紙だったから油断した。読み始めてすぐに気付く圧倒的骨太ドラマ。引き込まれて目を離せなくなり、冷蔵庫も開けず、トイレも行かず、一言も発さずに読み終えた上下巻。そう、上下巻。今これを書くために読み返して、こんなに短かったんだと驚いたほどに詰まった情報や感情。現に未だ消化仕切れておらず、この物語が胸につかえている。

Tokyo Otaky Mode / モリサワタケシ

- 巨大な怪獣の処理を巡るお話の中で、災害と被災後の人生、働く女性の身に起こる問題、恋愛などさまざまなことが描かれて、読む人の数だけ、読んだ回数だけ読み方がある作品。丁寧に描かれた人物像が物語の中により深く入り込ませてくれます。また、散りばめられた特撮の小ネタも楽しいです。

医師 / 岸本 倫太郎

- こういう話を漫画にするとこうなるのね、と、妙に得心のいった漫画でした。ストレートな魅力のある漫画です。

めがねっ娘教団教務大司教 / 田中海渡

- なぜ研究が必要なのか、災害が起きたそのあとはどうになってしまうのか、などの現実で起きうる事なのに中々実感することの無い事象と、非現実的な存在の怪獣がテーマとして上手く溶け合っていてとても面白いSFマンガです。ギャグとシリアスシーンのバランスもよく読みやすい。

会社員 / 竹本 慧

- 幾度となく流された悲しいニュースが、また何年か以内に何パーセントかの確率で、場所もわからず到来するかもしれない。また未知の病が蔓延して、世界のあり方が変わるかもしれない。突然訪れて、今までの日々をガラガラと崩してしまう。その恐怖は、心の底にしっかりとこびりついていて。共通認識のように刷り込まれたこの恐怖は、怪獣だったんだ。私たちの日常にも、怪獣がいるんだ。衝撃でした。是非読んでほしい、と思った作品です。

会社員 / 杉 佳尚

- 昭和ゴジラの1st世代としては、こうした「人知の外の存在」として怪獣を描く設定にワクワクする。怪獣の生態・行動はつねに人間の想像の範囲を越える。それは例え生物学的には死んだ後であってもだ。だからこそそれに立ち向かおうとする人の勇気と知恵と少しばかりの好奇心に惹かれる。作中の登場人物たちに幸多かれと願う。

コミティア実行委員会 会長 / 中村公彦

- 圧倒的な災害の象徴である「怪獣」。その死骸を淡々と解体し、処理してゆく。恐怖に立ちすくむのではなく、未知なるものに誠実に向き合い、「既知」へと変えていこうとする姿は、人間の知性のすばらしさを感じます。災害時特有の不穏な空気と、現場のプロたちが淡々と作業を進める美しさのコントラスト。その臨場感に引き込まれる一方で、物語の底流には、地方の風習や文化、そこに生きる人々の深い眼差しが流れています。正体のわからないものを恐れるのではなく、知る努力を続けることで、世界はきっと良い方向へ進んでいける。漠然とした不安を抱える現代で、静かに足元を照らしてくれるような、知性の物語だと思います。

システムエンジニア / 廣瀬公将

- 怪獣ものの新しい角度。作者の怪獣作品へのリスペクトがクオリティの高さにつながっている。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 「言いたいことがある」マンガが好きだ。本来、マンガは映画などとは違って純粋に「個人」の営為の結晶で、1人のマンガ家の頭の中で夢想され、発想され、熟成されて形をなして流れ出て、それがたとえば小説などとは比較にならないくらい桁違いに多くの読者に届く。ただ、そうした個人の営為とばかりも言えない作品も数多くあって、マンガ家が描きたいことを描くということ以上に、出発点がマーケティング的な、ある種のチームというか、システムによってつくられる「こうすれば読まれるだろう（売れるだろう）」的な作品もむしろ多い。それらが悪いとかつまらないとかではないし、実際におもしろい作品もたくさんあるのだけれど、読み手の自分としては、1人の描き手の頭の中からとどめようもなくあふれてくるマンガを読みたい。この「怪獣を解剖する」はそんなタイプのマンガで、まったく予断なしに読み始め、読んでいるあいだ頻繁にそんな「描かずにいられなくて描いた」空気を感じられたところがとても好ましかった。過去何十年にもわたって世の中で読まれ、観られ、語られてきた膨大な作品群、そして社会の出来事そのものに様々にインスパイアされつつも、まごうことなき「個」がつむいだ作品になっているところは、マンガという表現形式のすごみを感じさせ、読んでいるのに描いているような、作者の想いに読み手の自分も重なり溶け合い同化するような、マンガを読むときにしか体験できない至福を味わえる。作者のnoteによると2023年に読み切りとして世に出て、24年から連載され、25年に上下巻とした単行本化されたそうで、まさに「現在」の作品なのだけれど、マンガの原点のようなものも感じることができてうれしい時間だった。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 「学者は恐怖より好奇心を選択する人種だ」芹沢教授の言葉に納得、だから人類は発展できたんだろう。「未知を即知に変えることが防災に繋がるからです」本多の言葉に納得、だから人類はここまで生きながらえたんだろう。シンプルな絵ではあるが、説得力のあるセリフと、まるで専門書のような怪獣の説明と解剖図がリアリティを増し、没頭させられ、読み応えがある。キャラも人間味溢れてて、環境問題にも触れていて、久しぶりに良質なSFを読んだ気がします。

元コミック担当 / 実松由夏

- 震災、ハラスメント、働き方、ここ最近のたくさんの問題が、怪獣を通して描かかれているようで、なんとかしてくれ！って、思いながら読みました。なんともならないことも、なるほどって思うことも、たくさんたくさん詰まってきました。なんとかしなきゃなって思えるようになりました。

オフィスオーガスタ・マネージャー / 樋口健

- こういう漫画に出会うために、マンガ大賞はあるのかもと思った。今回のエントリー作はどれもこれも面白くて、映像作品になったらもっと面白いとかキャラクターがかわいすぎるよおなどと興奮した作品もかなりあった。間違いなくおすすめできるものばかり。しかし誰かが発掘して教えてくれて初めてまた違う誰かの心にブツ刺さる作品っていうのが存在すると思う。それがマンガ大賞で私がこれまで出会ってきたいいくつかの作品だ。そしてその一つがこれだと思う。世界観、絵、キャラクターの言葉たち、唯一無二の存在感。やはり誰かに手に取ってほしい。そして誰かにブツ刺さってほしい。

クラスター株式会社広報 / 西尾美里

# マンガ大賞2026 ノミネート作品

週刊ビッグコミックスピリッツ / 小学館

## 「路傍のフジイ」鍋倉夫

### 選考員コメント・1次選考

- 影が薄い独身中年サラリーマンの藤井は、周囲から軽く扱われることもあるが、質素な生活を当の本人は最大限に謳歌している。説教臭くもならず、この距離感であれよあれよともう5巻目。読むたびに手の中にある仕合わせをちゃんと感じられているかを問われる。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- 生き方を考えさせられる漫画。フジイの過去の友達のエピソードは感動と哀愁が混じった妙な感情が湧いた。

株式会社 radiko / 澤田真吾

- 巻が進んでいくにつれて、「フジイ」の底が見えない魅力にどんどんハマってしまいます。わりと社交的だし謎の行動力や好奇心も持っているし、空気も読める。自分は周りの人間の立場にいて、彼みたいな人が生活圏にいたらいいね、と思ってしまいます。ただ、こういう人はいそうでない。物語は「フジイ」に近い視点、友人や同僚たちの視点、第三者の視点と、話によって変わるのが面白いです。

書店勤務 / 野口忠義

- 何の為に生きているのか。それを幸せという言葉を使うと実は多くを見誤る。我々が目指しているのは、アリストテレスが言うところのユーダイモニア、いまの言葉で言うと、ウェルビーイング！ 私は2025年4月から、大学院でウェルビーイングの研究をしています。ただ、ウェルビーイングって、専門家でも説明がめちゃくちゃふわふわしてるんですね…！ 私は「いきいき」という言葉が一番よく当てはまると思っているのですが、この言葉で多くの人が想起しちゃうのは、健康なお年寄りの健全な生活。それももちろんウェルビーイングなんですけど、それだけじゃないんだよ、もっと色々あるんだよ、そして嬉しいとか喜びだけでもないんだ、充ち満ちていることは、ほかの状態でもあるんだよ、とどうやって伝えたらいいんだ！ と思っていたときに会ったのが、フジイ！ 特に職能があるわけではない40代、「あいつノリが悪いよね」という扱いを受けている傍から見たらうだつの上がらない彼。でもそんな外の評価とは一切関係なく、他の誰とも自分を引き比べることなく、自らの興味を淡々と、でも嘘なく追求し続ける。結果ではなく、過程の中にある味わいこそ本物、と迫力をもって伝えてくる、ウェルビーイングの物語がこの作品。フジイは、いま一番求められる、最強のメンタルヒーローです！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 読んでいると心が苦しくなったり温かくなったりを繰り返して、精神的デトックスになる漫画だと思います。

PENICILLIN / HAKUEI

- 日常ほのぼのマンガで中年男性向けというのは割と珍しいジャンルかと思いますが、とにかく引き込まれます。作中の人物たちを惹きつけるばかりでなく、読者までもが藤井さんの不思議な魅力にやられます。読後感もよく、自分もがんばろう！という気になります。

弁護士 / 三葛敦志

## 選考員コメント・2次選考

- 人として大事なものしかもっていない男……藤井……人間！

作家 / 海猫沢めろん

- 常に誰かと自分を比べてしまう現代において、何かを決めたり何かを愛する時の基準を常に自分の中に持つこととても難しい。それを気負うことなく、自然体で行える藤井さんは本当に凄いです。そしてそんな藤井さんを通して自分を見つめ直し、静かに暖かく微笑む周囲の人たちもとても愛おしいです。心の中にポッとささやかな明かりが灯る作品だと思います。なんだか毎日疲れるな～と思っている人にぜひ読んで欲しい。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 自分の現在の生活と照らし合わせて、自身の価値観やモノの見方をプラスの方向へ変えてくれる作品だと思います。この作品に限らず、漫画を読む醍醐味の一つとして、確実に自分の中で変化が起きる作品というものがある、この漫画はその筆頭格じゃないかと思います。実生活ではどうしても自分の事だけでいっぱいになってしまうので。この作品のキャラクター達が一生自分の人生の片隅にいるだろうなと思いました。

会社員 / ターシ

- ドラマチックな事件は起きないが、幼少期から少しずつ形成されていくフジイの人となり、なぜか自分の感情と重なる場所があった。自分が歳を取ったせいなのか、ささやかな出来事のそれぞれが愛おしく、気づけば“フジイ”と友達になって話してみたいと思っていた。

ロングランプランニング株式会社 / 小森和博

- 今の社会で生きていくうえで必要な考え方が、ストーリーを通して、とてもうまく描かれている。時折見せるフジイの人間性・感情の表現に、心を震わされる。

株式会社 radiko / 澤田真吾

- 昨年のマンガ大賞で出会った「フジイ」。わたしの隣にもひょっこり「フジイ」が現れてくれたらいいのにな…と、あれからずっと思っています。自分の中に軸のあるフジイがいつも羨ましく、このマンガを読むたびに自分の中にたまった澱みがリセットされるような気がします。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- SNS 全盛の時代、読んだ人を最も元気づけてくれるであろう作品です。実は生きているだけで幸せと実感できますし、藤井さんと一緒に酒が飲みたい……素直にそう思わせてくれます。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- 矛盾した言い方になるけれど、さえないサラリーマンの魅力あふれる物語。大賢は愚なるごとし、というようなエピソードは中国古典には結構あるけど、多くの人に評価されるのは時代のなせる技か。個人的には大好きな物語の型なので読んでいて楽しい。こういうマンガが目ざされたんだという記録としてもぜひ受賞してほしい。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- とにかく淡々と丁寧！

カメラマン / 平沼久奈

- 今の時代、むしろストレートに共感される生き方、いい悪いをこえて、納得しながら読んでしまう。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- なんで、こんな目立たない40歳過ぎのおじさんが気になるのか。なんで、彼の周りにはふと人が集まるのか。日常ほのぼのの中年おっさんマンガ（でグルメでもない）という、一見不思議な作品ですが、とにかく引き込まれます。おじさんたちの希望の星かもしれません。明日もがんばろう、もっとよくなろう、と思ってしまいます。

弁護士 / 三葛敦志

- ある人から見ればつまらない人に見えるのかもしれない。ただこんなに誠実な人はそうそういない。フジイのような人が側にいればきっと穏やかな日々が送れそうな気がする。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- これは主人公フジイの周りに集う人々を通して描かれる「人間賛歌」なのだと思う。「すこし嫌な人」の「すこし嫌」な部分と、そうでない部分を両方描いて、それでいて淡々としているのがこの作品の良いところだし、主人公がフジイであることの意味だ。そこに彼の魅力もある。人間のさまざまな切片を、ここまでの解像度で描ける作家はそ

うそういない。推すべき作品。

マンガ読み / サイトウマサトク

- 様々な人が出てくるこの漫画を読んで、こういうのいいなとか、こういう人とは仲良くなれないなーとか思うけど、作中では明確な肯定や否定をすることが少ない気がします。こういう人たちがいてこんなことをしたという感じで、先生の目を通した人間観察を見ているみたい。それが心地よく面白い。

声優 / 富岡美沙子

- 現代らしいマンガではないでしょうか。淡々としているけど全ての人を救う優しいマンガのように感じる。フジイという人は現実にはなかなかいないだろうけど、いそうにも見える。そして現代らしいヒーロー像にも感じる。誰もが自由に生きたいし、世の中のさまざまなしがらみから解放されたい、そして善良でいたいという本当は求めている理想の大人像のようなものをフジイから感じ、またそれは絶対的な強さを持つヒーローではなく、淡々と自分を持って生きる、のような悟りの姿勢をもつ人なのだ。疲れた大人を癒していく新しいヒーローマンガなんだと思う。

クラスター株式会社広報 / 西尾美里

- この地味さを確信を持って描いて、しっかり届いているのは立派すぎます。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 傷付きそう、でも傷付かない、そして傷付きそうなことに気づいていないわけでもない。どこの職場にもいる40代、フジイが経験するあれやこれやは、今の日本のどこでも起きていることばかり。同じようなことを経験したら、同じような反応や感想を抱いちゃうのは当たり前、かというところ…！ 周囲のなんとはいない不運や、どうしようもない愚かな人や、もしかしたら悪意などにふれたとき、私たちはテンプレートのような反応を、無意識にしていってしまうのでしょうか。フジイは、セリフだけ取れば、言っていることはごくごく当たり前。でも、その言葉を発するまでのフジイは、その物事の意味を、正面から受けとめている。フジイがどうやってそこたどり着いたか、一緒に読んできた私たちは知っている。マンガとは、誰かの事情を知ること。もしかしたら、私たちの周りにも、フジイがいるかもしれないんだよね、という気持ちにさせられる、こんなにマンガであることの意味が深い作品は、ない。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 昨年強く推した作品。根強く今年もランクイン！作品力は十二分。今回こそ！！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- ダイナミックな物語の展開があるわけではなく、蜘蛛の巣のような謀略智略があるわけでもなく、フジイという、まさしく路傍と見なされてしまいそうな人物の生き様を見る作品。6年生を送る会でカリスマックスが採用されるほど時代は変わっていますが、フジイという存在の幸福論みたいなものは、それこそニーチェが説いた超人のように、変わらずあり続けるんじゃないかと思います。

会社員 / 布施直人

- まわりとあわせることもなく、でも否定もしないフジイの生き方にうらやましさを感じつつフジイに影響される周りの変化も面白いと思えるコミックです。

ブックエース上荒川店 / 倉本かおり

- なぜみんなフジイのことが好きなのか、がじっくりじっくり描かれていて、読んでいるこちらもちょうど進むごとに、フジイのことも周りの人たちのこともじっくり好きになっていけるのがとてもいい（フジイのことは最初から好きだったんですけども！）。

ライター / 門倉紫麻

- 地味なのに目が離せない。周りが勝手に価値観で測ろうとするほど、藤井の「測れなさ」が気持ちいい。読後に自分の「幸せの基準」を点検したくなる漫画。

会社員 / 平沼良章

# マンガ大賞2026 ノミネート作品

少年ジャンプ+ / 集英社

## 「サンキューピッチ」住吉九

### 選考員コメント・1次選考

- 登場人物全員が強烈にキャラ立ちしており、ポケとツッコミが飛び交う会話だけでも十分すぎるほど面白いです。一日三球しか全力で投げられない投手という縛りを軸に、ルールの際を突く戦略、メンタルを揺さぶる言葉、極限状態で迫られる選択。そのすべてが論理的でありながら、異様なほどエンターテインメントとして完成されています。軽やかにふざけているように見えて、その裏側ではすべてが緻密に計算されており、気づけば高度な心理戦の只中にいる。その緩急の付け方が見事です。その大胆な振り幅を成立させているのは、住吉先生の漫画力が圧倒的に高いからにほかなりません！

接遇スペシャリスト / ライター / 田邊加奈

- とっても面白い！……けど、野球漫画と思っては読んでいないかもしれません。毎ページ毎ページ翻弄されながら気づくと読み終わっている、そんな漫画です。『1日3球しか投げられない天才ピッチャー』この設定だけでここまでお話を広げられるということに毎度感嘆しています。

会社員 / 津田圭

- シンプルに強い作品で、キャラ・発想・台詞回しなど野球に興味の無い人間でも引き込むトリプルコンボが綺麗に決まっており、勢いもテンポも良いとなれば取り上げない道理がないくらいには面白く、実際ネットで切り抜きの一コマを見て「なんだこれ？」から購入してみて全巻揃えるに到った怪物。

住職・ライター / 蟬丸P

- 制約が単純であるほど、それを逆手に取る戦術は無数に生まれる。というのは異能バトルの基本ですが、創作で実践するには作者への負担がかかり過ぎます。デビュー長編『ハイパーインフレーション』で、この実践を前人未踏と思われるほどの域まで追求した住吉九について、こんな人智を超えた創作が長く続けられるわけがない、次回作はもっと「ふつう」に少年マンガをやるでしょうね、と思っていました。本作ではもちろん、第一話から「制約を逆手にとった戦術戦、がフルアクセルで嵐のように展開され続けており、ああ……そう……住吉九先生ならそうされるでしょうね（正気か？）とたいへん頼もしく思い、そして恐怖しています。

作家 / 灰都とおり

- 野球という間口の広い題材とケレン味たっぷりで活力に溢れた作風が噛み合った素晴らしいエンタメパワー。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- まず前提として住吉九先生の前作であるハイパーインフレーションが凄く面白いんです。変態が多いし（褒め言葉）アヘ顔あるし（好き）人には薦めにくいけど面白いです。今作は野球が題材なのでそういう意味ではマイルドになっている？ので薦めやすいです！笑。キャラクター達は個性派で凄く面白いです！！野球漫画としても面白くて、セリフや理論を読むのも楽しいです。おすすめします！

主婦 / 岸本しのぶ

- 「野球漫画の文法」をメタ視点で再構築する、異色かつ技巧派の作品。野球まったく興味ないのに読める！こういうのが読みたかったんだよ！

作家 / 海猫沢めろん

- 1日とんでもなく強い投球を「たった3球」しか投げられない主人公が甲子園を目指す。なんて新しい！どういうこと？！と引き込まれる設定。その制約がとんでもなく面白い。野球というスポーツながら「いつ、どこで、この3球を使うか」を必死に考える頭脳戦…これだけでもワクワクしますがちゃんと野球だし、でも予測できない展開という異色の作品です。

図案家 / 橋本寛子

- 贗札をめぐる騙し合いを描いた『ハイパーインフレーション』の著者による野球漫画。三球しか全力投球できない怪物投手を駒として、策謀家たちの仕掛けとスポーツが絡まる独自の頭脳バトル空間を生んだセンスが圧倒的。

書評家・ライター / 福井健太

- 本作は野球マンガだけど野球マンガじゃない、何かもっと恐ろしいものだ…。むしろこれは動画サイトの実況動画に近い楽しみではないか？われわれは高校野球というゲームをプレイしている、とんでもなく濃い登場人物たち＝配信者たちの、その濃いキャラクターと余裕で想像を超えてくるインタラクションに毎話心を撃ち抜かれているようだ。そして作者による登場人物たちのキャラの掘り下げは、まだまだ留まるところを知らない。

会社員 / やのこうじ

- これは野球版『カイジ』だ！ ファンタジー世界の通貨バトル、というかなりな奇想を扱った前作『ハイパーインフレーション』も大好きでしたが、一応、多くの日本人が知っている「野球」というスポーツのベースに入れ込んだおかげで、なんと読みやすくなっていることか！ 1日に3球しか全力で投げられないピッチャー、誠実に見えて常に策略を巡らすキャプテン、性格が一部の同情の余地もない実力者、野球の実力はそこそこだけど演技力が抜群にある脇役…！ いやもう、でてくるキャラクターたちも一人一人が濃い濃い！ なかでも、野球を知らないダメ監督が、前作に引き続き身長の大きいたくましい女性…！ 「自分はこれが面白いんじゃない！！！」という圧をもってゴリゴリに襲いかかってくるこういう作品、大好き！！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- まだまだ野球マンガにもやり様はあるんだぜ？ってことをまざまざと見せてくれたマンガだなあ。こんな戦い方があるんだ…と感心した。かなりテクニカルではある。ピーキーに技術的、ということでもあるし、トラックに銃座を据えた乱暴な即席戦闘車両感もある。あのくっそ汚いモモカンを生み出した時点ではあ…野球マンガとしてもちゃんと面白いってのが卑怯だよなあ…

流しのソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

## 選考員コメント・2次選考

- 『1日に全力投球出来るのは3回まで』たったこれだけのネタでここまでにお話を広げられる、ということにいつも驚かされます。毎話スキなく衝撃のエピソードが詰め込まれていて、飽きずに楽しませてくれる作品です。キャラのアクの強さもすごい。

会社員 / 津田圭

- 主人公のピッチャーとしての能力があまりにも規格外だったので超人系野球漫画かと思っていたら、話が進むにつれリアルで論理的な戦略のやりとりが始まってびっくりしました。主人公チームのキャラクターの濃さはもちろんのこと、敵チームも単に敵として倒していいとは思えないほどの熱量で描かれていて、話においてもキャラクターにおいても、意外性やギャップがとても活きているところが魅力的でした。野球を知らない人にもわかりやすいよう、工夫もされていると思います。めちゃくちゃ面白かったです。

主婦 / 堀江千秋

- 野球という間口の広い題材とケレン味たっぷりで活力に溢れた作風が噛み合った素晴らしいエンタメパワー。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 読み始めてすぐに胸が熱くなった。

PENICILLIN / HAKUEI

- マンガの醍醐味は、脳内で自然に浮かんじゃう「そんなことないやろ！」という無粋なツッコミを、マンガの方が軽々と越えていってくれたときの気持ちよさ！今年最大のツッコミどころ満載作品、ではあるんだけど、ツッコミは全く野暮であることに、もう、1話で気づいてしまう。3球しか投げられないピッチャーって、そりゃないやろ！メンタルが絵に描いたように弱くて、それがそのまま投球に出ちゃうエースって、そりゃないやろ！！なんだけど、そこで読むのを辞めさせない迫力、そして辞めなかったときに訪れる、今までにはなかった面白さ、というか面白さなのこれ！？という新しい味わい。ストーリーを伝えるためとしてはフェチが詰め込まれ過ぎてるキャラクターたちも含めて、この疾走感、止まらない！！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 野球がむかしから嫌いである……だがしかし……これは……おもしろい！

作家 / 海猫沢もろん

- 普段野球漫画をあまり読まない自分にも、この作品が野球漫画としてかなり異彩を放っているのが解ります。エースピッチャー「正ちゃん」のキャラクター性を始め、これまでの野球漫画にあった固定イメージを壊そうとする意志を端々に感じますが勝負になればしっかり熱いです。ロジカルな戦隊モノを見ている様な感じですね。

会社員 / ターシ

- コンゲーム漫画の傑作『ハイパーインフレーション』の著者が描く野球×頭脳戦。スポーツの諸要素を有機的に絡ませ、濫造されがちなジャンルに斬新な切り口をもたらした構成力には別格の感がある。独特のギャグセンスも楽しい。

書評家・ライター / 福井健太

- 野球に興味がなく、野球漫画もさして読まない人間を引き込むパワーが凄まじく、弱点設定などのキャラ立ちもさることながら、ツッコミの日本語センスが光っており、キャラよし・ギャグよし・テンポよしの三拍子が揃っているので、こりゃ話題になるなという納得の突破力がありました。

住職・ライター / 蟬丸P

- とんでもなく強い投球を「たった3球」しか投げられない主人公が野球で「いつ、どこで、この3球を使うか」を必死に考える頭脳戦…の設定が本当に魅力的。「究極の選択」を毎試合、毎投球ごとに考えさせられる。スポーツマンガの所謂、友情やバッテリーの絆だけではない、予測できない展開に惹き込まれます。

図案家 / 橋本 寛子

- 「三球しか投げられないピッチャー」という設定の妙にまず心をつかまれます。制限があるからこそ、一球ごとの重みと駆け引きが際立つ。読んでいるうちに、その心理戦の熱さにどんどんハマってしまう感覚は、「ハイパーインフレーション」にも通じるものがあるかも。キャラが立ちまくっている登場人物たちも最高です。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 私のような野球ミリシラ勢でも野球にほんの少し詳しくなれる気がするような、妙な説得力のある戦略描写と、その駆け引きに引き込む、あまりに味付けの濃いキャラクターの数々。ズルいとしか言いようがない野球マンガです。本人たちは至って真剣に勝利を目指しているのに、全員が全員ほんとうにスキルツリーとメンタルが変態の域にあるため、読んでいて口角が上がるのを止められない。変則・変態・邪道ながら、ある意味王道な少年マンガ体験を与えてくれる作品です。

株式会社ムービック / 岡部真矢

- 野球漫画という枠に収まる気は、最初からまったくないようです。3球しか全力で投げられない投手という制約を軸に、ルールを突き、言葉で相手の神経を削り、シビアな選択を迫る。あまりに論理的で、気づけばこちらの思考まで翻弄されています。それなのに、会話はずっと面白い。ポケとツッコミの応酬だけでも成立してしまいそんな熱量のキャラクターたちが、全員もれなく異様に濃いのです。「いい話」を読んでいるつもりだったのに、いつの間にかサイコホラーの気配が混ざり、次の瞬間には頭脳戦に突入する。この振れ幅を無理なく成立させているのが、本作の恐ろしいところです。ふざけている顔の裏で、すべてが計算されている。笑っていたはずなのに、いつの間にか手汗びしゃびしゃになる。エンターテインメントとしての完成度と、構造の緻密さがここまで両立するのかと、毎度思わず唸られます。

接遇スペシャリスト/ライター / 田邊加奈

- 一次で推すかどうか迷ったが結局入れなかった。大好きだが、なんかあまりにも「特異」な作品のような気がして……。しかし、二次で他の作品と並べてみると、この特異さ、振り切った感じが余計際立って、むしろ落とせなくなってきた。最近、野球に限らずスポーツマンガの分野が新たなフェーズに入った感があるが、その先端をゆくのが本作。主人公の桐山が3球しか全力投球できないという「縛り」がまずすごくて、そのヘンタイ的設定を逆手に取り、面白く見せる試合展開のうまさに唸るばかり。しかも、脇役もみな別の意味で野球大好きヘンタイ揃いなんだからたまりません。悪人がおらず、全員が孔明みたいな策士というのも極めて今風。考えてみれば、メジャースポーツは誰でもある程度ルールを知っているから、説明抜きで本題に入れるメリットがあるんですね。スポーツマンガが無限の容れ物であることを証明した見事な怪作です。

元新聞記者 / 石田汗太

- 野球をテーマにした異能力カードバトルといった印象。ベンチをデッキとして考え、そこにチームメイトのカードをセットし、それぞれの持つ制約つき異能力をどの局面でどう使うか～といった感じ。野球そのものとは違った部分で、能力や駆け引きの説明が入ってくるので、スポーツ漫画ではあまり見かけることのないレベルで文字が多いと感じるが、そこにパズルゲームで連鎖が決まったときのような感覚がある。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 汚ねぇぞ！ というのが第一印象。まぁ正統ではない。というか野球マンガの正統/王道/覇道の先達があまりにも偉大すぎるというのがある。なんならリアルの方も、現実離れしている人が現実離れした大活躍をしている、現実さんにはまともな編集者がついていないから好き勝手し放題だ。現実さんはもうちょっとキャラクターというものについて考えたほうがいいよね。というわけで野球マンガにおける邪法/妙法の頂点みたいなマンガになり果ててる。ピーキーだな～とかテクニカルだな～と思う。技術的、という意味でもあるし、軽トラに機関銃を据えつけた即席戦闘車両感もある。なにはともあれ、ちゃんと面白い、それに巧みさ、狡さは感じる。邪智奸佞、伶俐狡猾の類。ちゃんとワンアイデア、ワントリックを、しっかりとキャラの魅力と野球マンガのストーリーテリングにそつなく落とし込んでるのがズルい。汚いモモカンこと阿川美奈子という強烈なキャラクターを生み出しおきながら野球素人なので彼女に対してルール説明をしなきゃならん、とかちゃんと野球マンガとしての役割与えてんじゃねぇぞテメーとか言いたくもなる。ズルいなあズルいなあと思いながらページめくるたびにゲラゲラ笑った。主要登場人物が軒並み異常者だからこそ、ツッコミ役の名もなきモブたちがそこそこレバーなのが現代的/当世風であることだと思いました。みんな妙にリテラシー高いんだよなあ。なんで君ら野球なんてやってんだ？

流しのソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

- タイトル「サンキューピッチ」の意味が一話の中で覆されて、また戻ってきた。展開しにくい設定なのかと思ったが、そんなことを全く感じさせない面白さ。読んだことのない令和の斬新な野球漫画。軽快なギャグと言い回しも心地よく、とても好きでした。

スターダストプロモーション・タレント / 秋本帆華

- 野球漫画の皮を被った謀略漫画。「勝つために策を巡らせる」は勝負事には付き物だけど、高校野球のアマチュア精神は何処へやった。爽やか笑顔のキャプテンが一番邪悪。(褒めてます)

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 気が狂った奴らしいなくて最高！いろんなヘキが詰め込まれているので必ず刺さるキャラがいるはず。読んだら好きなキャラを教えてほしいです。私は正ちゃんです。野球漫画の第一話目のタイトルが「野球部狩り」なのも好きです。私は阿川監督と同じくらい野球の知識が無いですが楽しめているので野球詳しくない方もぜひ！

声優 / 富岡美沙子

- 野球マンガの皮をかぶった頭脳バトルのスポ根でめちゃくちゃ気持ちいい漫画ですね。1日3球だけ最強って縛りも面白いし、会話のボケ / ツッコミ不在の変なテンションで進むし、登場人物全員魅力的で面白いし、決めゴマはちゃんと熱い。野球わからん勢にもルール解説が優しいから、気づいたら心理戦にハマってると思います。将棋分からん勢でも楽しんで読んでたハチワンダイバーが何故か過りました(そうか?)

会社員 / 三浦佑樹

- 野球漫画は沢山ある中で、あまりにも強く強く光る個性的なキャラ達がたまらない！毎話面白くて続きが早く読みたくなる漫画で大好きです！

主婦 / 岸本しのぶ

- 怪作『ハイパーインフレーション』作者が手がける高校野球マンガ。本作もさらに怪作度を高め…ているのは疑いなく、極めて多彩な登場人物たちが入れ替わり立ち替わり繰り出してくる掛け合いがとにかくすごい。それでいてしっかり要所要所ではスポ根要素を投入して盛り上げるこの味わいよ…

会社員 / やのこうじ

# マンガ大賞2026 ノミネート作品

月刊!スピリッツ / 小学館

## 「RIOT」塚田ゆうた

---

### 選考員コメント・1次選考

- 「コーヒー飲みながら黙って、紙をめくるのがいいんじゃないか……!!」このセリフに共感しなかった(笑) 久しぶりに、「本」のだいたい味を突きつけられた気がしました。「案外みんな、手元の世界しか見てないんじゃない?」いちいち刺さる言葉に惹きつけられる。達観してるけど、青春してる、ふざけてるようで、マジ。そんなシャンハイとアイジの言葉に注目してほしい。

元コミック担当 / 実松由夏

- 好きなものを追いもとめる姿がとてもカッコ良い。しがらみや損得なんて関係なく、二度とは戻らない今だからこそ熱中できるものがあるって羨ましいっす。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 高校生がZINEを作る話と聞いて、これは私が好きそうな話だと思っていたのですが、思った以上に好きでした。若者がやりたいことを見つけて悩みながらも打ち込むさまは、自然と応援したくなります。主人公たちがZINEを作るたびにステップアップし、写真やエディトリアルデザインについて考えるところはとても具体的で、ZINE制作のハウツー本として、この漫画を参考にZINEを作ることもできそうです。

主婦 / 堀江千秋

- 手間のかかる紙媒体に惹かれた高校生2人が、日常の閉塞感に抗いながら、ワクワクと焦燥感を抱えつつ、自分たちの表現を試行錯誤していく様子はとても瑞々しい。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- モノを作る時のキラキラ感を真っ向から描いてくれている作品。創作に1人で向き合う葛藤を扱う作品が多い中、こういう無邪気な楽しさが沁みる。私もこんな気持ちで趣味を楽しんでいる瞬間ってあるなあって改めて思わせてくれた。コマ割りや見せ方がデザインが好きな人の作り方で好きです。

ヘリックス・クリエイティブ株式会社 WEBディレクター / デザイナー / 河本 智芳

- 学校が社会の全てのように感じて行くのはあまり好きではなかったけど、彼らは、そんな感じを飛び抜けて、輝いてるから、眩しくなって涙が出ます。

オフィスオーガスタ・マネージャー / 樋口健

## 選考員コメント・2次選考

- テキストと、デザインと、フォトグラフ。青さと、温かさに溢れた3つの個性が寄り合って、自分たちだけの誌面を地道に作り上げていく姿がただただ眩しく清々しい。不格好でもなんでも、真っすぐな気持ちで何かに打ち込む姿はいつだって素敵で、それが紙の雑誌というのが、また心をくすぐられる。久しく忘れていた「自分の好きに正直な何かを作り上げたい」という気持ちに駆られたりもして、なんだかとても刺さりました。彼らの活動がどういう方向に進んでいくのか、これからも楽しみ。

会社員 / 伊東敬祐

- 今年この作品を読んだ時すごく心が豊かになった。メディア化間違いなしだがこの地方の空気感、彼らの綺麗さ、漫画より上手く表現できるはずがない。

ヘアメイク / 北原由梨

- デジタルは悪くないし、巡って回る世界だけれど、手作りというものには特別な思いが宿るような気がしています。目まぐるしく変わる今だからこそ、初心を思い出させてもらえる漫画だと思います。

オフィスオーガスタ・マネージャー / 樋口健

- 地方のさらに都会でないところで育った人で、何者かになりたいって思ったことある人みんなに刺さると思います。小さい頃から変わり映えのない景色や人間関係はある意味画一的であり、そんななかでは小さな夢を見るにも語るにも気恥ずかしさが伴ってしまい、なかなか粋をはみ出さず口にするのは勇気がある田舎の高校という狭い世界。そんな世界の高校生が「ZINEを作りたい」という夢に、それぞれがやりたいことを試行錯誤しながら重ねていく様子、このまっすぐさはちゃんと青春していて、目標とかそういう堅苦しいものじゃなくて、あえて、ちゃんと、「夢」と呼びたい。狭いはずの田舎の高校生の世界も瑞々しく躍動的に見えるのは、コマ割りがうまいのか。奥行きが感じられ、作品世界に没頭してしまいます。登場するキャラは、大人も子どももみんなちゃんと正直に生活している人で、田舎に何もなくてウソだよ、こんなにも楽しく、たまに悩ましく、でも魅力的な人間ばかりで、なにより夢があるじゃないか！既刊3巻ですが、ずーっとワクワクが詰まっているのにスイスイ読んでしまいました。夢、少しずつでもいいからでっかく叶えてほしいな。ノミネートで知りましたが今季イチオシの作品です。出会えてよかった。

公務員 / 宇田川結衣子

- このマンガを読んだとき、自分がデジタルな情報におぼれ、手のひらの中の仮想世界ばかりを見つめてしまっていることに気が付きました。すぐ側にある現実、親しい友人、手触りのあるモノづくりの大切さを忘れていた。この漫画は、遠くのきらびやかな世界ではなく、自分の目の前にあるものを面白がり、形にしてゆくものづくりのワクワクを思い出させてくれます。主人公たちの純粋な楽しさが周囲を巻き込み、停滞していた場所に変化を起こしてゆく様子には、現代の人が忘れかけているあるもので楽しく生きていくヒントがあるように感じました。スマホの画面ばかりを見て、身の回りの美しい世界を見逃している人。新しい何かを生み出す高揚感に浸りたい人に、ぜひ手に取ってほしい一冊です。

システムエンジニア / 廣瀬公将

- 好きなものを追いもとめる姿がとてもカッコ良い。しがらみや損得なんて関係なく、二度とは戻らない今だからこそ熱中できるものがあるって羨ましいっす。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- ちょっとボンヤリしてブーたれたようなキャラの顔が皆かわいい。若い読者がどう思うのか分からないけど、大学時代に同人誌作りに熱中して今の仕事につながっている還暦間近のオッサンにはたまらない。妄想や思いつきが形になっていくワクワク感、ハサミの手触り糊のにおい、刷り上がった文字列を初めて目にしたときの世界が開けていく快感、ああ懐かしい。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 創作者とはこういう心情なのか！と入り込むほどリアルでぐんぐん引き込まれた。絵も読みやすく好き。学生時代の甘酸っぱい青春が懐かしい。無知のためZINEってなんだっけ？と思いながら読んでいたものの、書店などでブームだと知り、今は気にするようになりました。自費出版雑誌の世界、面白い！

営業 / 佐々木つむぎ

- 令和の高校生が「紙の雑誌」って、と思って手に取ったら、そんな単純なことではなかった…。「コーヒー飲みながら黙って、紙をめくるのがいいんじゃないか……！！」このセリフにまず撃ち抜かれた w 今の世の中に伝えたい！「手元の」スマホばかり見てないで、本やら雑誌やらなんでもいいからスマホ以外を手にとれ！何もない田舎の鬱屈した毎日を打破するために動き出す二人。青春していて、どこか懐かしい…。まさに「創る側」の心をくすぐる。

元コミック担当 / 実松由夏

- スマホでだいたい何でも手に入る時代に、あえて「紙の雑誌」に惹かれた地方の高校生 2 人(シャンハイとアイジ)が、見よう見まねで「雑誌みたいなもの」を作り始める、という導入がすごくいい。また、作品のコアが「大きな反抗」じゃなくて、出来心と初期衝動から始まる「静かな革命」としてるのが、逆に身近にもかんじて、すごくよかった。

会社員 / 平沼良章

- 昔、古着屋さんに置いてあるリーフレットを集めてコラージュしたり、シルクスクリーンしたり、した思い出があり、共感、客観的でも良い作品と思います

tetote 代表 / カ丸 真

- 高校生が ZINE を作る物語。文章担当のシャンハイとデザイン担当のアンジ、そして写真はケーコが … と、どんどん創作の輪が広がっていくさまは読んでこちら側もわくわくする。同人誌、自費出版という重々しさから解放された「ZINE」という新しい言葉と相まってこちらでも軽やかに読み進めていける。ブログ、SNS の延長線上にあり、「考察」という流行が後ろにあるこの創作活動を自分もやってみようかなと思わせてくれる。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- 何もデザインのことを勉強してなかったあの頃、ひたすら試行錯誤して、拙いなりに自己満足なりに、モノを作って他人に見せ合っていたあの頃(同人誌、と人は呼ぶ)を思い出す。手探りで、情熱だけで、今でも稚拙すぎて絶対に見たくない。この主人公達は当時から 1 になりたての自分よりレベルが遥かに高く、痛さがない。なんなら今の私でそこに参加したい。でもそこに描かれるキラキラした、きっといいモノができるぞっていう根拠のある期待。それが見える瞬間ってサイコーだよ！それを具現化したい情熱は、一緒だったと思う。きっとこの作者も主人公達のような顔をして描いてるんだろうな。今年は好きな作品が多くとっても迷いましたが、目が離せなくて投票です。

ヘリックス・クリエイティブ株式会社 WEB ディレクター / デザイナー / 河本 智芳

- 自分がデザインにはまっていった原点を絵にされた気分。ただこのマンガには既に欠点を補う仲間がいて、自分の得手不得手にちゃんと気が付いている気がした。この先、空回り続け負けつづけること、そしてそれを職業にしていく瞬間がもし描かれるなら、この作品はクリエイターになった、ならなかった、そんな人々にとってもとびっきりの光を放つ本になるのではないだろうか。

October Beast デザイナー / 北山 友之

- ほんとに最高の漫画です。学生時代のこの感じが刺さる刺さる。こういう学生時代でありたかった！という青春が描かれています。雑誌作りとは、という物にも触れられて楽しい楽しい。スチャダラパーとか原宿系の音楽聴いたりサブカルが好きで、街に行きつけのショップがあり、恋愛感情なしで付き合える女友達がいたり、僕もそんな学生時代でありたかった。この漫画は、ただただランキングに入った音楽を聴いて、普通の 10 代だった自分にもう一度熱い青春を味わせてくれます！さあこの漫画を手にとって、あの頃に戻ろう。

お笑い芸人 / ムーディ勝山

- こういう、ものを作る側の視点に立った作品の中でもすごく良かったです。今後がさらに楽しみ！

OKAMOTO'S / オカモトショウ

- 青春が眩しすぎる！とにかく眩しすぎる！おじさんには眩しすぎるのです！

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 周りに流されることなく、自分の「好き」をまっすぐ貫く主人公たちの純粋さと熱量の高さに心を打たれます！自分の視点を大切に、それを友達に伝え合える関係性の尊さも印象的。好きなことを楽しむ姿が次第に周囲を巻き込み、皆が本当に大切なものに気づいていく展開はまさに青春そのものです。

会社員 / 小野塚博之

# マンガ大賞2026 ノミネート作品

週刊少年ジャンプ / 集英社

## 「魔男のイチ」宇佐崎しろ、西修

### 選考員コメント・1次選考

- 魔法が生き物で、それを狩るという発想が新しい！魔法と無縁だった少年が世界の理を破って、魔女ならぬ魔男になるのが熱い！

デザイナー／シンガーソングライター / 平松新

- 物語や設定の面白さはもちろん、私は宇佐崎しろ先生の作画が大好きだ。キャラクターの表情は極めて雄弁で、魔法発動シーンは作画の美しさから恐怖までも感じる。イチの危うさが物語を加速させる“ガソリン”となっており、キラキラとした無垢な表情によって希望と不安を同時に突きつけられ、ページをめくる手が止められなくなる。

スターダストプロモーション・タレント / 秋本帆華

- 花京院の魂を賭けてもいいほど一次選考を通過しそうなマンガ。強い原作担当と強い作画担当が組めばそりゃあ面白いだろうという高めのハードルをぶっちぎりで超えてくる面白さ…！！今までにない空前絶後の設定なのにとにかく分かりやすく読んでしまう面白さ。一度見たらすぐさま記憶に保存されるキャラデザイン。個人的に一番「すっげえ…！」と戦慄したのはキャラクターの名前の覚えやすさ。これは今までどの作品にも無かった感覚。なんかもう全部好きです…！！好きなんだあああ！！

会社員 / 布施直人

- 魔法を仕留めて習得する狩人の生き様がカッコイイです。

教師 / 持丸宏司

- デスカラスの下がり眉毛が素晴らしい。以上。いやもちろんスピーディーでスタイリッシュなアクション作画も楽しいし、女性しかいない魔女の世界になぜかひとり入り込んでしまった魔男のイチの圧倒的な前向きさも読んでいて気持ちいい。そんなイチが相手にして戦っていく反人類魔法たちも魔法なのに生きててクセが強くバトル漫画のこれぞ敵役といった存在感を誰も彼もが見せ続けてくれる。そんな敵を努力で乗り越え勝利していくイチの物語だということは承知で、友情たりえないデスカラスとの関係が虎杖悠仁と五条悟の関係とはまた違った師弟とも主従ともいえる味わい深い雰囲気を出して楽しませてくれる。世界を苦々しく思っているのか不遜にも舐めているのか鬱陶しさを満面に出したデスカラスの存在が、かえってイチの清清しさを際立たせるのだとしたらやっぱり主役はデスカラスでありそのパーソナリティを表したものだとしたらやっぱり下がり眉毛が素晴らしい。以上。

書評家／ライター / タニグチリウイチ

- 男性が魔法を使えない世界で、主人公のイチが唯一の“魔男”になるという斬新な設定が面白いです。軽快なテンポとコミカルさで物語に引き込まれつつ、まっすぐで強い芯を持った王道主人公も魅力的です。

デザイナー／イラストレーター / 鷹嘴柊子

- 登場人物が全員魅力的。今一番先が気になる漫画

会社員 / 齋藤隼

- 魔法は女性にしか使えないから、魔女で、男で魔法が使えるようになったから「魔男」という設定は他の作品でもあったんだけど、本作は、魔法が使えるようになる過程が面白い！ジャンプらしく、どのキャラも魅力的で世界観が良く、バトルアリ、逆あり、冒険ありでテンポよくポンポン行くものだから、ページを捲る手が止まらない！！！！デスカラスがいいキャラ！！

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

## 選考員コメント・2次選考

- 強い原作担当と強い作画担当が組めばそりゃあ面白いだろうという高めのハードルをぶっちぎりで超えてくる面白さ…！！平成には無かった、まさしく令和のジャンプなマンガだと思います。今までにない空前絶後の設定なのとにかく分かりやすく読めてしまう面白さ。もちろん分からない設定もたくさんあるけど、置き去りにはされていないという絶妙な采配も見事…。一度見たらすぐさま記憶に保存されるキャラデザインだし、個人的に一番「すげえ…！」と戦慄したのはキャラクターの名前の覚えやすさ。名前見ただけでどんな見た目、何の立場の人だったのか分かるのね、これは今までどの作品にも無かった感覚。なんかもう全部好きです…！！あれだ、新規死神が出てきたら斬魄刀どんなかな？って気になる感覚に近い。登場人物の性格もみんな個性爆発してて大変そうなくムギちゃんが本当にかわいい。ずっと振り回されてほしい。しかし推しはシラベドンナ様。手放して人に勧められる作品です。

会社員 / 布施直人

- 野生児イチと最強魔女デスカラスのコンビが、魔法を狩りながら旅をする物語。バトルは派手だけど、繊細な作画がキャラの心を丁寧に伝えてくれるので読み終わるとただのバトルの爽快さだけではない様々な気持ちが残る。王道なのに、どこか新しい。次の展開が楽しみです。

図案家 / 橋本 寛子

- 超王道！魔法を倒すという解釈が面白い。シンプルにイチが善人でないところが魅力。ジャンプらしさがふんだんに詰まってる名作。

デザイナー／シンガーソングライター / 平松 新

- これぞエンタメ！という作品だと思います。ともすれば商業的すぎるとも思えそうな程とても多くの要素を、上手くマンガというフォーマットに落とし込んであるなあと感じました。気持ちいいほどにアツい物語と魅力的な登場人物に、読後テンションが上がる上がる！！まだまだ物語は始まったばかりだと思いますが、これからの展開が楽しみです。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 確実に今ジャンプを引っ張っている作品の一つ。魔法ものの連載が増えている昨今、絵の上手さと、設定・ストーリーの面白さが際立ち、頭一つ抜けている。主人公イチの真っ直ぐさと危うさに読者は虜になってしまう。とにかく目を惹くキャラデザ。特に瞳の描き方。キャラが意思を強く持つたびに吸い込まれそうになる。老若男女誰が読んでも面白いと思える作品だと感じた。

スターダストプロモーション・タレント / 秋本帆華

- ジャンプで今一番先が気になる漫画。テンポよく、キャラ立ちもしており、脚本が上手い上に、それが綺麗な作画でラッピングされている贅沢な作品

会社員 / 齋藤隼

- 面白そうと思ってるのにまだ読んでなかったら、読んでください。間違いなく面白いですから！（私です）

主婦 / 紺野泉

- タイトルの通り魔女ならぬ魔男のイチがとてもおバカだけど良い！生きて魔法が、魔女たちが、個性的な登場人物がとにかくいい！バトルも激しく勢いがある毎回めちゃくちゃ楽しいです！！

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

- いわゆる「魔女もの」として、困り眉の造形が素晴らしいデスカラスを筆頭にスタイリッシュでパワフルな魔女キャラたちを楽しめる。しかしそれでは少年マンガにならないので、炭治郎とルフィを足して2で割ったような"迷いのない"主人公を立てているが、この両者の行動原理の違いが物語を駆動して行って楽しい。そして何より本作では魔法の解釈・設定が独特で、まだまだこんな切り口があったのか！と大変面白い物語になっています。

会社員 / やのこうじ

- まっすぐなイチと魔法をこう組み合わせるのかと視点が面白いです。魔法だけでなく、知恵と勇気ある行動で仲間や魔法が増えていく展開が非常に良いですね。魔法に様々な性格があるのも好きです。

デザイナー / 平沼寛史

- 魔法使いを扱った作品はこれまでもいくつもありましたが、テンポよくお話が進んで、独特の世界観に一気に引き込まれました。

会社員 / 津田圭

- ファンタジーの世界、魔法を習得できるのは女性だけ、だから「魔女」と呼ばれるのに、主人公のイチは男なのに魔法を習得したことからすべてが始まりました。魔法の設定が非常に細かく、かつファンタジーオタクの心に刺さる現れ方で、展開にドキドキします。少年マンガならではの、わくわくする成長譚に目が離せません。

弁護士 / 三葛敦志

- タイトル通りの設定ではあるのだが、冒頭の主人公の雰囲気から、魔男になるとは到底思えず、意外性を感じた。魔法が生き物という設定も面白く、話のテンポ感も良く読みやすい。

株式会社 radiko / 澤田真吾

- ものごころついた頃から 40 数年間マンガを読み続けてきた自分でも、ちょっと設定の込み入った作品や描き込みの多いマンガを脳みそがうまく処理してくれず、読むハードルが上がってきた。そう、ファンタジーマンガやバトルマンガがなかなか読めない…。そんなわたしでも、このマンガは読めた！設定も難しくなく、心から楽しく読めたことが嬉しかった！描き込まれてはいるけどとても読みやすい。キャラが魅力的だしストーリーも良い。特に5巻は読みながらとても高揚した！少年ジャンプのマンガなのに、中年も受け入れてくれてありがとう。友情・努力・勝利は、いくつになっても心に刺さります。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 王道ジャンプ作品は嫌いになれないのですおじさんの中の男子がそうさせます

tetote 代表 / 力丸 真

- 西修先生と宇佐崎しろ先生という、奇跡のゴールデンタッグが生み出した奇跡のような作品です。作品世界における「魔法」「魔女」の独特かつ明快なルールと、その中の異端たる主人公・イチとパートナーになるデスカラスをはじめとした、あまりに魅力的なキャラクターの数々。唯一無二のキャラクターデザインが世界狭しと暴れまわる姿はそれだけで圧巻です。強すぎるほどに凶悪な敵の「魔法」たちとの、残酷でギリギリのバトルも読みごたえが抜群です。王道少年マンガの最先端と言える作品です。

株式会社ムービック / 岡部真矢

- 超王道かつ、完璧なストーリー構成、最高峰の華やかな画力で組みあがったスーパー少年漫画です。山に捨てられ、命懸けで生き抜いてきた狩人のイチ。どこか達観した生き方をしていた彼が、魔法や師匠との出会い、めくるめく日々のなかで、初めて家族を知り、仲間を得て、愛を知っていきます。手に汗握るバトル、胸を打つ感動、そして笑い。どこを切り取っても、最高に楽しいマンガ体験を約束してくれます。アニメ化されれば、世界的なヒットになること間違いなしの作品！

芸人 / 吉川きच्छよむ

- 「王道」「正統派」…。少年マンガから離れてしまって随分と経つが、やはり有無を言わせぬ面白さと出会うと目が離せなくなる。舞台設定、主人公、脇役…どこを切っても真っ当過ぎて眩しいほどだ。これを 10 代で読んでいる現役世代が羨ましい。

コミティア実行委員会 会長 / 中村公彦

- 今までありそうでなかった設定にまずは唸られました。ファンタジーものは作品世界に没入できるかどうかは導入が肝心と思っているのですが、最初から勢いもありつつスッと頭に入ってくるのでストーリーに集中できます。女しかなれない魔女たちのなかで、唯一男の魔女である主人公・イチも少年ジャンプらしいまっすぐなキャラクター。敵も味方もアクの強い、そしてそれぞれの思惑を持ったヤツらばかり出てくるのですが、イチのキャラとしての芯が強く、どんなに個性的なキャラが出てきても埋もれないし、ストーリーに負けない。そして、イチと付き合ううちにこれまたほかのキャラもいいヤツになっていくのがたまりません。特に既刊6巻のなかのヤマともいえるであろうバクガミ編はまさに少年ジャンプ王道で、オレ！こういうのが読みたかったんです！！と叫びたい。熱い展開にもはや感謝。週刊連載作品の宿命ですが、今回はマンガ大賞対象外になってしまうのでノミネートになって嬉しいです。今後も絶対おもしろい予感しかない。楽しみにしています！

公務員 / 宇田川結衣子

- ノミネートするまで読んでなかったのですが、悔しいけどどうしても面白かった&巻数が多くもう今年しか推せないかも、と思ったので投票。古の CLAMP を思い出すような美しい絵に負けない芯の太い物語、読んでいて気持ちよいテンポ感。主人公が揺らがなさすぎて怖いところもありますが、現実世界で四苦八苦しなながら生きている身と

しては清涼剤のような作品です。いつか幸福なアニメ化をされることを願っています。

ヘリックス・クリエイティブ株式会社 WEB ディレクター / デザイナー / 河本 智芳

# マンガ大賞2026 ノミネート作品

少年ジャンプ+/集英社

## 「人喰いマンションと大家のメゾン」あきま、田中空

### 選考員コメント・1次選考

■ 地球滅亡まで残り1秒。でもマンションの中は時間が無限。そんなマンション内で人々はいろいろな物や"人"をリサイクルしながら生きている。田中空先生原作で作画はあきま先生でお二人の相性がとてつもなくいい！田中先生らしさを生かしつつあきま先生の絵で見事に表現されていて、可愛い主人公メゾンも回収員さんもマンションネコもMUSHI監督も怪しい自治会の人達もみんな魅力的だしページをめくって現れるマンションマンに何度ドキッとさせられたことか。永遠の1秒を生きるマンション内の背景も少し怖くてわくわくする。お話は毎話の引きの強さに早く続きが読みたくなる。謎が少し解けたらまた新しい謎が来てなにそれー！？！？ってなるけどわからないことへの不快感はなくずっとわくわくできる。こんなにもずっと面白くずっと驚かせてくれる漫画は他にない！

声優 / 富岡美沙子

■ 友人にオススメされて読みましたが、物騒なタイトルと可愛らしい表紙のキャラからは想像できない内容の濃さ。地球崩壊一秒前、マンションのなかだけは永久に時間が流れるという中で育ってきた主人公が、友達がマンションに「喰われた」ことからマンションの謎に迫っていくというストーリー。テンポよく進み少しずつマンションの仕組みがわかっていきますが、まだまだ先が見えず楽しみです。主人公はジャンプ王道系のまっすぐで勇気ある女の子で、イヤミなく応援できます。脇役の自治会（マンションなので）のメンバーも、敵か味方か、いずれも一筋縄ではいかない感じがたまりません。現在2巻まで刊行されていますが、2巻のラストまでのスピード感や展開の密度が高くまだ2冊なの！？と巻数を見返してしまうくらいの充実感。あまり知られていないのがもったいない！

公務員 / 宇田川結衣子

■ 『人喰いマンションと大家のメゾン』は、舞台設定のインパクトが強いのに、読後に残るのは“生活の手触り”です。世界の終わりが近い（あるいは終わってしまった）ような空気の中で、人々が同じ建物の中に集まり、ルールの下で暮らしている。その日常がまず描かれるからこそ、そこに混ざる異物が、ちゃんと怖い。この漫画の面白さは、SFの奇抜さを「設定の見せ物」にせず、生活のディテールとして回しているところです。人もモノも「全て」がリサイクルされる、という発想が、ただの気味悪さに留まらず、社会の縮図として刺さる。さらに“大家”という立場にいる主人公が、守るために決断しなければならない局面が増えるほど、物語は箱庭から冒険へ、怪談から社会劇へと表情を変えていきます。奇想とリアリティが噛み合っているからこそ、世界の謎に惹かれつつ、人の営みの重さにも引きずり込まれる一作です。

会社員 / 佐藤優

■ 田中先生の描くSF作品が大好きで、その中でも1番心惹かれた。地球崩壊1秒前、永遠の時間が流れ、いらなくなったモノをリサイクルして成り立っているという巨大なマンションという世界。設定だけでワクワクが止まらない。何が何だかわからない小数点フロアや、マンションの秘密、この世界での普通が普通ではなく、好奇心が止まらない。また、あきま先生の作画が主人公メゾンの底抜けに良い奴感と、マンションマンの得体の知れない気持ち悪さを際立たせている。

スターダストプロモーション・タレント / 秋本帆華

■ 「マンション」という名称を聞くと狭い舞台なのかな？と思うかもしれませんがそれは間違いです。読んでみると世界の作り込みが細かくかつ壮大で、どうしたらこんなに謎が謎を呼ぶ世界観と個性が際立つ魅力的なキャラクターを生み出せるの？！と驚きます。「大家」と立場はいったい何なのか早く知りたい…！

会社員 / 竹本慧

■ 濃度マシマシの設定で謎だらけの中、主人公の等身大感とまっすぐさに惹かれて読み進めましたが、そろそろ私もこの世界のこと自体が気になって仕方なくなってきました。思ってもみなかった展開の中で、主人公を取り巻くキャラクター達は割と普通ぽいというか、周りにあーいう人居そう。そのギャップが気に入っています。この先きっといろんな伏線が回収されたり、されなかったりするだろうけど、とにかく楽しみです！！

ヘリックス・クリエイティブ株式会社 WEBディレクター/デザイナー / 河本 智芳

## 選考員コメント・2次選考

- 世界が終わる直前で時間だけが引き延ばされた巨大マンション。そこでは人々が暮らし、ルールがあり、日常が続いているのに、建物そのものがどこか“生き物”のように不気味です。とくに強烈なのが、マンションの中では人もモノも例外なく「リサイクル」されていくという発想で、ただの気味悪さに留まらず、社会の縮図として刺さってきます。この漫画の面白さは、SFの奇抜さを「設定の見せ物」にせず、生活のディテールとして回しているところです。掃除や当番のような小さな営みの先に、建物の仕組みそのものへ触れてしまう“危険”が待っている。その繋げ方がうまくて、読み進めるほど「次は何が出てくるんだ？」という感覚が止まりません。そして今期、私がかつとも好奇心を刺激された作品でもあります。フロアの奥行き、ルールの裏側、リサイクルの意味、大家という役割の重さ——新しい情報が出るたびに謎がほどけるのではなく、むしろ「知れば知るほど分からなくなる」方向に世界が広がっていく。怖いのに覗き込みたくなる、その引力が圧倒的です。

会社員 / 佐藤優

- 物語の設定が惹き込まれる要素しかない。どういうことだろう？と好奇心をくすぐられ、ページを捲る手が止まらない。物語が進むにつれて、少しずつマンションの仕組みは分かるものの、根本的なマンションの謎は何も教えてくれず、不気味さは増すばかり。SF好きにはたまらない。そして、誰もが純粋に好きになれるメゾンという存在が強すぎる。

スターダストプロモーション・タレント / 秋本帆華

- 1, 2巻を一気に読んでしまいました。読み進めると作品世界のことが少しずつ解明されていくのが楽しく、続きがとても気になります。

会社員 / 林礼春

- 人もモノもすべてが“リサイクル”される、永遠の時間が流れる奇妙なマンションという設定がまず強い。大家？マンションマン？小数点フロア？そもそもマンションの外では地球が崩壊する1秒前なのに、中では永遠の時間が流れている？——読み進めるたびに疑問符が増えていき、少しずつ情報は与えられるのだが、やっと謎が明かされたかと思いきや、その奥にさらに新しい疑問が口を開けている。しかもよく考えると、さっきの謎も実は明かされていなかったことに気づく。そうやって全く底の見えないまま、気づけば最新刊の最終ページに到達し、続きを読みたくなくなっている。そんな作品。膨大な設定や謎に溺れて物語が渋滞しないのは、クレバーさと向こう見ずさを併せ持つ主人公メゾンの存在が大きい。この子が動かしきれない物語は止まらないという安心感がある。可愛い主人公の絵柄と、マンションマンをはじめとする不気味な登場人物の描き分けもすごい。読むたびに（当たらないと分かっているが）新しい仮説を立てたくなる、考察好きにもたまらない一作。

弁護士 / 田邊幸太郎

- うわ————！！！！2次ノミネート嬉しい————！！！！友達にいっぱい薦めて来たけど限界があって...でもこれで選考員90人くらいは絶対に読んでくれるってことでしょ！？やったー！元々、田中先生の漫画が好きで田中先生の考えるSFが好きでずっと読んできたけど、まだそんなアイデアあるの！？え！なにそれ！？どうなるの！？とずっと驚かされる。新たな未知に興奮します。連載を追うのが楽しい。ジャンププラスだと途中でカラーページを入れられるので、あきま先生の描く素晴らしいカラー絵も見られます。単行本だと白黒になってますが、その他のおまけも多いので単行本もぜひ。まだまだ謎が多くわからないことだらげけど、それが嫌じゃないしモヤモヤしないの不思議。わからないことが楽しみでしかない！

声優 / 富岡美沙子

- 自分では絶対手を出さないジャンルの作品。ノミネートを受けて読んだ。ワクワクして、先が気になって一気に読みました。

主婦 / 赤坂真実

- 単純に、絵が、雰囲気が好き。読み始めはそんな印象だった。そして、わけのわからない設定と、素直で感性的な瑞々しい主人公メゾンに並走して謎につっこんでいく気持ちよさで読み進め、翻弄されすぎて疲れて読むのをやめた日もあった（正確には、寝た）。しっかり睡眠を取った次の日、改めて続きを読み進め、黒幕らしきものが少しずつ見え、驚きながら世界を見ていく。メゾンの周りの登場人物の解像度が上がっていく。その気持ちよさがたまらない！なんだろうこの世界。この先、どんなに驚かされることが待ってるのか楽しみで仕方ない。終末世界の設定なのに、世界はどこまでも広がっていくように感じる作品。この先への最大のエールとして投票します。

ヘリックス・クリエイティブ株式会社 WEBディレクター / デザイナー / 河本 智芳

- マンガも打率を上げるには「そこに読者がいる」ことがわかっている界隈を狙ったほうがいいわけで、近年は本好き、マンガ好き、マンガを描いている／描いてみたい人たちに向けた世界観を打ち出した作品が増えているように思う。今回の大賞候補作にもそのような作品がいくつかある。揶揄するつもりはないけれど、そうした作品群は「内向き」の側面もある、と言うことはできるだろう。そういう読者が自分自身や自分の「好き」を重ねられる設定や主人公を取り込むのは手堅いし、たぶんおもしろい作品にもなりやすい。けれど、そればかりではやっぱり物足りないこともある。そこでこの「人喰いマンションと大家のメゾン」。いったいどこからこんな発想が、とあっけにとられる奇想天外な大風呂敷を広げまくり、人間の脳内の想像力を完全解放したようなスケールで、マンガでしか表現できないことをやっているのが好ましい。実写はもちろんのこと、CGなどを駆使したところで、この自在に宙を舞うような空間感覚や、胸のすくようなスピード感は体験できないはず。読者の五感や意識・無意識と連動して爆発するマンガならではの自由さを生かし切った傑作だと感じる。言い換えるなら「大ボラ話」。生成AIのパターン組み替えとは全然違う、人間だけが持つ想像力を駆使して生み出す稀有な壮大なホラ話。そして、それを読み手に「あるかも」と思わせるたしかな画力がこの作品には備わっている。自分はKindleで読んだんだけど、ほんとうはカラーの大判コミックでページをめくりたい。なんて素敵なんでしょう。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 舞台になる世界の謎が気になって、先が気になって仕方なくなります。チャーハン最高。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- マンション……なぜマンションなのか……いや、そんなことをきくのは野暮……とにかくマンション！

作家 / 海猫沢めろん

- 細部にまで丁寧に描き込まれた画面と、隅々まで作り込まれた世界観がとても魅力的でした。背景や小物に至るまでこだわりが感じられ、ページをめくるたびに物語の空気へと引き込まれました。

デザイナー／イラストレーター / 鷹嘴柊子

- 世界の作り込みが細かく壮大で、縦にも横にも舞台が大きく広がっていることを作品を読みながら感じられます。登場キャラクターも個性があり魅力的で飽きません。まだまだ謎だらけのマンションの秘密が少しずつ明かされているのでこれからも大注目すべきマンガです！

会社員 / 竹本 慧

- 毎話、引きが素晴らしく、続きが気になります。唯一無二の世界観だと思います。マンションマンのデザインも秀逸ですし、メゾンが一生懸命な姿はとにかく可愛らしく、応援したくなります！

声優 / 綾瀬有

- 怖いけど、気持ち悪いけど、可愛い！画力が圧倒的です。サスペンスホラーミステリー、序盤の伏線はわたし的に思っていた展開だったけど、まだまだ謎がいっぱい！今度どう展開していくか、考察もしいのある作品ですね！

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

# マンガ大賞2026 ノミネート作品

週刊ヤングマガジン / 講談社

## 「妹は知っている」 雁木万里

### 選考員コメント・1次選考

- 他のマンガ賞で推されているのも納得する一作。お笑い芸人から構成作家としてスカウトされるほどの投稿職人である兄と、アイドルの妹という、仲の良い兄妹の組み合わせが絶妙。作中の大喜利を見るだけでも楽しめると思います。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- アイドルである三木美貴は、妹として、その兄でSEである貴一郎が伝説のハガキ職人であり「世界で一番面白い」ことを知っている。兄は会社ではいたってまじめで面白みのない人と通っていたのに、徐々に漏れ出す職人魂と味のある一言。日常が少しずつ彩られていく感じがたまりません。

弁護士 / 三葛敦志

- 存在感薄いけど有名はがき職人の兄と、塩対応な人気アイドルの妹が織りなす低体温コメディ。温度低め、でもそこがいい。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 静かで地味な兄の本当の面白さを知る妹。自分だけが兄の魅力を知っているという視点だけで描かれる日常に、癒されて心温まる。兄妹のやりとりも知的かつコメディな魅力もあって、自然に口角上がる漫画。

デザイナー / シンガーソングライター / 平松新

- ラジオ好きにはたまらない漫画。はがき職人を妹視点で描く世界観が独創的

株式会社 radiko / 澤田真吾

- この作品は読みだすとじわじわりクセになる漫画です。いい意味で地味な漫画で、仕事に疲れた時、なんか嫌なことがあった時、なんだかお兄ちゃんにほっとします。読んで、お風呂に入って疲れとか嫌なこととかすべて忘れて、一息ついて、またゆっくり読みたい。そんな漫画。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

## 選考員コメント・2次選考

- 先入観というか何というかで未読だったのだけれど、読んでみたらとても面白かった。何でも思い込みや決めつけはいけなない。作品の肝のひとつであるハガキ職人としてのネタも愉快だし、主要登場人物の多くの個性が立っている上で、それらを丁寧に組み立てた展開が多く読んでいて心地よい。途中、少し方向性が変わってきたように感じたところもあったが、それも結果として良い方向に向いたと個人的には感じていて、最新巻（現在5巻）が非常に面白かったし素敵な表現が多かったのも好き。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 選考用に一卷を購入して、そのまま既刊を全部ポチってしまう中毒性があり今期最優の作品でした。面白みの無いサラリーマンに見られるがラジオのハガキ職人である兄とアイドルの妹という組み合わせの妙があり、そこからジワッと広がっていく人間関係。うっすら身バレしていくカタルシスなど、優しい目線ながらも昨今の痛快要素を網羅しており、上手いなあ……！と感嘆しきりでした。

住職・ライター / 蟬丸P

- 似てなくて似ている、絶妙な空気感のマイペース兄妹のやり取りが、とにかく読んでて心地いい。我が道をひた歩く兄の魅力がじわじわ伝わって、幸せ空間も広がっていく様を見届ける時間は、いろいろなことを忘れて優しい気持ちになれました。ラジオが聞きたくなったり、甘いもの食べなくなったり、いろんな「楽しい」を摂取しようって思えて、スッと人に薦めたくなる作品です。

会社員 / 伊東敬祐

- ほんの些細なきっかけで、少しだけ確実に何かが変わる。大きくは変わらないけれど、小さな変化の積み重ねが気持ちいい。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 「人は見かけによらぬもの」を愛おしく体現しているのが、主人公・三木貴一郎。冴えない社員に見えて、その内側には独特のズレと瞬発力のあるユーモアが潜んでいる。その面白さを誰より理解し、芸へ昇華してしまうのが妹でアイドルの三木美貴という設定と展開は大好物。

ロングランプランニング株式会社 / 小森和博

- ラジオが好きで自分にとって、「伝説のハガキ職人」という肩書は憧れでもあった。ラジオでは伝説でも、普段は周りからさえない人と思われているというのも「伝説のハガキ職人」という肩書のイメージ通りで面白い。そこにさらに第3者である妹の視点をかけ合わせることで、「伝説のハガキ職人」の人間的魅力が描かれるというのは、とても素敵な発想であると思う。

株式会社 radiko / 澤田真吾

- 妹は知っているし、周りの人間も気づき始めているのに、本人の自覚の無さ。面白いつてのはナチュラルなものだとホッと安心。

教師 / 持丸 宏司

- 登場人物がとにかく優しい世界観に癒やされる作品です。妹もお兄ちゃんも、会社の同僚や先輩まで、みんなが本当にいい人たち。読んでいて温かい気持ちになります。物語は、周囲から“堅物”と決めつけられているお兄ちゃんの本当の魅力を、妹が紹介していくお話。妹はお兄ちゃんのことを全肯定していて、「お兄ちゃんより面白い人はいない」と本気で思っているところが微笑ましく、愛情たっぷりです。アイドルでありながらまったく偉ぶらず、お兄ちゃんと周囲の人たちを自然につないでいく妹の姿も素敵。そして何より、お兄ちゃんが本当に面白くて、しかも妹思い。読んでいて、自然と笑顔になってしまいます。優しさと愛情にあふれた、心がほっとする一冊です。

株式会社アニメイト / 鈴木寛子

- 40歳越えると漫画の一気読みが段々難しくなってきますが、徐々に短時間で一気に読みました作品です。登場人物のほとんどが順風満帆という感じではないのもいいですね。時代関係なく日常系漫画は人との出会いや気付きで気持ちが変化するという効果をもたらす不変の漢方みたいな存在だと思います。序盤からではなく尻上がりに面白くクセになっていくので、少なくとも7～8話まで読んでみてほしいです。

会社員 / ターシ

- 地味さ加減はあるけれど、人への優しさや思いやりや、何気ないことで日々楽しめる事や、嫌な事を忘れさせてくれることや、好きな事に前向きで、でも熱くならないことや、無表情に見えてとても良く妹のことを大事にしていることなど、読者の感じる事はそれぞれでも、こんなお兄ちゃんいたら毎日最高だよねと安心して読める漫画。癒される。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- アイドルの妹とハガキ職人の兄というプロフィールだけでも膨らませて引っ張れば、『[推しの子]』めいてどこまでも膨らんで転がっていきそうな感じがするのにな、そうした要素をどちらかといえば脇に置いて、普通にアイドルをしていて普通に会社員をしながらハガキ職人もしている妹と兄を中心に、周囲の人も含めて日々起こるちょっとした出会いだったり出来事だったりを描いてほっこりさせるという絶妙のバランスで滑り続けているところが面白い。表情に乏しく感情に薄く展開に静かな内容をやりとりの機微で見せているこの漫画をたとえば実写ドラマ化したら、あるいはアニメ化したらその良さを出せるかと考えるとやっぱり漫画として描かれていることに価値がある。そんな漫画だ。

書評家／ライター / タニグチリウイチ

- 私もおんなお兄ちゃんが欲しかった…そして私だけがいいところを知っていると…男性（兄側）からしても、女性（妹側）からしても理想なのでわ

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- ラジオのハガキ職人である兄の見た目だけではわからない面白さを、その内面を見る人達が徐々に理解していく様子にほっとさせられました。

医師 / 岸本 倫太郎

- 妹だけが知る兄の面白さを、少しずつ周りも知っていく。人が人を呼ぶ温まる物語。

デザイナー／シンガーソングライター / 平松 新

# マンガ大賞 1次選考作品

## 全作品名・選考員コメント掲載

「愛さないと言われましても ～元魔王の伯爵令嬢は生真面目軍人に餌付けをされて幸せになる～」石野人衣、豆田麦

- 元魔王のアビゲイルの無垢で天然なところがとにかく可愛い。ギャグとシリアス、ほのぼのがバランス良くて楽しく心が癒されます。

主婦 / 紺野泉

## 「あくたの死に際」竹屋まり子

- 年齢と共に希薄化していく「本気になる」こと。その大事さが自分にもしっかり刺さり、とても心が動かされ熱い気持ちが沸き上がる作品です。

会社員 / 平沼良章

- 個人的には3巻からが本番というか本質だと感じました。0→1のものづくりをする者として、こういったタイプの作品は両極の感想に至りがちですが、3～4巻は激しく同意できたり、言葉にしたいけれど同じように感じることや似た経験をしたことなどが頻出し、読んでいて疲れるものの、それだけにリアルで素晴らしいと思いました。知られたくないけれど知ってほしい部分ってあるよな、と。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- タイトルと第一巻の書影からきっとおもしろいだろうという予感があったのに、ヒリヒリした才能の物語に向き合う覚悟がなくて、昨年まで保留してしまってたことを後悔。主人公の苦悩に共感しつつも、人によって、言葉によって、熱中によって、もたらされる抜群のカタルシスは、僕にとってこの作品でしか得られない栄養素になりました(遊園地のシーンなんてもう…!)。「ぼんやりした不安」を打ち破りたくて、いっそパンツ脱いでイカれてみたいのにその勇気が持てないでいる、そんな僕らのどこかに火を灯し、並走させてくれるマンガです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケン

## 「あくまでクジャクの話です。」小出もと貴

- 教師×女子高生×生物学の切り口で、恋愛や「男らしさ」をぶった切るのが斬新で面白い！先生以外の存在はメリックが無ければ等しく下に見ているところも本能に忠実で笑ってしまう。ラブコメを読んでいると思いきや、気づけば生物の知識が増えている新感覚の漫画！

デザイナー／シンガーソングライター / 平松新

## 「悪魔二世」志波由紀

- 少しダークな世界観ながら、悪魔と人間のハーフである主人公を筆頭に、登場キャラは皆どこか自分勝手にズレていて思わず笑ってしまうシュールさが魅力的な作品です。気持ち悪さとユーモラスさの紙一重を突く悪魔たちのデザインも秀逸！

会社員 / 小野塚博之

「悪役令嬢の中の人～断罪された転生者のため嘘つきヒロインに復讐いたします～」白梅ナズナ、まきぶろ、紫真依

- 冒頭だけ見ると本当によく見かける悪役令嬢婚約破棄ものようであるが、定番の設定を一捻りも二捻りもしつつテンポよく魅力的な物語としてまとめられている原作が、素晴らしいコミカライズによって更に読者を惹きつける作品になっています。丁寧に描かれた作品世界の風景や神々の描写によって世界観が奥行きを増したのもさることながら、特筆すべきはキャラクターの表情の素晴らしさです。エピローグ最終ページはそれだけでこの物語を読んできて良かったと思わせてくれる力のあるものでした。

会社員 / 津田圭

- 異色の異世界転生モノとして見守ってきましたが、堂々完結。異世界転生モノの逆手の逆手を取った設定で、もはや異世界転生大喜利が各所で展開されている昨今の中で、振り切った画作りで異彩を放ち輝いている作品。話の筋自体はチート感があり異世界王道です。アニメ化は確定とのことで、ぜひ思いっきり汚い聖女を描き切って頂きたいです。

ヘリックス・クリエイティブ株式会社 WEBディレクター / デザイナー / 河本 智芳

■ 最高の復讐劇が完結しました。これは信念と愛の深さを知る物語です。

主婦 / 紺野泉

■ よくある悪役令嬢の転生 & 帰郷ものではなく、しかも、転生した側と、された側の立場が入れ替わるというお話。主役2人が健気で愛らしいこと！互いが互いのことを思いやって、エミのレミリアならこう行動するはず、と思いつながりながら行動する令嬢レミリア。イラストがとにかく美しく、各キャラの表情の描き分けが秀逸！！エミのレミリアと本来の令嬢レミリアの描き分け、星の乙女のクズさ加減が素晴らしくて、最後の化けの皮が剥がれるシーンの醜悪さが最高です！！最後はもちろんハッピーエンドですが、終わり方が素晴らしくて、号泣します。ここ数年の悪役令嬢ものの中で1番のヒットだと思うくらい完成度の高い異世界令嬢もの！オススメです！！

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照松

## 「悪役令息、好きな人を金で買う」宍戸まめぞう

■ 悪役みたいな台詞を言ってるけど不器用でかわいい社長令息の、安心して読める合意買収ラブコメです。悪い顔しても一喜一憂する不器用なギャップに応援したくなる令息です、早くしあわせになれ～！

主婦 / 紺野泉

## 「明日の敵と今日の握手を」フクダイクミ、カルロ・ゼン

■ こういう言葉のチャンバラみたいなのを求めておりました。メリハリのつけ方と、詰将棋のような相手の詰め方は勉強になります。

めがねっ娘教団教務大司教 / 田中海渡

## 「あそこではたらくムスブさん」モリタイシ

■ 終盤の2人が結ばれるシーンが良かった。真に憧れる大人の恋愛。

株式会社 radiko / 澤田真吾

## 「1日2回」いくえみ綾

■ 2020年5月(コロナ禍の最中だ)に1巻が出たときはいつものように即購入してさっそく読み始めてはみたものの、いくえみ作品にしては珍しく人間関係が自分にはすんなり入ってこなくて途中でストップ。2巻も3巻も出たときに購入してはいたのだけれど、本棚に挿したままになっていた。ところが訳あって昨年末に既刊6冊を一気に読み通すことになり、結果、やっぱりいくえみ先生は素敵なマンガを描かれる、と改めて実感した次第。隣同士で幼なじみとして育った2人が乗り越えてきた長～い年月(2人は現在アラフォー)を巻き戻し、そのときそのときの心情をストップモーションで追体験し、再確認する。そこには長く生きてきたなりの紆余曲折があり、音信不通期間もあって――、というのは人生につきもの。年を取らなければしっくりこない感情や、その年齢にならなければ分からない機微のようなものを、クスクス笑いをちりばめた明るいトーンで、でも要所所でエモく切なく振り返る。そう、全体が壮大な伏線回収ストーリーになっていて、過去のあれはそういうことだったのか(!)と。キャラクター造形の絶妙さも相まって、ジョン・アーヴィングの小説のようなしみじみとした読後感を残す。いくえみ作品の醍醐味でもある群像劇のおもしろさが極まり、今回は四世代(新生児を含め)それぞれの心情、真摯な思いと、相手を思う真っすぐな行動が相互に影響し、精緻なタペストリーのように織り込まれ、交錯する。その構築力は圧倒的だ。これほど「一気読み」にふさわしい作品はないのではないかと思う。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

## 「一夜限りのユキズリマン」ハミタ

■ あほすぎて好き。ほんとにあほすぎて面白い。

会社員 / 平沼良章

## 「一級建築士矩子の設計思考」鬼ノ仁

- 技術系漫画の極北だなあと思っております。最新刊では、矩子の地元弘前の建築名所を案内してもらえます。古い都市には歴史ある建築がたたずんでいるものですね。

めがねっ娘教団教務大司教 / 田中海渡

## 「一緒にごはんを食べるだけ」大町テラス

- タイトル通りだけれど、確実に裏切られる作品。どんどん苦しい方向に向かう2人だけ、目が離せなかった。

女優 / 齋藤明里

## 「INOZ - 55歳から歩いて作る日本地図 -」こやす珠世

- 主人公は、歩いて日本を測量した伊能忠敬。中年を過ぎると、何か始めるにも年齢のせいになかなか手が出せないでいます。だから、50歳を過ぎてから学びなおし、測量の旅に出る伊能忠敬は尊敬する偉人です。ただでさえ爺さんが主役の物語って難しいのに、魅力的に描き、かつ読み手を発奮させてくれるマンガ。これは何かに迷っている中年世代にはぜひ読んでほしいです。年齢を言い訳にしちゃいけない、好奇心と向上心に歳は関係無いってことです。

書店勤務 / 野口忠義

## 「いやはや熱海くん」田沼朝

- 良質な日常を見させてもらっているな…という気持ちです。個性的なキャラクターが次々出てきて素敵だなと思っていましたが、この「個性」ってつまりは私たち自身のことだよなあなんていうふうにも思ったり。学校生活は淡々と進んでいるけど、その中では小さな出来事が次々と起こっている。些細なことを丁寧に会話に落とし込まれていて、ずっとこの子たちの話を聞いていたいと思わせてくれる作品です。

会社員 / 堀尾素子

## 「ヴァンパイドル滾」島本和彦

- 島本和彦先生 33年ぶりの週刊少年サンデー復帰（この記録、今後破られることがあるのだろうか）、ライバルと目される藤田和日郎先生との同時連載開始と、連載開始が2025年日本漫画界のトップニュースとなった本作。その作品の成立がすでにマンガで、一級のエンターテインメントになっている。連載開始前から全く新しいマンガの楽しさを堪能させてくれるこの作品、今読まずにいつ読む！

医師 / 岸本 倫太郎

- 島本和彦先生は月刊誌で連載中のアオイホノオ以外にも、YouTubeしたり新書を出したり同人誌を書いたり、いつもそのパワフルさに驚きます！それなのに更に週刊連載ですか！凄い！！ヴァンパイアのアイドルもの！島本和彦先生の新しい世界があったんだ！！島本先生と少年アイドルの組み合わせが新鮮！アイドルの1人であるひょうまくん、カッコいい！キャッチーなセリフを読んでニヤニヤしています！島本先生のセリフまわしが良いんです！次巻も楽しみです！

主婦 / 岸本しのぶ

## 「ウシミツガオ」板垣巴留

- 古今東西、三角関係のラブコメは山のようにあるけども、こんな形での三角関係あったらどうか。ぶっ飛んでいるけどどんな違和感も受け入れて、いやそれを凌駕する面白さで先を読みたいと思わせる力で引き込んでいくのはさすが BEASTARS の板垣先生だ！と思いつつ次の巻まだかなとワクワクしています

鳥取県高等学校教員 / 佐川由加理

## 「歌い手のバラッド～なぜ彼はファンを食い漁るヤリチ○に墮ちたのか～」クジラックス

- 創作同人時代から読んでたので、ニコニコ全盛期から現在まで、だいぶ遠くまで来てしまった謎の感慨があります。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

## 「写らナイんです」コノシマルカ

- ホラー系の理不尽さに対し、理不尽なお祓いをしていく様が、マ・ドンソクの映画みたいな無双感を感じさせます。1話完結のお話が特に好きで、清涼剤みたいな漫画です。青春ギャグ系かと思いきや、ホラー展開はしっかりと怖い描写になっています。怖気の走る描写が上手いので、ガチホラーの読み切りをいつか描いて欲しいですね。

会員 / ターシ

## 「海が走るエンドロール」たらちねジョン

- どうしても逃れることのできなかつた老いというテーマ（障害）が立ちはだかり、大学卒業を前に進路を見据える海くんの眩しさとの対比がより鮮明になった構図に胸が苦しくなりつつも、お互いがお互いにとっての“風”で“波”なんだという自覚がより深まって行って非常に良かったです。8巻ということでこれが最後の一推になるのは寂しいですが、次巻がついに最終巻。最後までこの二人の航路の行く先をしっかりと見届けたいと思います。

フリーランス / 金輪英恵

## 「裏切られたので、王妃付き侍女にジョブチェンジ！」青山克己、雉間ちまこ

- 婚約者に裏切られて、婚約破棄・・・からの悪役令嬢たちの活躍が大好きな私だが、本作の主人公のマーシャはそうではない。この経験をばねに10年後、王妃直属の筆頭侍女として超有能に働いてる。自分の力で戦い、考える。行動する。表向きは冷静でクールなんだけど、心の中では王宮の面倒事や人間関係をバッサバッサと切り捨ててる。悪役顔負けのマーシャの“毒舌モノローグ”が痛快！！でも弱い一面も持つ普通の女性のマーシャを応援せずにいられない。どうしてこんなことになった謎が解明されていくのも楽しみです。

図案家 / 橋本寛子

## 「ウリッコ」大森かなた、殺野高菜

- 読者に好かれようとしていない主人公像にまず驚かされました。好感度は高い状態じゃないのに、でもなぜか応援してしまう。早く続きが読みたいですし、主人公の描いた漫画も読みたいです。

声優 / 綾瀬有

## 「え、社内システム全てワンオペしている私を解雇ですか？」伊於、下城米雪、icchi

- タイトルに釣られたけど、思っていたより直球で何より主人公が愛されキャラで、私の日常が浄化されています。w 現実ではなかなかないシュチュエーションだけど、仕事や人との向き合い方をちゃんと描いて、第二部も楽しみ！

ロングランプランニング株式会社 / 小森和博

## 「絵師ムネチカ」さそうあきら

- 汚いもの、不快なもの、目を背けたいようなものを、さそうあきは真っ直ぐに見つめる。予断を交えず、世の中の常識なんかにはとらわれず、そこにあるものをそのまま、あるがままに描写する。そうすることで、美しいもの、大好きなもの、うれしくなるようなものがいっそう輝きを増して目の前に立ち現れる。本作もそんな「さそうマジック」があふれている。この作品は、天才的な絵の才能を持つ高校生男子ムネチカの、その天才ゆえにはた目には奇行にしか見えない一途な行動と、周囲の好奇の目などものともしない果てしない高揚と、それとは裏腹に静かに漂う生きものとしての哀しみを、クラスメイトたちをはじめとする周囲の人々（＝凡人）の視点であぶり出す。紙に線で描かれたただの絵と物語なのに、同じく凡人のわたしは読むにつけ右に左に、縦横に、気持ちを揺さぶられ、名状しがたい感情の渦に巻き込まれて心を震わせる。完璧な才能を持つものは本質的に空虚であり、その存在は（不完全で平凡な）人間がそれゆえに持つ愛すべきおかしみから遊離してただの「媒介」としてしか存在し得ないのだ、という境地を、さそうあきは繰り返し描いてきた。ただし、そこにとどまり、それでよしとするのではなく、そんな器のような存在が別の何かによって満たされる様子を見たい、という願望に、作者はずっと突き動かされているように思える。満たされてしまえば天賦の才は泡と消える道理。天才が立ち尽くすそんな瞬間の哀しみと歓喜を、一編の映画のように、冒頭から終幕まで駆け抜けるように描くのも、これまた天賦の才がなし得る偉業に違いない。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

## 「egg わたし、あなたの子どもです。」鳥野しの

- 卵子・精子提供が合法化された世界で、提供者のもとにある日突然「わたし、あなたの子どもです」と子どもが現れるところから始まる。家族と他人の境界という正解のないテーマを、複数の立場と感情で描き、読むものの心を揺らし続ける。さまざまなオムニバスのエピソードが、下巻で一筋に繋がっていく流れが見事。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

## 「エモーショナルイヤイヤ期～人間を3年育ててみた～」ビーノ

- 自分自身が親になってから、一番読んだ育児マンガです。楽しいだけではない、育児の様々なしんどいエピソードを絶妙なテンポ感と表情で楽しく読ませてくれます。きっとこれも様々な苦勞の中でも比較的人に話せる部類のエピソードを厳選して見せてくださっているのだらうと察せますが、自分のこれからの育児への覚悟の一助になっています。

株式会社ムービック / 岡部真矢

## 「閻魔の教室」田中優吏

- 地獄の価値観を持つ教師が、人間の学校に立ったらどうなるのか。『閻魔の教室』はその発想を、ただの奇抜設定で終わらせず、現代の「なあなあ」や「見て見ぬふり」を真正面から割っていく作品です。読んでみると、笑えるのに妙に背筋が伸びる瞬間がある。その感覚がこの漫画の持ち味です。この作品の気持ちよさは、暴力や過激さそのものより、\*\*言葉の“断ち切り方”\*\*にあります。レビューでも「言葉に力がある」「テンポがいい」と語られている通り、怨馬先生の台詞は説教ではなく“判決”に近い鋭さを持っていて、読む側の迷いを一刀両断してくる。だからこそ、読者の甘さや逃げ道を、静かに塞いでくる怖さがあります。本作の“わかってくれる”は優しさではなく、冷酷なまでの本質把握です。この漫画の気持ちよさは、暴力的な断罪ではなく、“核心に触れる断言”にあります。曖昧に流されがちな問題を、白黒つけることで露わにする。その瞬間は痛快なのに、同時に「自分も対象かもしれない」と思われる。だから笑えるのに背筋が伸びる。学園ものとしての読みやすさと、地獄目線の切れ味が両立していて、今後の展開への期待も込みで推薦します。

会社員 / 佐藤優

## 「OHMYGOD」半田背骨

- 好きです。絵も世界観も。「ドロヘドロ」を初めて読んだとき。「ファイアパンチ」を初めて読んだとき。すごく引き込まれた思い出があります。そのときと同じように、なぜか吸い込まれるような魅力があります。アニメ映画を見たときとか、深夜のAmazon Primeで見つけたどこかの国のSF映画のような。あるいはレトロゲームやSteamの傑作インディーズゲームのような。この独特な世界観と絵柄には、どうしても惹かれてしまう人がいると思います。そしてその一人が私です。

クラスター株式会社広報 / 西尾美里

## 「お気楽ポジティブ女の私がメンヘラ製造機になった話」前田シェリーかりんこ

- まさかこんな話と思うけど20代の頃私の周りにはこんな事もあたりなかつたり。共感することもあたりなかつたり。前田先生のSNSでかかれている『すっとこどっこいさん』や『靈感とうさん』も皆さんに読んで欲しいです。

カメラマン / 平沼久奈

## 「織田ちゃんと明智くん」常盤ギョ

- 会話や展開のテンポ感が良くクセになります。このタイプの作品は脇役が生き生きして永遠に読みたくなります。推しの歴史人物が出るまで続けてくれ、アニメ化してくれ、、と単行本が出る度祈っています。

会社員 / ターシ

## 「夫の遺言が「同人誌描け」だったもので」むんこ

- 4コマ系のベテラン作家だが、その同人誌歴は商業キャリアを遥かに上回る四半世紀に及ぶむんこさん。その彼女

にこのテーマで連載をさせた編集氏の慧眼が光る。細かいエピソードにも「同人あるある」ネタが満載。何より作者の同人活動に注ぐ視線が温かい。作中の台詞「同人誌は『描ける』『描けない』じゃない。『描くか』『描かないか』だよ」はまさに至言。

コミティア実行委員会 会長 / 中村公彦

- 夫からの遺言が「同人誌描け」だった奥さんが子供たちも巻き込みつつまた同人誌を作って頒布するまでを描いた話。この著者さんだから描けた作品かと思えます。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

## 「大人大戦」都築真佐秋、かっぴー

- 大人たちがいちばん無防備になる瞬間を描いた作品。エンタメでありながら現代社会への鋭いカウンターとして成立している。「いいね」に執着し SNS に監視される、今を生きる私たちは特に考えさせられる。また、笑える場面も多く、人間のみっともなさを徹底的に描き切り、それを上質な笑いに昇華させている。格好悪い自分を隠し続けた人ほど刺さり、笑えるのではないだろうか。大人向けの漫画ではないが、今この時代に大人になってしまった私たちが読むべき作品。

スターダストプロモーション・タレント / 秋本帆華

- 「大人」とは国家公認資格設定がとんでもないなと（褒めてる）そして今の日本にどれだけの人が「大人」として残るんだろうか…。正しい大人とはなんだろう…と考えさせられる。確かに監視カメラも増えて犯罪犯しても映像追って捕まる確率が高くなったが、ライブビューイングのように見られ続けるなんて考えただけでも恐ろしい…。

元コミック担当 / 実松由夏

- 第一話サブタイトルの『トラックで転生しないのかよ』のようにトラックに轢かれても転生しないし、浦島太郎よろしく世界は変わりすぎている設定が面白い。これから主人公はどうやって難題を乗り越えていくのかワクワクします。絵も読みやすく、主人公に感情移入もし易く、ストーリー展開が上手い。ストーリー漫画のお手本のような漫画で、とても好きです。

主婦 / 岸本のぶ

## 「おはよう、おやすみ、また明日。」御前モカ

- 作者自身の闘病体験を経て描かれる「がん闘病」の日々。大事な誰かが苦しいときに、何かしてあげたい。でも、それは相手にとって嬉しいこととは限らない。むしろ、傷つけることだってある。では関わらないのが正解なのか。そんなことはないはず。そんな逡巡と正面から向き合う作品でもある。「生きる」とは何かを、深く考えたときにぜひ手にとりたい一冊。

介護ライター / 島影真奈美

## 「おひとりさまホテル」マキヒロチ、まる

- おひとり様でさまざまなホテルに滞在する主人公。滞在先はホテルにとどまらず、クルーズ、リゾートにも広がる。読んでると一人旅に出かけたくなる旅行ガイド漫画。巻末には舞台となった実在のホテルの紹介コラムがある。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

## 「おへんろちゃん！」近藤るるる

- るるる先生のかわいいキャラクターが悩みながら協力しながら足掻きながら問題を克服していく姿を今作でもまた堪能させていただいています。

医師 / 岸本 倫太郎

「オルクセン王国史～野蛮なオークの国は、如何にして平和なエルフの国を焼き払うに至ったか～」野上武志、樽見京一郎、THORES 柴本

- 戦争とか兵站とか、そういうキーワードにピンとくる人は是非。傑出した出来だと思います。完結が楽しみです。

めがねっ娘教団教務大司教 / 田中海渡

## 「音盤紀行」毛塚了一郎

- レコードを題材に、過去・現代・未来、さらには宇宙までを舞台に描かれる短編集。音だけでなく記憶や想いを内包するメディアとしての魅力が丁寧に描かれていて、作者のレコード愛が伝わる一作です。短編ながらも、たまに同じキャラの続編があるのも嬉しいポイント。

会社員 / 小野塚博之

## 「界変の魔法使い」田辺イエロウ

- 不穏な雰囲気はあるものの、基本的には日常を描くという内容だが、描かれる異世界の日常が、いちいち面白い。主人公の少年が事情があって軟禁状態でほとんど外界を知らずに育てられた上に、事故で記憶を失っているという設定のため、読者も主人公と一緒に世界を知っていくという気持ち良さがある。そのうえで、主人公は利発で何をしでかすかわからない危うさがあり、共感しながらハラハラしながら見守るという状態になるため、先が気になってしまう。

駿河屋梅田茶屋町店 店員 / 小磯 洋

- 東洋的な魔法使いというデザインが魅力的です。物語にはさまざまな謎や伏線が散りばめられており、読み進めるほどワクワクが止まりません。

デザイナー／イラストレーター / 鷹嘴 柊子

## 「解剖、幽霊、密室」サイトウマド

- 短編集。何も知らずにこの部屋へこの世界へ入ってほしい。web で試し読みもできますが途中で1度止まって現実に戻ってしまうのはもったいない。謎が解けるまで出られない方が楽しいと思うので単行本で一気に読んでみてください。不思議な体験をぜひ。

声優 / 富岡美沙子

## 「帰りに牛乳買ってきて 女ふたり暮らし、ただいま 20 年目。」はらだ有彩

- 女性 2 人が 20 年にわたって一緒に住んできた日常が等身大で描かれている。世間からの圧もかわしながら、しなやかに生活を続けていく様子は、他の境遇に置かれている人たちへもエールとなるのではないだろうか。

鳥取県立図書館 / 野間 勲

## 「かくかまた」くさかべゆうへい

- 漫画の漫画はとよ田みのる『これ描いて死ぬ』が評判になったばかりだけれど、本当にプロの漫画家になりたいと思って漫画の専門学校に入って漫画のプロたちに囲まれながら漫画を追求する若い人たちの苦闘と苦悩を、濃くてハードな熱血めいた絵柄ではなく素朴で飄々とした雰囲気のコミカルなタッチで描いてグッと引き付け読ませる漫画はあまりなかった。割と美少女なのに漫画家を目指して突っ走る荒川美咲もなかなかいいし、秀才なのに荒川さんに刺激され自分も漫画家を目指してしまう蒲田三平もなかなか頓狂。周りの人たちもクセ強揃いなんだけど、面白い漫画を描きたいとか世に出したいというその思いのために誰もが突き進んだり盛り上げたりする姿が心を楽しくする。面白い漫画が生まれるまでを描いた面白い漫画から面白い漫画のヒミツを知ろう。

書評家／ライター / タニグチリウイチ

- 1 話目のインパクトが強く、今年の漫画大賞候補に決まっています。各キャラクターのクセも強く、皆んな優しく愛おしい。生きる楽しみがまた一つ増えました。欲を言えばそれぞれのキャラの深掘りエピソードも読みたいですな。

会社員 / ターシ

## 「書くなる我ら」北駒生

- 漫画も音楽も映画も落語も小説も、関わってる方は、同じようなものを見つめてるんだなど。勇気をたくさんもらえます。

オフィスオーガスタ・マネージャー / 樋口 健

## 「彼女は裸で踊ってる」岡藤真衣

- 昨年、友人に誘われて初めてストリップを観に行き、ものすごい衝撃を受けたことをきっかけに手にとった作品。自分自身と向き合うこと、肯定すること、愛すること、実際のストリップ観劇で感じたことと近いものを感じられる。あたたかで少し切ないような感覚と共に、劇場独特の空気が蘇ってきて、ああまた観に行きたいな、とあの日の感動を何度も思い返せる作品です。

元書店員 / 内野智未

## 「かまくら BAKE 猫倶楽部」五十嵐大介

- 鎌倉が舞台になっていると、つい気になってしまうのですが、その中でも、この本はお気に入りです。本当、こんな本が読みたかったので、出会えたときは嬉しかったー。美しく、うっとりうっとりします。

書店員 / 桶谷佳代

## 「かませ犬の王冠」しなちく

- 富も才能も全部持ってる傲慢なボンボンで、行動もセリフも典型的な序盤でヒーローに倒されるやられ役が主人公の本作。ヒーローに負けたら改心して良い奴になるんだけど……それがならない。性格悪いままなのが、なんだかリアル。でも、「物語の主演じゃない」って何度も叩きつけられるのだがここからのしぶとさが凄まじい。そんな不器用な執念が、読んでるうちに妙に胸に刺さってくる。持ってるはずが持っていない。才能も運命も持たざる者が、どこまで行けるのか。これからの展開もとても楽しみな作品です。

図案家 / 橋本寛子

## 「彼は友達」浦野月鼓

- 好きにならないから友達になってという最高のフリからの1話。クラスメイトとして1歩引いたところからあの関係性をニヤニヤ出来るような描かれ方で、読んでいる間ずっとニコニコしちゃいます。

女優 / 齋藤明里

- 読切り版から最高。表情・会話劇が最高。主人公の親友がツッコミと破天荒を行ったり来たりするのが最高。主要人物以外のキャラが強くて最高。ナイーブ男子の壁なんか、バカ真っ直ぐなパワーでぶっ壊してくれー!! って作品です。

会社員 / ターシ

## 「「かわいい」は、ときどき苦しい。」朝比奈ショウ

- 「なりたい自分」は確かにあるのに、周囲から貼られるラベルがそれを許してくれない。自分を定義されてしまう苦しさ、期待と現実のズレ、その息苦しさとそれをどう乗り越えていこうとするのが丁寧に描かれています。同じような悩みを抱えたことがある人ほど、ぜひ一度手に取ってほしいです。自分を決めつけられる苦しさに、真正面から寄り添ってくれました。

会社員 / 伊藤千恵

## 「かわいすぎる人よ！」綿野マイコ

- 姪っ子と叔父の同居生活。「かわいい」の輪が広がっていく疲れた大人には、癒しです、

tetote 代表 / 力丸真

## 「官能先生」吉田基己

- しかしほんとうに新刊が出るなんて。6年ぶり (!) の続巻は自分にとって大きさでなく 2025 年最大のトピックだった。いいエンターテインメントは、いまの読者にとってリアルで今日的な人間関係の機微を、時代背景をズラすことで「お話」(tale) として描いたりする。あるいは地理を変えてみたり。そういうエンタメ作品に接したときに「昔の話っぽいのにリアル」「遠い国の話なのにすごくわかる」というある意味で陳腐な感想が引き出されたとしたら、それはだいたい作り手の「勝ち」だ。街に路面電車が自然に走っていた時代を舞台に、恋愛小説家と

カフェの女給のすれ違い恋愛をじれったく、湿度たっぷりに描くこのマンガもその一翼だ。感情の揺れを押し隠し、無風無音をてらい、内面の混乱を取り繕い、平静平穩を装う態度が正しいとされる現代の世の中ではみんな避けがちな、剥き出しの感情描写が白々しくならないのは「昔のお話」の体裁をとっているところが大きいと思う。そんな心のひだを濃厚に塗り込める作画にもほれほれする。ページをめくるのがもったいないほど、一コマずつじっくりと読み進めたいし、何度でも読み返したい。オトナの恋愛もの（連載はモーニング・ツー）なので、描写が高潔とは言わないが、下品なところはかけらもない。なので、まだ恋愛も性愛も知らない子どもたちに（も）、こっそりと隠れて読んでほしい大人のためのマンガだと思います。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 自分も気づけばどんどん六朗の年齢に近くなっていた。六朗の溢れんばかりの情熱が羨ましく感じる程に、随分と歳をとっていた。タイトルの通り官能的な表現もあり、読む人を選ぶ作品かもしれない。でもこの素敵な作中の世界観や、美しい作風に触れていると。どうにかなってしまうほどの恋を試してみたかったなあ、とつい思ってしまう。

会社員 / 杉 佳尚

- もう続きは出ないのかもしれないと思っていたので、紙で出てくれただけで有難い限り。恋い慕う相手を思う中にどうしても湧き起こるやましさを、不純と取るか官能と表現するか。文学的とも称されるけれど、時折ハッとするようなシーンが差し込まれて、漫画ならではの読書体験ができる名作だと思います。

中央書店 / 井出麻悠美

## 「完本 いんへるの」カラスヤサトシ

- 時代を行き来しながら語られる怪奇譚。単行本化されていなかった分が収録されて「完本」として今出版されたことが本当にうれしい。毎話、ザッと切るように終わるので、呆然としてしまう。作者が「だって“そう”なので」と思って描いたことがわかるので、「なんで？」とか「この後どうなった？」とか問うことは、読者に許されない（感じがする）。「完本」版には著者による「全話解題」がついているが、やはりというか、種明かしにはなっていない。それがまた最高に良い。良いし、怖い。

ライター / 門倉紫麻

## 「きちじつごよみ」岩岡ヒサエ

- 結婚が幸せだって誰が決めたんだろうな。そうではない瞬間もきっとたくさんある。でも、酸いも甘いも乗り越えて、やっぱり幸せな瞬間が凝縮されている「披露宴」のさまざまなドラマに会えるのは、案外悪くない。恋を超えて愛になっていく光景にじんわり。

介護ライター / 島影真奈美

## 「喫茶牢獄」日本橋ヨヲコ

- 今の世の中に必要な漫画です。

オフィスオーガスタ・マネージャー / 樋口健

## 「君はおれの優しくない春」前野温泉

- 気持ちばかりが空回りしていてうまく噛み合っていない感じにとっても好感が持てる作品です。

会社員 / 林 礼春

## 「#ギャルとギャルの百合」イノウエ

- ギャル同士が恋に落ちる尊さ全開の設定に、読み始めから終わりまでニコニコが止まりません！優しくポジティブな世界観で嫉妬やイヤな障害が一切なく、二人の恋模様を安心して見守れる癒しの百合です。

会社員 / 三浦佑樹

## 「来見沢善彦の愚行」ときわ四葩

- かなり無理筋な展開ながら、昭和レトロの牧歌的？な時代に舞台を設定することで、「何となく許せてしまう構造」になっている所がニクイ。これからどう物語が進むのかは予測がつかないが、願わくばハッピーエンドであって欲

しいと思う。

コミティア実行委員会 会長 / 中村公彦

## 「軍人婿さんと大根嫁さん」コマ koma

- 急に軍人婿の誉さんがやってきて、大根を抜いてたはずなのに、その日に結婚することになってしまった花嫁の花ちゃん。小さい花ちゃんと大きい誉さんの対比が可愛く面白くて、田舎の人たちの描写も素敵で、心温まるお話。話が進むにつれ、誉さんの環境の過酷さがわかるエピソードが増え「花ちゃんと出会えて良かった…!!!」としみじみ。

営業 / 佐々木つむぎ

## 「劇光仮面」山口貴由

- 装い面する者たちの物語。むき身の日本刀みたいなマンガというのは変わらない。硬質で、美しく、危険。容易に人を殺傷しうるし、それが本質。異形を、怪獣を、仮面を、特装を望む者たちというのはつまるところそのような者たちでそこから照り返されるかたちで描かれる、では、彼らに、それでも誅されるべき悪とは何者であるか／ありうるかという問いが心底面白い。その答えは「熊」ってが最高にしびれる。

流しのソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 『シングルイ』『覚悟のススメ』の系譜に連なる、特撮×狂気×思想の怪作。

作家 / 海猫沢めろん

## 「ゲキドウ」三澄 スミ、ココカコ

- 『ガラスの仮面』だなんてとてつもない巨峰がそびえ立つ演劇漫画のカテゴリーにぶっ込まれてきた新たな演劇漫画は、元野球部員の挫折からの再起というドラマチックになるしかない物語に、演劇という何者かになりきろうとする方法を重ねて演劇というものが持つ磁力めいたものを描き出す。甲子園にもスタメンで出た野球部員の真柴緑太郎が3年生になる前に野球部を辞め普通科に移ってそこからリスタート。でも勉強はまるで出来ず野球部員たちから不思議がられ笑われたりもする状況でなぜか彼を演劇に誘う女子がいた。やっぱり経歴がドラマチックだから？ 真柴はドラマ性を利用されてるだけ？ そんな疑問や葛藤も抱きつつ真柴が自分の過去を振り返り、どうしたいのかを考えて少しだけ歩み始める物語が世に満ちあふれている挫折して足の止まった者たちに立ち上がる力をくれる。真柴を強烈に求めた脚本の田辺このかはいったい真柴を通して何を表現したいのか。それを真柴はどう受け止めて何を出すのか。これから面白くなるしかない漫画だ。

書評家/ライター / タニグチリウイチ

## 「ゲットバック」古泉智浩

- 一筋縄ではいかなかったり不公平だったりズルかったり。漫画家を目指す高校生のやり切れない現実なんだけど読み進む手を止められない。とにかく面白くて引き込まれました。

医師 / 岸本 倫太郎

## 「げにかすり」迫稔雄

- 最悪なヤツしか出てこない最高の漫画です！ボクシング漫画の新境地、表舞台に立つボクサーと裏方とされるプロモーターの両視点から描かれる外道物語。表通りを歩かせてもらえないなら裏口から扉をぶち壊すしかないだろう、毎週読んでいてアツい気持ちになったりゲラゲラ笑ったりしています。これからも追いかけます！

OKAMOTO'S / オカモトショウ

## 「煙たい話」林史也

- 少しでも多くの人に届くようにという気持ちを込めて、今年も投票させていただきました。言葉にした瞬間に零れ落ちてしまうものがあるのに、どうして言葉にしなければならないのか？と特大の矛盾を抱えながら書いています。このコメントを読むのを止めて、今すぐ購入に走って間違いありませんので、ぜひ。これ以降は蛇足ですので、ま

ずは作品を読むことを強くおすすめします。わからないままを受け容れるということについて、ずっと考えています。私たちはどうにも得体の知れないものが怖くて、言葉を引きずり出して、すべてに名前をつけては納得したつもりになっている。あなたはあなたで、わたしはわたしでしかないのに。それ以上でもそれ以下でもなく、それがすべてのはずなのに。理解したい、理解されたいと思うこと。けれど、どうしてもわからないこと。言葉にしてほしいと思うこと。言葉にしなくてもわかってほしいと思うこと。これでいい、これがいいと思っているはずなのに、何度も揺らぐこと。あなたが、わたしが、こうして揺れていることこそが、きっと何よりも大切なのだということ。それを静かに教えてくれる作品だと思います。林先生、これは、答えがなくて、終わりがなくて、本当にどうしようもなく、果てしないことを描こうとしているではありませんか…？この時代に、この作品が生まれたことに感謝します。そして、この先も不変で、不朽の作品として残っていきますように。どうかそんな世の中であり続けることを切に願います。最後になりますが、昨年電子版カバーを6巻分描き下ろし(!)されていて、電子版と紙単行本で表紙イラストが異なるのも見どころです。どちらもとっても素敵なイラストなので、ぜひ両方並べて、一緒にゆらゆらしながら楽しみましょう。

会社員 / 堀尾素子

## 「限界 OL 霧切ギリ子」ミートスパ土本

■ 夫と二人で楽しく読んでます。自分の貧乏暮らし時代を思い出して刺さりました。片栗粉 + α で「それっぽい一品」を成立させる感じとか、家にある調味料で限界メシを組み立てるとこなど、リアルで笑えるし自分と被るって懐かしく笑えます。その日を生き抜くだけなストイックさ。周りのメンバーも一癖二癖あり、昭和感？平成感？ただようちょっとノスタルジーなところも良いです。

自営業 / 玉澤綾子

■ ちょっとクセのある OL ギリ子さんと仲間たちによる日常を描いた四コマ。好きなものに対する思いがとにかく凄い。自分が知らない世界を教えて貰ってます。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

■ 「概念○○」という料理の新概念を教えてくれるマンガ。カツ丼の一切れの食べる順番とか、酒×酒×酒×酒×酒で作るロングアイランドアイスティーとか、そこそこ生きてきた中でそこそこのマンガを読んできて、無駄知識を蓄えてきてる私ですら知り得なかったモノやコトを教えてもらえるの本当に知的好奇心が満たされて助かってます。探究心溢れるというか「行動力!!!」と突っ込まずにはいられない、すごい面白い人の頭の中を覗き込ませて頂いている感覚になります。

会社員 / 布施直人

## 「けんかめし」M o o . 念平

■ 1話10ページの中で繰り広げられるけんかご飯とあたたかい結末。綺麗な描線とその漫画の技巧。いつまでも読んでいたい。

医師 / 岸本 倫太郎

## 「現象 X 超常現象捜査録」温泉中也

■ 異能×クライムサスペンス！都市伝説好きにはささる？自分は好きです

tetote 代表 / 力丸真

## 「ケントウリア」暗森透

■ ダークファンタジーと呼ばれる作品の多くがそうであるように、本作もまた映画におけるロードムービーの要素も帯びている。この2つの要素が合わさったとき、『ベルセルク』などがそうであるように、主人公たちに次々と降りかかる艱難辛苦と逃避行は物語により暗い輝きを与える。底なしの悪意にさらされる旅の微かな希望は人との心の絆に見いだせるが、作者はそこにも毒の種を蒔き、これからの発芽を待っている。展開から目が離せない。

会社員 / やのこうじ

- ダークファンタジーとしての世界観が濃く、物語にくっと引き込まれます。その中で描かれるキャラクターたちの成長も大きな魅力です。

デザイナー／イラストレーター／鷹青終子

## 「恋じゃねえから」渡辺ペコ

- 性加害と、表現者の持つ暴力性を真正面から描いたうえで、エンタメとして最高の形での完結したのがすごすぎる。間違えても、何年経っても、気づいた時にもう一度やり直すことはできる、というシスターフッドのあり方にぐっときた。読むと力がみなぎるし、それはこの先もことあるごとに私を助けてくれる力だと思う。

ライター／門倉紫麻

- 2025年2月、最終6巻の発売をもって完結。「恋」という口あたりのよい型に収まって説明不要なその関係が実は恋じゃないとするならば、いったいそれは何なのか。人と人が立場や年齢や力関係を越えて個として対等に向き合い結びつくことの難しさを、このマンガは深く掘り下げてきた。そしてそれは最後までわかりやすい解決を見るに至らない。そもそも簡単に答えが出るテーマではない。クリエイターやアーティストと呼ばれる仕事は、周囲の無責任な思考停止的称賛によってクリエイティブであると認定されれば何をやっても許されるのか。時としてそれは傲慢な所業であり、人として鈍感なのではないのか。そこに異議を唱えるのは、芸術という至高の価値を理解しない野暮天なのか——。本作が提示する問いは、ともすればコンプライアンスの名の下に創造性のフリーハンドを奪い、また、多くの恋愛を不可能の域に追い込みかねない。おそらく連載の過程で様々な議論を呼んだだろうし、そもそも渡辺ペコはそれだけの覚悟をもって連載を始めたのだろう。ストーリーの終幕近くでは、加害者として描かれてきた彫刻家が「自分が今まで恋愛だと信じていたことが／加害行為だったのかもしれないと少しずつ理解できるようになってきた」(6巻100ページ)と翻心する様子が描かれる。しかし、それでなんとなくの落着きに向かうのではなく、作者はもう一段の強いやりとりを投げ込むことを辞さない。それによって作品は苦さを残したまま終わるが、最後に作者の意志と一縷の希望がほの見えるので、あとはこの作品が問いかけたテーマについて、読んできた私たち一人ひとりがそれぞれに考えるしかない。

日本経済新聞記者／天野賢一

## 「後宮の花結師」鈴屋瑛茉、彌はるこ

- ラノベ原作はあるのだけど、コミカライズしてその画力で作品の魅力が何倍にもなった作品!!!後宮の女官には、頭部に女性の命であり品位の象徴でもある「癒花」という花が咲いていて、それを整え髪を結う「花結い」を特技としている主人公。荒れ果てた後宮を救うために奮闘するのだけど、主人公の表情や各キャラクターの個性的なこと、性別を超えた愛(!?)も合わせて、テンポよく読めます!読んだら、即、面白い!!!って思える作品で、外伝でいいから続きが読みたい!!!!

俳優／ジェネラリスト／大倉照結

## 「鉱石令嬢」深川鱒夫、甘味亭太丸、星野太平洋、SNC

- おなじみのゲーム世界への転生物語ですが、「没落した悪役令嬢が炭鉱で一山当てるまでのお話」という副題の示すとおり、冒険活劇ではないのです。主人公はこちらの世界では鉱物研究者の女性。転生先の中世世界でコークスを使って鋼を完成させます。その分野の専門用語もでてくる理科系冒険劇。原作者は、鉱物学部か冶金学部の卒業者でしょうか。住友金属鉱山などの鉱山系の会社に勤務しているのかも。新しいコンセプトでの漫画です。鉱物学や冶金学を学ぶ理系女子が増えるかもしれません。

弁護士・三村小松法律事務所／三村量一

## 「高2の恋の忘れ方」小沢かな

- 苦しくて苦しくて苦しくて、何度も読む手が止まった。でも、離れられなかった。最後まで読み切って、本当に良かったと思わせてくれた作品。こんなラストを用意してくれてありがとうの気持ちでいっぱい。「忘れられないことは忘れなくていいのだ」という言葉を残して去った大好きだった友人に届けたい一冊。

介護ライター／島影真奈美

## 「探鉱ドワーフめしをくう。」四方井ぬい

- ファンタジー定番から少しズラした独自の世界観と絵柄がマッチしており、探鉱に潜ってその日暮らしをしていた少女が段々と人の輪を拡げていき夢を追いかけるという王道を嫌味なく描いており、それらがスッと入ってくる嫌味のなさや暖かさが優秀な作品。

住職・ライター / 蟬丸P

## 「コータロー君は嘘つき」緒之

- 人の心が読める男の子と恋する女の子、心が読まれてしまう相手にどう接することができるのかまだまだ謎もあり、これは続きが気になる！

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

## 「国宝」三国史明、吉田修一

- 昨年、映画化された『国宝』。コミカライズされており、読んでみた。まず「画」の力が本当にすごい。役者が花道で見得を切る瞬間、その重圧や熱気が画面からバシバシ伝わってきてます。一極道の家に生まれて、歌舞伎で生きていく。その運命に抗う「業」みたいなものが映画とはまた違う熱量で描かれてております。小説を読んだ方、映画を見た方も見てない方も、このマンガならではの臨場感を味わってほしいです。

図案家 / 橋本寛子

## 「こころの一番暗い部屋」雨夜幽歩

- 「漫画がうまい」と素直に唸られました。できれば感想などの前情報を入れずに読んでほしい一冊です。作中の創作怪談、一話ごとのエピソード、そして本筋の展開が非常に巧みで、想像していなかった読後感でした。キャラクターも全員が魅力的。ホラーですが、とても人に優しい作品です。

声優 / 綾瀬有

- ホラーが苦手なのですが、怪談って面白いんだ！と思えた漫画。お話は、作家さん達が作業しながらボイスチャットをしていて、そこで「キーワード怪談」という遊びが流行り出します。「キーワード怪談」とはその場にいる人で単語を一語ずつ出し合って、誰か一人が出た単語全部使って即興怪談を作って語るというもの。そんなキーワード怪談をしつつ、即興怪談を聞いた主人公達が独特な感想を言ってくれ、作った本人も気づかなかった自分のこころの底に触れるというもの。キャッチコピーに「新感覚ホラー×セラピー」とあったのですが、まさにその通りです。怖いだけじゃない優しい物語。創作怪談も毎話面白いし、リンクしていく心情や、ボイスチャットのアイコンと声しかわからなかったキャラクターの人となりが見えてくる構成が素晴らしい。1話完結で進んで行きながら大筋の物語と交わった時は鳥肌が立ちました。全てが美しくハマっていくのどうやって考えてるんだろう！？すごすぎます。怪談は話も絵もちゃんと怖いのですが面白く、ホラーがめっちゃくちゃ苦手な私が読めているので苦手な方もぜひ読んでみてほしい。

声優 / 富岡美沙子

## 「COSMOS」田村隆平

- ありそうでなかった設定がハマって、ちょいちょいギャグも入れつつ、人間模様ならぬ宇宙人模様が描かれていて良い！

ロングランプランニング株式会社 / 小森和博

- 人間と人間のフリをして地球で暮らす宇宙人が共存する世界で、そんな宇宙人相手の保険屋をするという設定が面白いです。派手さよりも余韻を重視した描写と、淡々とした優しさが魅力的だなあと感じます。

デザイナー／イラストレーター / 鷹薮柊子

## 「伍と碁」仲里はるな、蓮尾トウト

- こちらも才能豊かなながら挫折を知る少年の復活譚。神童だった少年が5人の囲碁の超天才に叩きのめされたところから、再起を図るリベンジ譚。「囲碁を主題とした週刊漫画誌連載は『ヒカルの碁』以来21年ぶり」とか「日本

棋院全面バックアップ」などの補足情報が強いが、設定の時点で物語の強度が一定担保されていて、今後の展開に期待が膨らむ。「一定」を超えた面白さに届いたら最高です。

ライター／編集者 / 松浦達也

- サッカーも野球も、スポーツはなんでもできちゃう天才の主人公。偉業を成し遂げた人がいる場所ではなく、いないと思ってた囲碁の世界に飛び込むが、そこには5人の天才がすでにいる、圧倒的に負ける。天才が天才に挑む、久しぶりの王道囲碁成長物語。

元コミック担当 / 実松由夏

- スポーツも勉強も“神童”だった秋山恒星が囲碁に挑むという導入だけでワクワクするが、本作は早々に「上には上がいる」を容赦なく突きつけてくる。囲碁漫画という難解で、静かで淡々と進む印象を抱くかもしれないが、本作はむしろ逆の印象を受けた。主人公は自分を完膚なきまでに叩きのめした天才たちに「勝ちたい」という気持ちが前に出ており、対局シーンのテンポもよく、読み味はスポーツ漫画に近い。石を置く間や一手一手の重みをきちんと描きつつ、専門用語を羅列して置きざりにせずに、エピソードと感情の揺れで引っ張ってくれるのが上手い。天才たちの存在が単なる壁ではなく、対局のたびに主人公の覚悟が更新されていく感もあり、続きが気になる。

弁護士 / 田邊幸太郎

- ヒカルの碁世代なので、久々に面白い囲碁漫画だ！とワクワクしながら読ませてもらっています。主人公の挫折の仕方から、周りの天才の倒し方まで、妙に共感できる箇所があるのが好きです。

OKAMOTO'S / オカモトショウ

## 「言葉の獣」鯨庭

- 素晴らしい獣の表現力が、改めて「言葉」の意味を考えさせてくれました。

オフィスオーガスタ・マネージャー / 樋口健

- 言葉ってなんだろう。おなじ言葉一つとっても時に感謝であり遠慮であり、賛時であり皮肉である。言葉という総意をもっているのに不思議だ。それを言葉以外の形で表現したらどうなるんだろう？そんな想いからこの本は産まれたに違いない。美しく淡々と主人公2人の言葉を強くしながら物語が進んでいく

鳥取県高等学校教員 / 佐川由加理

## 「転がる女と恋の沼」芥文絵

- 泣いた泣いた～！女子キャラみんなで女子会したい！最新刊よかったです。特に「唐揚げ食いながら陰口叩いてる暇あったら～」の台詞好きです。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

## 「転がる姉弟」森つぶみ

- 再婚により出来た思ったより可愛くないとお互い思ってる姉弟が、どんどん本当の家族になっていくお話し。涙もあるけれど、笑いありでほっこりと沁みていく。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 連載も長いのですが、7巻のラストの話がとても良かったので改めて読んで頂きたい。最終回じゃ無いのにこの最終回感。両親の再婚で姉弟になった子供たちの話ですが、とにかく明るくて元気な良い話です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

## 「婚活とミシン もう一度恋がしたいけどめんどくさい気もする」和田フミ江

- 若気の至りと中高年の恋愛について本気で考えたことがある。若気の至りは引き返せないが中高生の恋愛も難しい事がある。若さ＝魅力という簡単なものではなく、勿論そ本人の人格の問題がどうこうだけではなくて運もからんでくることもあってと、色々な要素があるんだけど結果だけ見れば失敗体験を積み重ねた人が奮闘することになる。びびったり、考えすぎたりしながらより良い互いと自分を見つけていく行為だと思う。自分の体験とリンクすることもたくさんあるけど、神の目線で主人公たちを愛おしく見守りたくなる作品

鳥取県高等学校教員 / 佐川由加理

## 「婚約者は溺愛のふり」仲野えみこ

- ラブコメ最高～！プレゼン資料とかフローチャートとかおもしろすぎる。少女マンガだけど働いてる大人が読んだ方が楽しめるかもしれん。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

## 「酒蔵かもし婚」菅原じょにえる

- コメディ要素の強い婚活モノかと思いきや、気概を感じる日本酒の酒蔵漫画。話が進むにつれてサスペンス要素が強まっているが、主人公の明るいキャラクターがうまく中和してくれるので気負わず読める。独特なコメディ感と日本酒・酒蔵の魅力が楽しめます。

営業 / 佐々木つむぎ

## 「ザ・キンクス」榎本俊二

- 2024年もプッシュしましたが、2025年発売の3巻もやっぱり面白かった！今までの人生で何万作もマンガを読んできましたが、絵もお話もこれまで見たことのない、どこにもなかった表現での家族の描き方がここに 있습니다。3巻は特に栗子おかあさんのことがめっちゃくちゃ愛おしくなるかも。シンプルな絵柄ではありますが、キャラクターの愛らしさも画面の構図も、天才が描くそれではしかありません。アナログ作画での毎話の扉絵の描き込みも圧巻。ページの隅から隅まで見てほしいです！

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 家族を見守る優しさと絶妙な距離感。着眼点の鋭さと表現力。良き父親、そして巨匠の趣きがあります。あらためてキャリアを振り返ると、家族と子育てをずっと描き続けてきたことに感じ入ります。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

## 「サテン de サザン」渋谷直角

- 思いもよらない方向に進めまくっているのに、何故かその積み重ねが良い方向に！？コーヒーが好きでタバコが嫌いな主人公に共感しながらも、愛すべきクセばかりの常連が憎めない。こんな喫茶店があれば入り浸りたい。店名も含めて好きです。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- どストライクでした。何度も読み返したくなります。こんな本が読みたかったです。サザンオールスターズさんがお好きだと、更に楽しいと思います。サザンさんの知識なくても、楽しく読めますよ。でも、読んでいくと、サザンさんのことが気になって、サザンさんにはまっちゃうかもです。

書店員 / 桶谷佳代

## 「ザハの恋」嵐山のり

- 泣いた泣いたー！ピュアラブストーリーかと思いきや、だんだん謎が生まれるミステリー。上下巻なので次で完結！楽しみです。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

## 「THE BAND」ハロルド作石

- バンドって昔こんなだったかと、高校生くらいのバンドを始めた時を思い出してしまう。主人公の使うギターがカワイのムーンサルトというのが、なんとも言えない！

デザイナー / 平沼寛史

## 「THE POOL」桜井画門

- 洋画的展開×桜井先生の画力の唯一無二の体験を味わえた。この世界観で他のストーリーも読みたい

会社員 / 齋藤隼

## 「THE MARSHAL KING」Boichi

- 昔の話と思いきや、未来の話。仲間のために、形振構わず戦う熱い男感がよいです。登場人物が魅力的で、校長が滅茶苦茶すごいやつなのもよい。

デザイナー / 平沼寛史

## 「佐条利人の父とその部下」中村明日美子

- 同級生シリーズのスピノフ、佐条くんの父のお話。お父さんのことは気になっていたのでこんな物語が読めてうれしかった。イケおじ、最高です。

主婦 / 紺野泉

## 「山岳超人マツオカ」糸田晃宏、志名坂高次

- 登山に精通する温厚なおじさんが行う復讐劇。ギャップがスゴイ。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

## 「サンダー 3」池田祐輝

- 誰が何と言おうがページをめくるスピードが読むスピードを超えてくるくらいドキドキワクワクします。

PENICILLIN / HAKUEI

## 「サン = テグジュペリは夢をみる」すみれちゃん

- 1920年代のフランスを舞台に、作家志望の少女が航空郵便会社のパイロットとして苦闘する歴史ロマン。正統派のビターな物語を端正に綴った良作中の良作。

書評家・ライター / 福井健太

## 「しあわせは食べて寝て待て」水風トリ

- なんでもない日常生活を描いた漫画。主人公と大家さんとのやりとりは、漫画「大家さんと僕」を思わせる。ストーリーも画も優しく、ホッとさせる漫画です。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

## 「J ⇄ M ジェイエム」大武政夫

- キャラ同士の入れ替わりが複雑になったことで笑いに対して単純さが欠けてしまい、数話は不安に感じたものの、すぐに慣れました。おもしろい。

イロイロ屋 / 杉本善徳

## 「汐風と竜のすみか」縞あさと

- 日常とファンタジーのバランスが素晴らしい！何よりキャラクターがとても魅力的だなと思います。不器用な男の子が好きな方は絶対に読んでください。人間と竜人の物語ではありますが、等身大の高校生らしいやり取りにほっこりにっこり。一緒に生活をしていく中で、少しずつお互いの心がほぐれていくさまが丁寧に描かれているなあと感じます。2巻では竜人側の事情が少しずつ見えてきて…。日常を見守りながらも、これから物語がどのように動いていくのか楽しみにしています。

会社員 / 堀尾素子

- 竜人というドファンタジー題材なのにそれを感じさせない。透明感ある絵柄が魅力的。ある日突然一緒に暮らすことになった竜人男子と人間女子、お互いがぶつかりあって心を通わせる過程が丁寧に描かれていて良い。それぞれの人間関係がこれからどうなっていくのか楽しみ。

主婦 / 赤坂真実

## 「塩田先生と雨井ちゃん」なかとかくみこ

■ 泣いた泣いた〜一方でギャグパートが面白すぎて情緒が…最終巻を迎えましたがとても素敵な結末でした。ありがとうございました！

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

## 「時間の神様」風呂川ツカサ、中西鼎

■ 「時間を止められる」という発想は、普通なら願望の物語になりがちです。でも『時間の神様』は、そこから一歩も二歩も踏み込んで、奇跡が“後戻りできない現実”に変わる瞬間を描いていきます。時間が止まる静けさは魅力的なのに、その静けさの中で選んだ行動が、現実の時間に戻ったとき重く響いてくる——この構造が、サスペンスとしても青春劇としても強いんです。本作の核は、能力の派手さではありません。“一度やってしまったこと”を抱えた人間の視線を丁寧に積み上げる点です。ここにあるのは“便利アイテム”の物語ではなく、“罪悪感と選択”の物語です。そして、青春のきらめきと、背筋が冷えるサスペンスが、同じ線上で走っていく構成が見事です。守りたい気持ちが強いほど判断が危くなる、その切実さがページをめくらせる。読み終わったあと、「もしも」を夢見る気持ちに、少しだけ現実味の影が落ちる——そんな余韻が残ります。

会社員 / 佐藤優

## 「司書正」丸山薫

■ 国家の蔵書全てを頭に収め、存在自体も国家機密である「司書正」をめぐる物語。「古代中国風の宮廷ファンタジーかな」くらいの気持ちで読み始めると、初っ端から頭に浮かんだことすらない斬新な舞台設定にぶん殴られ、「もしかして今とんでもないものを読んでいるのでは？」と居住いを正させられることになります。その上で動き始めた物語！さらに広がる世界！主人公の能力の秘密の謎！とこれからの楽しみが止まりません。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

## 「シテの花ー能楽師・葉賀琥太郎の咲き方ー」壺原ちぐさ

■ 古典芸能に挑戦する若者たちの成長物語としてもとても面白いのですが、何より素晴らしいのが全体から溢れ出る「能楽」の魅力。10年ほど前に大学生中心の能発表会を見に行ったことがあったのですが、あの頃の私は正直魅力がわかりませんでした。知見が広がり、興味や関心を引き出すマンガは推していきたいですし、再度「能楽」を観に行きたくさせてくれたこの作品は特にオススメです。みんな、一度「能楽」を観よう！

書店勤務 / 野口忠義

「死に戻りの魔法学校生活を、元恋人とプロローグから（※ただし好感度はゼロ）」白川蟻ん、六つ花えいこ、秋鹿ユギリ

■ いわゆる、ループものだがコメディとシリアスのバランスがちょうど良く、コミカライズによって、より世界設定が明確に。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

■ 友達に薦められて読み始めて今では続きが気になってしょうがない作品です。目を引く丁寧な線の描写に引き込まれます。もっと絵を堪能したいのに話の続きが気になって、いつも読む時は話を追った後に2周しています（笑）話もいよいよクライマックスかと思ったらまさかの新章突入で、驚きと同時にまだこの作品を堪能できると思うと楽しみです。

自営業 / 玉澤綾子

## 「シバつき物件」大森えす

■ とにかく犬好きな自分にはたまらない。自分もここに住んで柴ちゃんに囲まれたいと毎回思いながら読んでます。私だったら即全員成仏させる自信があります（笑）それか入居した瞬間自分が成仏できそうです。氷とむっちゃんが仲良くなってむっちゃんが本当に可愛くて、ちゃんと成仏してほしいけど絶対成仏してほしくないです。アパートの住人も増えてみんないい人たちなので、犬好きに悪い奴はいないと確信してます。心温まるお話が多くてこれからも楽しみにしております。

自営業 / 玉澤綾子

## 「自分ミュージアムへようこそ」あきばさやか

■「自分の心を展示する博物館」への招待状。そこは、人の人生や思い出、そして自分でも気づかなかった感情までも映し出す、不思議なミュージアムです。どのエピソードもやさしく、ほっこりとした温度を保ちながら、読後には心が少しあたたかくなりました。中でも「親離れ・子離れ」をテーマにした展示では、思わず主人公に自分を重ねてしまいました。いつか訪れるであろう息子の反抗期を思い浮かべながら、自分自身の反抗期に親に何をしてしまったのか——そんな記憶が胸の奥をじんわりと揺らしました。読み終えたあと、息子を抱きしめながら、自然と実母に会いたくなったり…。「自分の心の中にあるミュージアムは、どんな展示で満たされているのだろう。」そんな想像が読後にも静かに残る作品でした。

会社員 / 伊藤千恵

## 「じゃあ、あんたが作ってみろよ」谷口菜津子

■先生の漫画が好きで、今作を読んだ時とても面白かったのでたくさんの人に読まれればいいなと思っていたら、ドラマ化で日本全国が知る存在に！面白さだけでもいけるが、話題性も含め大賞候補には入りたいです。他の作品も面白いので読んで欲しいし、個人的には飲食シーンを描くのが最高なので「スキマ飯」という作品もオススメです。

お笑い芸人 / ムーディ勝山

■自分の当たり前は他人の非常識。頭ではわかっているつもりでも、いざ直面すると戸惑う。「料理」を巡るあれこれも、そのひとつだと思う。日常的に押し付けられる「男子だから」「女子だから」に軽やかにノーと言えるのか、それとも唯々諾々と受け入れるのか。どちらを選ぶのも自分自身なんだ！と改めて感じる。けっこうムナクソ男子だった「勝男」がさまざまな試練に直面して変化していく様子も目が離せなかった。

介護ライター / 島影真奈美

■もうドラマ化され、先に有名になってしまったけれどやはり原作、面白いです。最初はなんだこいつと腹が立ったカツオも、どんどん愛しい存在に…

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

■今までの物の見方を少し変えてみようかなと思わせてくれる作品。元気をくれる作品です。

会社員 / 津田圭

■テレビドラマで人気になって今さら「推す」必要もないか……と思っても、面白いからしょうがない。主人公を中心に、みんながどんどん変わっていく疾走感と爽快感。それでいて、対する社会の側のしがらみや規範や偏見や固定観念のあれやこれやを安易にやっつけてしまわないリアリズムもしっかり。巻が進んで前ほどがつつり料理を作らなくなった感じがするので、そこはちょっと残念だけど。

朝日新聞記者 / 小原篤

## 「獣王と薬草」坂野旭、良田竜和、ももちち

■変に凝った設定もなく、自然な感じの話の流れが読みやすく、いろんな人にオススメです。最初はあまり気にしていませんでしたが、途中で出てくるラーメンみたいなのが最高に美味しそうです。

教師 / 持丸宏司

## 「囚人転生」ホリエリュウ、いとまん

■脱獄死刑囚軍団と彼らに襲われた被害者が同じ世界に転生して更に特別な能力を手に入れたら…というお話ですが、授かった能力をどう活かすか？転生先で新たな力を手に入れた死刑囚たちとどうやり合っていくのか？と、能力者バトルとしてめちゃくちゃアツいです。あと女性目線で見てもキャラがムチムチで可愛い！

会社員 / 畑中瀬路奈

## 「祝福のチェスカ」乃原美隆

■ファンタジーの世界で繰り広げられる“会議”の応酬が、読み応え十分。物語はまだ始まったばかりだが、特異な力、遺物、国や民族など、練り込まれているだろう世界にワクワクできて、そこで動き回る魅力的な登場人物たちを、様々

な地域を繋ぐ言語学に長けた主人公が繋いでいく設定も面白い。この先どんどのめり込めそうな、期待の作品。

会社員 / 伊東敬祐

- 様々な国の王族が集う学園、神より与えられた力（ルア）を使役する人々に支配されている世界、力を持たぬヤグーと呼ばれる被差別民。異なる出身の生徒それぞれが口にしてるのは異なる言語。『王族会議』と呼ばれる生徒会メンバーの会議で通訳として彼等の間を取り持っている言語学の天才、少女チェスカと虐げられし民ヤグーの王子シキが会う。もう設定から壮大でわくわくさせてくれます。丁寧に描かれる言語の違い、文化の違い。これぞファンタジー！先が楽しみな作品です。

会社員 / 津田圭

## 「呪文よ世界を覆せ」ニコ・ニコルソン

- 短歌もお笑いも好きで手に取ったのですが、思っていた以上に切なくあたたかい物語でした。知っている短歌が出てくるのも個人的に嬉しく、主人公が詠む短歌もキャラクターが反映されていて良かったです。ストーリーに奥行きが出る歌でした。幸せな二人の時間を読めてよかったです。

声優 / 綾瀬有

- 短歌の三十一文字という制約の中に、割り切れない感情や日常の機微を閉じ込める面白さに、主人公は次第に魅了されていく。歌集を読めば、同じことを考えていた人がいたことを知り孤独がまぎれるし、気のきいた歌が詠めると、周囲が輝いて愛おしく見える。どちらも生きていく上で大事なことだと思う。短歌に限らず、芸術に触れたり、創作したりすることはそれに気づかせてくれる。

鳥取県立図書館 / 野間勤

## 「少年魔法士 フレアスタックス」なるしまゆり

- 少年魔法士に続編がくるとは夢にも思わず。生きてて良かった…。続編と叫ぶつつ、ここから読んででも何ら差し支えないです。やっぱり、なるしまゆり先生は天才です！！相変わらず話も絵も気持ち悪い！！気持ち悪いことがちゃんと伝わる画力も言語も大好きです！！続編キャラが出ようが出なかりょうが、少年魔法士の世界観をまた味わえるだけで幸せです。

営業 / 佐々木つむぎ

## 「成仏させてよ！」百地元

- ヤクザの青年が追手から逃れるために僧侶になりすまし…とあらすじにまとめるとあるあるに思えるかもしれませんが、作者の深い仏教への理解が作品にうまく落とし込んであり、仏の教えや仏教世界について分かりやすく理解することが出来ます。ストーリー自体も世代を問わず楽しめる内容なので、色んな歳の人に読んでほしいなと思いました。

会社員 / 畑中瀬路奈

## 「女子高生除霊師アカネ！」大武政夫

- 主人公アカネは少し金に汚い普通の女子高生。靈感ゼロなのに、心理効果や大ボラを巧みに操って顧客の懐に入り込み、最後は適当なお祓いで除霊をやり切る姿が痛快です。インチキと勢いで乗り切る展開がとにかく面白い！

会社員 / 小野塚博之

## 「シルバーマウンテン」藤田和日郎

- 語り手たる江戸時代の少年は現代の老人で異界へ連れて行かれて武道 VS 魔道のバトル。自分で言っていて訳がわからない。けれどそんな些末なことは気にならなくなるほど面白い！

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- ベテランというかレジェンドとも呼べる先生が、現役で作品をまだ産み出されてるという事がもう大大大大感謝で、超超超超リスペクトなんです。作品も先生のカラーが損なわれず、とてもエネルギーに満ち溢れたストーリーと作画。素晴らし過ぎます！まだガンガン新作を描かれている先生方を褒め称える漫画の賞がもっとあっていいのに

といつも思っています。

お笑い芸人 / ムーディ勝山

## 「じんちく以外」小田扉

■ やっぱ優しい小田扉ワールド。切なくて優しい。

カメラマン / 平沼久奈

## 「数学ゴールデン」藏丸竜彦

■ 数学が熱血になるなんて誰が思った。数学がラブコメになるなんて誰が考えた。そんなあり得ない展開をしっかりと含みながらもしっかりと数学に挑む子高校生たちの熱を描き抜いてきた漫画はいよいよ数学オリンピックという数学に挑むものたちの晴れ舞台へと続く階段のその先っぽにまでたどり着いた。ここから武闘会のバトルにも似た頭脳の戦いが繰り広げられることになるけれど、そんな数学に同じように挑んでいてもそれぞれに違った思いがあって人の思いの多彩さを知る。数学だけの小野田春一と数学もある七瀬マミの進道は重なっていくのかそれとも。ラブコメ要素の行方を気にさせつつ何もかもなげうって数学の真理に迫りたくもなるこの漫画こそが数学でも解けない問題なのかもしれない。

書評家 / ライター / タニグチリウイチ

## 「スーパースターを唄って。」薄場圭

■ 感情で湿って重さが乗った、このマンガの会話が好きだ。決して読者に向けて親切に説明するための言葉ではないから、断片的だったり、言いかけた言葉を飲み込んだり、その場の雰囲気や省略されたりもするけど、その分のリアルがゴリゴリの関西弁で刺さってくる。小節のように区切られたコマとコマの上をフローする、極めて個人的で生き活きとしたセリフを僕はラップと重ねてしまうから、このマンガでしか味わえないライブを最前列で見たくて、またページを開くのです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

■ 絵柄に反してシビアな内容。先が気になる

会社員 / 齋藤隼

## 「スーパーの裏でヤニ吸うふたり」地主

■ 大人の女性のピュアな心情の揺らぎが心に刺さる。

株式会社 radiko / 澤田真吾

■ 作中に出てくる人々の優しさに心がほどけて、つい表情も朗らかになってしまうような作品。なんだか上手くないかない、とか。気が滅入ってしまうなあ、なんて時に。この作品の優しさが沁みる。誰かの何気ない一言に救われる、なんてことがあったりする。自分もこの作品に出てくる言葉に随分と救われています。

会社員 / 杉 佳尚

## 「隙間」高妍

■ 詩的な台詞回しで淡々とした語り口。身近な恋や生活と国家、歴史が交錯してまさにその「隙間」を主人公が前に進み続ける。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

■ とても繊細な作品だと思います。

会社員 / 林 礼春

■ 一見ふわっと甘々な「異文化交流もの」に見えて、終盤に現れるメッセージはなかなか硬派で強烈。やや唐突感もないではなく、そこで評価が分かれるかもしれないが、こういう作品は今どきなかなか読めない。ちょうど同じ頃、新里堅進「ソウル・サーチン」を読んだので、なおさらそう感じられたのかもしれない。昨年のマンガ界を語る一作として、やっぱり落とせないなあと思います。

元新聞記者 / 石田汗太

## 「スクールバック」小野寺こころ

■ 日常の何気ない事が、とんでもなく気に掛かって。不安でどうしようもなく、先も見えなくて、どうすればいいか分からなくて。そんな思いを背負っていた時期があったことも、この作品を読むまですっかり忘れてしまいました。歳をとるにつれて鈍くなり、少しずつ生きやすくなっていくのだけれども。それでもあの頃の自分の生き辛さもすっかり抱えて前に進めていけばいいな、とふと思いました。色んなことがあるけども、それでも毎日変わらず続いていく。悩むことが多かったあの頃から続いている日々の愛おしさを、改めて思い起こさせてくれる作品です。伏見さん、とっても素敵。

会社員 / 杉 佳尚

## 「寿々木君のていねいな生活」ふじもとゆうき

■ 寿々木君がとにかく、やさしくてかわいい。「丁寧な生活」とは程遠い日常を送っているけれど、寿々木君の日々の暮らしぶりを見ているだけで、ほっとする。あわただしい毎日を過ごしてる友達にこそ、プレゼントしたい一冊

介護ライター / 島影真奈美

## 「スベる天使」桜箱

■ お笑いに青春を懸ける高校生コンビの奮闘記で、笑っていたはずが急に感動して泣ける最高のエンタメ。美人優等生だけのお笑いセンスが壊滅的なヒロインと冴えない相方の男子が漫才に挑む姿はコミカルでひたむきで、思わず涙してしまう展開もありました。大舞台でスベっても腐らず弱さに向き合う二人と、次第に変わっていく周囲も含めて、登場人物全員が愛おしくなる青春ストーリーです

会社員 / 三浦佑樹

## 「スルガメテオ」田中ドリル

■ まさかバッティングセンターでホンモノのしかも高校生が投げてるなんて。久しぶりに野球漫画が面白って思えた。それぞれのキャラも良くて、応援したくなる。

元コミック担当 / 実松由夏

## 「星霜の心理士」雪平薫、八ツ波樹

■ 今や数多の「俺なんかやっちゃいました？」を楽しむだけの『転生もの』作品が世に溢れていますが、そんな中で最近では現代社会の専門的技術を活かして乱世を乗り越えていく作品も増えてきたと感じています。その中でも主人公が「心理カウンセラー（臨床心理士）」の本作はまたかなり異質なのかもしれないのではないのでしょうか。しかも傾聴の描写がかなり現実的でリアリティがあるのも面白い。この主人公がどうやって魔王討伐の要になっていくのか、これからの進展が楽しみです。

フリーランス / 金輪英恵

## 「絶対死なないステラ姫」大高稲、光永康則

■ コメディなんだよね!? いや、とにかく面白いですよ! でも、絵柄や諸々が、アレに似てるんですよ!! 画力があるから成立しているけど、あっちから出たり、こっちから出たり、人によっては生理的にダメ! って人もいるかもしれない。けど、コメディなんだけど、シュールで、サスペンスで、サイコで時にシリアス? 寄生○が大丈夫な人はぜひ読んでください!!

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

## 「全部救ってやる」常喜寝太郎

■ 動物が好き、そうじゃない人も、色んな人に読んでもらいたい知る事で優しくなる世界が少しでも広がればと思います

tetote 代表 / 力丸真

## 「ソアラと魔物の家」山地ひでのり

■ 魔物ための家を作っていくとい今までにない切り口で進むストーリーは、動きのある迫力ある描写で書かれていて、読んで無い方には読んで欲しい作品です

tetote 代表 / カ丸真

## 「そういう家の子の話」志村貴子

■ 同じ宗教を信仰する家庭で育った幼なじみが、大人になって仕事・結婚・独り立ちの節目で「家の事情」と向き合っていく。センシティブなテーマに対し、過度に煽らず淡々と、個々の沈黙と選択を描く静かな重さは、志村作品ならでは。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

## 「宙に参る」肋骨凹介

■ 違法宇宙ステーション生まれの主人公が、早逝した技術職の夫の骨を四十九日に間に合わせるために地球に向かうロードムービーという設定だけでも目を引くが、そこに、作中世界で普及している自立 AI「リンジン」を巡る暗闘に巻き込まれ……という話の骨格も、作中の寄り道エピソードも「ちょっと先のリアル」を感じさせる骨太な SF だが絵柄からそれを微塵も感じさせない話の運びなど、本当に読んで欲しい SF 作品。

住職・ライター / 蟬丸 P

## 「ダーウィンの大罪」近藤ユキオ、萩央翼

■ 進化論という重く難しいテーマにもかかわらず、読みにくさが全くなく、むしろ面白さが加速するタイプの作品。登場人物みんなが自分なりの正義を信じていて、それがぶつかる度にわくわくとヒリヒリを感じられる。かなり中毒性がある。

スターダストプロモーション・タレント / 秋本帆華

## 「大市民 がん闘病記」柳沢きみお

■ 私も還暦近くなり身体の衰え、病の不安が付きまとう。病気に無縁そうだった主人公山形の姿に共感し一票。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

## 「大正學生愛妻家」粥川すず

■ この一年で一番きゅんきゅんした漫画です！とにかく二人がかわいくて、読んでいて癒されるというか浄化されます！ニヤニヤしながら読んじゃうので外では読めません。

声優 / 綾瀬有

## 「大乱 関ヶ原」宮下英樹

■ 関ヶ原合戦の結果を知っていても、その過程の人間ドラマや行き違い・偶然・思い違いが経糸横糸となってドラマが作られていったことを、非常に丁寧に、等身大に、描いた作品です。大義よりも勝ち馬、決戦は大坂城、和睦の相手は誰か、等々、事後の勝者による歴史ではない、同時代の目線の追体験ができます。深いです。

弁護士 / 三葛敦志

## 「たたかいのきろく」小田扉

■ 小田扉が「たたかい」がテーマの作品！？と思いつつ手に取るも、相変わらず小田扉ワールド全開のシュールな作品でサイコーです。クスッと笑えて心が暖くなる「たたかいのきろく」がたくさん詰まっていました。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

## 「DUCK TAIL - 吉田聡 大人のロックンロール短編集 -」吉田聡

■ 大人になってから読むと、かなりキュンとします。吉田さんの世界に、まみれました。吉田さんの書く女性って、可愛いんですね。格好良い女性も多いか。いつまでも心に残ります。憧れます。

書店員 / 桶谷佳代

## 「たまのこしいれーアシガール EDOー」森本梢子

■『アシガール』の続編。前作を読んでいなくてももちろん楽しめる作品ですが、主人公の唯（前作）月（今作）の対比も楽しいところ。画面は見やすく森本先生のギャグやくすぐりは健在。大好きです。時間の要素を無理なくお互いを隔てる壁であり、味方であるお話の巧さ。「好き」って言葉一つ言えない不器用さ。一味違った恋愛模様で1冊1冊あつという間に読めてしまいます。

図案家 / 橋本寛子

## 「多聞さんのおかしなともだち」トイ・ヨウ

■この自問自答を懐かしいと感じるか、リアルに感じるか。一言でいうと「うーん、思い出したくない」。少し読み進めてははーっと思いでてしまい宙を見上げてしまう。それでもページを進めることを私は止めることができなかった。究極の私物語を読む価値はもちろんある。

October Beast デザイナー / 北山 友之

## 「だれでも抱けるキミが好き」武田スーパー

■お色気が強いが、アガワさんの魅力がたまらない。主人公ゴトウの暴走っぷりも面白い。

株式会社 radiko / 澤田真吾

## 「タワーダンジョン」式瓶勉

■段々と明かされていくダンジョンの謎、魅力的なキャラクターたちの登場に毎話ワクワクが止まりません。主人公の出自が気になって気になって仕方がなく、いちばん続きが待ち遠しい作品です。

会社員 / 竹本慧

## 「CHANGE THE WORLD」田川とまた

■演劇という題材を漫画にするのは難しいジャンルだと思う。でもこのマンガはタイトル通り、読むと世界が変わる瞬間を目に出来る。引き込まれます。演劇に情熱と青春をかけた主人公たち。演劇に興味がない、関心がない、だから読まない……。はとってももったいない！ぜひ触れて感じてほしい。CHANGE THE WORLDを。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

## 「ちくわ戦記～おれのクワイイで地球侵略～」ブブ

■宇宙人の侵略マンガ。怖いことはなく、ちょっと間抜けで可愛い。

カメラマン / 平沼久奈

## 「チハヤリスタート！」たけうちホロウ

■もし、今までの人生のどこかで。一芸特化で生きてきて、それが通用しなかった虚しさを持つ人。全盛期の自分の輝きを、発揮できなかったもどかしさを抱えている人。今となっては叶うことのない想いが、心の中の何処かに引っかかって燻っている。そんな方に是非おすすめしたい作品。どこからでも人生はやり直せるのだと、リスタートをきることはできるのだと。そんなことを思わせてくれた。きっと手に取った誰かの、スターティングブロックになってくれる作品。

会社員 / 杉 佳尚

■青春の全てを捧げてきた陸上のインターハイがコロナ禍により無くなってしまったことで、どうしようもなく青春を奪われてしまった、かつての女子陸上部たちのお話です。理不尽に夢を壊されたところから立ち直れずに7年ニートをやっていた主人公のチハヤが、もう別の人生を歩み始めているかつての仲間たちと再会してもう一度走り出す物語…なのですが、登場人物ほぼ全員、お互いにシンプルではない感情を持っているせいで何事もスルスルと進みません。こじれてしまった感情や、大人になってしまったがゆえに調整も整理も付きづらい現実を乗り越えて、かつての情熱を取り戻していく様がアツク描かれています。セリフ回しやキャラクターのお芝居が心を揺さぶる、大人にブツ刺さるポストコロナ式スポコン漫画です。

株式会社ムービック / 岡部真矢

- コロナ禍で青春のピークを奪われてしまった。そんな失われた時間に、ひょんなことからもう一度チャレンジすることになっていきます。根性論に寄らず、心の奥に静かに触れてくる青春群像劇です。笑えて、寄り添ってくれて、いつの間にか背中を押してもらえます。気持ちを前に進めるてくれるマンガなので今ちょっと立ち止まっていた自分にジワジワと効きました。

会社員 / 伊藤千恵

## 「血翼の獵人」国本龍使

- 天使を狩る執行人と、その仇敵である天使の少女がバディを組んで闘うダークファンタジー。話の展開がテンポよくアクションもカッコいいです。バディが最高です。

主婦 / 紺野泉

## 「珍獣のお医者さん」二宮香乃

- メジャーなペット（犬猫）以外の動物病院という題材のチョイスが絶妙。また読んでいても下調べや取材も手厚そうで好感が持てます。ぜひ多くの人に読んでほしい作品です。

サブカル専門ライター / 河村鳴絨

## 「つくもごみ」panpanya

- panpanya さんの漫画は、「漫画としての漫画」とでも言うのだろうか。この表現を最も活かす方法が漫画だから、漫画にしているのだなあ、と思わされる。昨今、世に溢れる「映画っぽい漫画」「ドラマっぽい漫画」「アニメっぽい漫画」などなどは、一線を画していると感じる。まったく〇〇っぽくない…、強いて言えば、「panpanya さんっぽい」のみ。軽やかで新しい視点に満ちていて、濃厚で純度の高い作品群。その面白さはもちろんのこと、毎度毎度「モノ」としての特別さや面白さまでもが詰め込まれている。カバーも帯もコピーも素晴らしいのだが、ぜひ一度カバーを外して、内側に触れてみてほしい。その素材感、手触り。それをやろうと思いつき、やり切ってくれる作家としての姿に感動すら覚える。それらをきっちり毎年1作品、制作されていることにも、ただただ驚かされるし、ファンとしては感謝以外の何ものでもない。今回の作品「つくもごみ」も、是非皆さんに読んでみてほしいです。相変わらずめっちゃくちゃ面白いですよ～。僕にとって panpanya 作品を読むことは、感覚を散歩させることと同じだと思える。自分だけでは発見できなかったであろう「世界をより面白く見る、感じる方法」を、惜しげもなく教えてくれる漫画家 panpanya さんを、僕は尊敬し続けているし、これからも追いついていきたいです。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- コンスタントに作品を発表する panpanya さんですが、どれもいい！

作家 / 海猫沢めろん

## 「土田世紀、描く語りき」北村永吾

- 汗臭く泥臭く、感情が剥き出しになった人間を描く土田世紀作品が大好きでした。唯一無二。早逝が惜しまれる漫画家でしたが、当時アシスタントをしていた北村さんが日記を基に明かしてくれた奇才の素顔。とって汗臭く泥臭い人間味あふれる「土田世紀」に会うことができ感謝したいです。

書店勤務 / 野口忠義

## 「つまさきの紫陽花」aioiuo

- タイトルの意味を理解して「なるほど」となるのは特段珍しくもないのですが、この作品に関してはそう表現するのが素敵なのは勿論、お話のキーになる部分でもあるので、とても良いタイトルだなーと。日々の生活を丁寧に描く作品はジャンルを問わず良作が多く、この作品もまた然り。デビュー作ということで、フレッシュ感は当然ありつつ、キラキラなときめきや忘れていた懐かしさもあって、四季折々でふとページを開きたくなる、和菓子みたいな漫画です。

中央書店 / 井出麻悠美

## 「罪と罰のスピカ」瀬尾知汐、井龍一

- 『罪と罰のスピカ』は、「悪を裁く」物語の気持ちよさを確かに持ちながら、その快感に寄りかかりすぎないのが魅

力です。罰が下った瞬間のカタルシスはあるのに、同時にその手つきの危うさが残る。だから読者は、カタルシスを味わいながら同時に怖くなる。この二重感情こそが、ただの断罪ものに終わらない推進力です。物語が進むほど、単発の出来事の是非ではなく、「裁く側の正しさはどこまで許されるのか」「誰が救われて、誰が置き去りになるのか」という問いが太くなっていきます。事件は一つひとつ形を変え、軽い違和感から、人の人生を崩す決定的な局面へとスケールしていく。その積み重ねが、主人公スピカを単純なヒーローにも単純な怪物にもさせません。繰り返されるエピソードの積み重ねによって、スピカという存在が「正義」でも「悪」でも言い切れない輪郭を獲得していく。読み終えたあとに残るのは、答えではなく、自分の中の“正しさ”が少し揺れる感覚。その揺れこそが、この作品の強度だと思います。

会社員 / 佐藤優

## 「冷たくて柔らか」ウオズミアミ

■ あらすじをここで書くのも野暮なので、帯の惹句を引用する。「手を伸ばせば届くのに——」「この恋は後ろめたくて苦しい」「同性の友達以上、恋人未満」……。30代女子2人の恋心を繊細に、細密に、ゆっくり、じっくりと描いてきた物語は、昨年末発売の6巻で一気に前進。人が人を大切に思うときの純粋で崇高な気持ちを、臆せず、日和らず、正面から描き切ろうという作者の「志の高さ」がよく伝わる展開となっている。2人の行動は社会的にはいまだ簡単に受け入れられるものではないとはいえ、関係そのものは多様性という言葉で説明することもできるくらいには世の中も進化してきており、理解者も多い、という作劇上の設定は鋭く、読者の多くが「自分ごと」とまではいかないものの、それに近いリアリティをもって読み進めることができるストーリーになっていると思う。キャラクター造形は複層的、多層的で、強い思いをぶつける側とそれを受け入れる側の立場がいつの間にか入れ替わっていたり、ドラマ的な盛り上がりがあって飽きさせない。恋愛ものが好きな方にも、それほどでもない方にも、美しい絵柄も相まって、未読の方はぜひに、と自信を持ってお薦めできる当代一流の恋愛マンガです。今後はなかなかビターな展開も予想されるけれど、それでも夏に出るという7巻を、いまからドキドキしつつ楽しみに待ちたい。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

## 「つりまん」いましろたかし

■ 2025年に発売されたとなると、「完本化け猫あんずちゃん」でも良いけど、ただおじさんが釣りしてるだけなのに、釣りになんの興味もない自分が楽しく読めて、新刊が出たこと自体を話題にしてひと笑い起こる、いましろ作品の良いところが出ていたのはこちらかな、と。相変わらず何の説明も無く出てくる普通に喋るクマとか、オチがあるようで無い話とか、毒にも薬にもならないゆるっと加減が最高でございました。

中央書店 / 井出麻悠美

## 「デイグイット」ヨシダ。

■ 登場人物の個性が光る。久しぶりに熱いスポーツ漫画に出会えた

会社員 / 齋藤隼

■ 青年誌ならではの熱さと重さとが込められた、今ノッてきているバレーボールの作品。受け継いだエリートの血によって被る挫折を、決して別のフィールドではなく、見返してやりたい父親の居る「バレーボール」の世界で、己の見定めた武器で戦いを決意する導入が熱い。彼の想いにぶつかったり呼応したりしながら高め合っていくのだろう、個性的な仲間たちや、ライバルたちとの出会いも動き出して、この先の展開が非常に楽しみな1作。

会社員 / 伊東敬祐

■ バレーボールは『繋ぐ』スポーツだって音駒が教えてくれたので、どんなに打ち込まれても拾ってボールをあげる『リベロ』が一番かっこいいポジションだと思う。元日本代表のエースアタッカーである父親に、子どもの頃から自分も同じようになるように育てられた主人公。疑問を持ちながらも練習に励むがなかなか揮わない。そんな中、あることが起こり父親と完全に決別する。父親への反発心を原動力に、自分が本当にやりたいこと、やるべきことは何なのか考え、リベロへとポジション替えをし、母親の実家のある県で高校へ進学。そこで『全国制覇』を目指し、仲間たちと切磋琢磨しながら成長していく。まだまだ序盤だけど、『友情』『努力』『勝利』が好きな方ぜひ読んで

欲しい。

主婦 / 赤坂真実

- バレー漫画でありながらスパイクなどの派手さではなく、レシーブという縁の下の技術に光を当てている点が唯一無二のバレー漫画だと感嘆した。主人公をリベロにすることで読者は俯瞰してコート内を見ることができる。私の知っているバレー漫画とは全く別物で、これからどういう展開になるのかともわくわくする。また、人間ドラマとしての深さも続きが気になるポイントの一つだ。

スターダストプロモーション・タレント / 秋本帆華

## 「鉄血キュッヒェ」中島三千恒

- ミリタリー長篇『軍靴のバルツァー』の作者による異色グルメ漫画。丁寧な取材と描写を基調として、軽いユーモアを交えつつ、若き料理人と変わり者の中佐がドイツ軍の食糧難に対処するプロットが秀逸。全二巻で綺麗にまとめたコンパクトさも良い。

書評家・ライター / 福井健太

## 「10DANCE」井上佐藤

- 実写をみて知った気にならず、ぜひ原作を読んでほしい。最新の8巻が良すぎた。一気に読みするなら今。今年が最後のエントリーチャンスなので、推します!!!

主婦 / 赤坂真実

## 「天幕のジャードゥーガル」トマトスープ

- モンゴル帝国の侵略により全てを失ったイランの少女が知略を武器に生き抜いていく。モンゴル帝国がどのように成り立っていたのか、内側からわかるのが興味深い。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- 実在の人物をモチーフにしたフィクション。知と権力の交錯と、アンバランスに感じる絵柄が心地よい。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

## 「灯火のオテル」川口勇貴

- ジャンプでガチ北欧ファンタジーが読める驚き！唯一無二のキャラデザインと超一級のバトルアクションがあまりに熱い、いま一番長く世界観を味わっていたい少年マンガです。

株式会社ムービック / 岡部真矢

## 「東京最低最悪最高！」鳥トマト

- 『東京最低最悪最高』が突きつけてくるのは、夢の街のきらびやかさではなく、そこで暮らす人間の感情の湿度です。登場人物たちは、どこかで「自分だけは大丈夫」と思いながら、気づけば誰かと比べて傷つき、誰かを見下して自分を保とうとする。そんな人間の弱さを、逃げ場のない距離で突きつけてきます。面白いのは、誰かを分かりやすい悪役に片付けないところ。読みながら「この人は最低だ」と思った次の瞬間、同じ感情の芽が自分の中にもあることに気づかされる。だから痛いのに、目が離せない。うまい解決や綺麗な救いがないぶん、読後に残るのは“現実のざらつき”です。この漫画の魅力は、読後にスカッとするのではなく、薄く痛い“自己点検”が残るところです。東京の空気を借りて、私たちの中にある小さな卑屈さや見栄を、見ないふりできない形で照らしてくる。だからこそ、苦いのに忘れられない一作として推薦します。

会社員 / 佐藤優

- いやー、東京で生きていくのしんどすぎませんか。人相が悪い人の描き方がだいぶ味わい深いです。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 「仕事」とはなんでしょう？そのために、子供や生活、楽しい趣味などを、犠牲にしてしまうときに理由に最も使われる言葉。なんなら、「仕事」を理由に、ほとんど倫理に近いような大切なことまで、害してしまうことがある私たち社会人。そのとき、私たちはちょっと悪い顔をしているかもしれません。でも仕事は大切！と自然に

思ってしまう私たち。でもストレスを感じる程の意味はあるのだろうか、本来、目指していたことってなんだろう…！ 東京の出版社で働くウラオモテだらけのリアリティ抜群の男女の気持ちの変化を、痛みを感じるぐらいのヒリヒリ度合いで活写したこのオムニバス作品が、こちら。烏トマトさんが書く、憎みきれない悪い人たちが、表情も言動ももう最高！ こんなに悪い人たちだらけなのに、最後の最後に、仕事する理由をあきらかにしてくれます。そう、仕事してれば、生活が成り立ってれば、なんだかんだで最後は自分で決められる。オトナって自由！ 9割のストレスの向こうに、なにものにも代えがたい、自由がある！ と思える作品。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

## 「東京ステッキガール」伊田チヨ子

■「食いたい」「見たい」「買いたい」——お客様の要望を叶えるため、同伴して“ステッキ”のように導く「ステッキガール」を題材にした、昭和初期の銀座が舞台の作品。主人公のみちは、ある事情で女中を辞めて断髪し、ステッキガールとして働きながら、さまざまな人々と出会って成長していく。人と人が織りなす物語は決して甘いだけではないが、100年前の銀座のキラキラ感やさまざまな小ネタ、ドタバタコメディ要素が随所に散りばめられ、全体は軽やかな読み味に仕上がっている。当時の食や建物の描写はもちろん、モダンガールに向けられていたであろう視線、時代の空気、習慣などのディテールがともしっかりしていて、作者のこだわりが強く伝わってくる。今後も楽しみな作品。

弁護士 / 田邊幸太郎

## 「峠鬼」鶴淵けんじ

■ 毎年のように推薦していますが、もう8巻なので今年がよいよ最後。古代史ものとして、SFファンタジーとして、大冒険少年マンガとして、大変な傑作だと思うのですが、このまま見逃されていいのでしょうか???

元新聞記者 / 石田汗太

## 「DOGA」武田登竜門

■ 貴族のヨーテと怪力のドガが、2人で目的地を目指す物語。絵の世界観やストーリーが惹き込んでくれます。そろそろ、生き返る謎も見えてきて、この後の巻も早く読みたい。

デザイナー / 平沼寛史

■ 洋画のような骨太さを作品全体から感じます。どこかに自由にどこか知らないところに旅に出たいという社会人ならではのたまに感じる束縛からの解放を、この作品を読んでいるときは感じることができる、不思議な感覚があります。デコボココンビの旅の行く末が楽しみです！

クラスター株式会社広報 / 西尾美里

## 「ドカ食いダイスキ！もちづきさん」まるよのかもめ

■ 飯テロ作品。食欲増進しすぎて逆に胃もたれ（汗）。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

■ とにかく食べる！食べる！食べまくる！！食欲によって支配がされているユートピアでもありディストピアがここにはある。脳からよだれを出しているもちづきさんをただひたすら「ひええ」とか「うはぁあ」とか言いながら見守る圧倒的新感覚。あまりの不健康さに解説同人誌が出たり某超大手コンビニが複数回コラボしたりする、知人ぞ知る、そして人に知られまくって欲しいマンガ大賞らしいマンガ。

会社員 / 布施直人

■ タイトル通り、21歳OLもちづきさんがドカ食いする漫画です。まんまです。が、ドカ食いが半端ない。1日あたり5000kcalはざら。そして「至る」、！食べることは幸せであることがこれでもか！と表現されています。おなかすきます。

弁護士 / 三葛敦志

## 「どくだみの花咲くころ」城戸志保

- 多様性などの難しいテーマを感じつつもキャラクターの魅力と豊かな表情、独特な空気感、圧倒的な話の面白さが見事にマッチした作品だと思います。

会社員 / 竹本慧

- 最初は重い暗い話しかと思い読み始めたのですが、少し方向性が違うぞ？面白い！笑いの中に人との付き合い方について考えさせられる部分もあり、好きな作品

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

## 「都市伝説解体センター Parallel File」いしかわえみ

- この漫画は、昨年ゲーム界隈でスマッシュヒットした怪異を解き明かすミステリーアドベンチャーゲーム『都市伝説解体センター』のコミカライズ版です。私はこのドット絵のミステリーゲームが大好きで、漫画化がとても嬉しかったです！今回の漫画化はゲームをしたことが無い方にも分かりやすいように、表現等工夫されていて読みやすくなっていると思います。parallelとあるようにゲームとの違いを見るのも楽しみです。センター長がメロくてカッコいい！あざみーやジャスミンが見れて嬉しい！怪異は怖い！これを少女向け月刊誌であるりぼんに連載中とは！大丈夫？大丈夫？最終回、大丈夫？これからも、いしかわえみ先生の紡ぐ都市伝説解体センターの世界を楽しみにしております！

主婦 / 岸本しのぶ

## 「図書室のキハラさん」丸山薫

- 元は雑誌の帯の裏に描かれていた特殊な漫画です。キハラさんはとてもキュートで可愛いのですが、ナカバヤシさんも好きです。そう、図書室にキハラとナカバヤシでピンときた方は、ぜひ読んでみてください。架空の研究所にある図書室を舞台にしたファンタジーなのですが、図書室、図書館という場所に対する敬愛に溢れています。装丁や造本も凝りに凝っていて最高です。持っているだけでうれしくなります。

主婦 / 堀江千秋

## 「ドラマクイン」市川苦楽

- 宇宙人への復讐・・・重くなりがちな内容ですが、勢いがある展開も早いのでライトにサクサク読めます。宇宙人の姿がもう少し人間に寄っていたらアウトになりそうな、絶妙なバランスでした。

教師 / 持丸宏司

## 「ドリーム☆ジャンボ☆ガール」ヒロユキ

- 誰もが一度は妄想したであろう出来事を、超リアルにコミカルにマンガにしてくれたヒロユキ先生ありがとうございます！！めちゃくちゃ楽しくてハッピーになります。ひたすら脳内シャングリラで進むのかと思いきや「お金を手にした後の行動にこそ人の本質が現れる」とか「不幸にならないためのお金の使い道」とか、名言がバンバン出てくるのも好き。お金を使うのも才能なんですね…。大金を右から左に有意義に使える力が【権力】…ッアホの娘を可愛く描くことについては無敵なのは…？価値観の多様性についても学べる多幸感あふれるマンガです。

会社員 / 布施直人

## 「ナイトメアバスターズ」赤瀬由里子

- デビューから変わらぬアナログフルカラースタイルが愛おしい、推し作家さんの作品、待ってました！おじさん達と少女の冒険譚。前回とはまた違った魅力がありつつも、求めていた読後感でやっぱり好きな作家さんです。

ヘリックス・クリエイティブ株式会社 WEBディレクター / デザイナー / 河本 智芳

- 上中下巻で全巻フルアナログ作画 & フルカラー！物語は、眠り続けてしまう昏睡病に罹った患者を夢の中から助け出すというもの。夢の中ではイメージを具現化する力、夢現力でいろいろなことができます。月を引き寄せたり大きな食パンを出したり空を飛んだり…フルカラーで描かれるそんな魔法は輝いて見えてわくわくしてなんて夢みたいなんだろう！ん？いや、夢なんだこれ。現実の世界は灰色で暗く、そんな辛い現実から逃げて夢の中で生きる

れるならそれもいいなと思ってしまうくらい、夢の世界はカラフルな優しい色で素敵に見える。それでも主人公達が見せてくれる現実には鮮やかでハッとさせられます。そして赤瀬先生の漫画への情熱や好きという気持ちが詰まっています。漫画を開くと溢れてくる。物語やキャラクター達の前向きな力もちろんなあるけれど、そんな先生の想いがあるから、読み終えた時、漫画の外の私の世界も明るく見えた気がしました。

声優 / 富岡美沙子

- 前作「サザンと彗星の少女」から7年？ずーーーーーーーーーーーーーーーーと待ってたので、やっとコミックスが出たことにまず大歓喜でした。何処か懐かしい絵柄のフルカラー、しかもフルアナログという、本を開いたその瞬間にもう見て分かる膨大な熱量が、漫画を読むという楽しさを全力で感じさせてくれます。ひたすら待った甲斐あって、上下巻連続刊行で一気に出してくれたので、一気読み出来たのも良かったです！

中央書店 / 井出麻悠美

## 「なにも理解らない」7Liquid

- タイトルどおり、本当になにもわからない！笑主人公が目覚めると、言葉の通じない、でもかわいい異世界の女の子とエンカウント。しかし相手の言葉もわからなければ、記憶喪失して自分のこともわからない。相手の表情も動作も持ち物も、なにを意味してるのかわからないところから、手探りで一つずつ理解していくのですが、実際異世界転生（かどうかもわからないけど笑）したら実際きつこうなるよね、って納得しちゃいます。設定がうまい！主人公が少しずつ世界を紐解いてわかっていくその遅さ（笑）が逆にリアル。1巻まるまる読んでもまだ言語コミュニケーションがほぼ取れてないのに、生きてるのすごいな。主人公も明るくたくましくいいヤツ。世界についてわからなかったことがわかるとまた別の謎が増えていき…などストーリー展開も楽しみです。今までなかった世界観の作品。このわからなさが楽しい！！

公務員 / 宇田川結衣子

## 「名前のない病氣」宮川サトシ

- この漫画を読んだ時、「母を亡くした時、僕は遺骨を食べたいと思った。」や宮川先生への見方が変わりそうになり、自分の感覚がこんなに簡単に揺らぐのかと愕然としました。東村アキコ先生が「かくかくしかじか」を描くまでに長い年月を要したように、作者が語らなかった、いないものとしてきた事を物語としてアウトプットするまでには、「人生や家族は素晴らしいものだ」というエッセイ漫画を描く必要があったのか？と思い、ただ読み続ける、受け取り続ける他ない自分は何とも言えない虚無感？の様なものや、この漫画を面白いと思う事への罪悪感？の様な事を感じました。一区切りごとに新たな視点で展開させる手腕に描き手としての冷静さも感じ、その度ただ唸ってしまいます。それに対しこのような拙い文章しか書けない事に心苦しく思いますが、拙くても強く強く推したい、そんな作品です。もしこの漫画が救いの無い終わりを迎えても、この作品を読んでこれからの人生を生きたいと思いました。

会社員 / ターシ

## 「ニセモノの錬金術師」うめ丸、杉浦次郎

- 過激な表現も多いダークファンタジーだが、ストーリーと世界観と倫理性とあわせて納得感がある。設定の奥行きも感じさせて GOOD。

作家 / 海猫沢めろん

## 「日々草」戸田誠二

- 待ちに待った戸田誠二さんの新刊！2024年に電子書籍だけで刊行されていた作品が紙で発売になりました！嬉しい！すべてアナログ作画の戸田さんのあたたかい絵は、やはり紙に印刷されると魅力がさらに増します。78本の短編ひとつひとつに込められた願いと想い。どんな人間にもそれぞれ物語があり、「ふがいない自分もどこかで主人公になれるのかな？」という希望をもたらしてくれる作品です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 戸田さんの本を、紙で読みたいなあ、と思っていたら、出たので大喜びでした。毎日そっと咲いてくれる花のような

存在が、あなたにもありますようにと言う言葉が、本当にぴったりな本です。心がほかほかします。

書店員 / 桶谷佳代

## 「2年1組うちのクラスの女子がヤバイ」 衿沢世衣子

- 思春期女子に発現する「無用力」を全員が持つクラスのオムニバスストーリー。個性的で可愛くて面白くてヤバイ。無茶苦茶面白い。

マンガ読み / マサトク

## 「猫が4匹いる暮らし」 カワサキカオリ

- 猫を4匹飼っている著者さんのエッセイ。猫を飼う事の楽しさはもちろん大変なところもしっかり描いています。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

## 「猫と星屑」 猫オルガン

- 愛らしい絵で紡がれる短い物語はSFもあればホラーもありちょっぴりの青春もあって、それらがいずれもふわっとした驚きと心にジンとくる物語となっているところが良い。「#21 宇宙一怖い本」で優れた軍略家の姫が宇宙での争いを終わらせたのは1冊の本を読んだから。そこには何が描かれていたのか。読んでその残酷さが分かる。「#39 長いお別れ」で手を振るだけのロボットの少女が作られた理由もm知れば人が何を心に求めているかを知れる。アイデアがあり叙情があって意外性もある珠玉のSFコミック短篇集だ。

書評家/ライター / タニグチリウイチ

## 「ねずみの初恋」 大瀬戸陸

- Xの広告で「この漫画の本質はここじゃない、この切り取りやめてほしい」というリップがたくさんついていたのが印象的だった作品です。確かに広告を見たときは「よくある性的マンガかな」と思っていました。しかし読んでみたら全然違う、まったく新しい「純愛物語」。この痛々しさと純愛は、90年代の青春映画や、銀杏BOYSの音楽などを思わせる心のざわめきを感じさせるのに、まったくその手法が違う独特さです。グロ・恐怖・純愛という組み合わせは、ポテト・油・塩分のマックのポテトみたいな脳内麻薬を放出させる秘密の調合なのかもしれません。

クラスター株式会社広報 / 西尾美里

## 「パーフェクトグリッター」をのひなお

- ものすごく「リアル感がある」のが最初の印象です。女子の気持ちの生々しさ、SNSが居場所の主人公モモと、インスタで自撮りをあげるカリスマイチカが、本当に渋谷にいそうなリアル感があり、私自身もXアカウントで知り合ったり見かける女性にもかなり近く、一気にひきこまれました。1巻である事件が起こったときにXで繰り広げられるリップもものすごくリアルでびっくりしました。主人公の成長と変化と同時に、物語自体にサスペンス性があって、久しぶりに一気に読み、一気に買ってしまった。はやく続きが読みたいです。

クラスター株式会社広報 / 西尾美里

## 「バックホームブルース」 長尾謙一郎

- いわゆる“王道”とは毛色の違う野球漫画ですが、アツくてまっすぐで、とにかく心を掴まれる作品です。主人公・自称ロンリーブルースこと青空柑二郎は、常識外れで破天荒。第一印象はかなり最悪寄りだと思います。柑二郎に振り回され、呆れ、しかし次第に惹かれていく。読者の心の動きと歩調を合わせるように、作中のキャラクターたちもまた、彼との心の距離を少しずつ縮めていきます。こんなメチャクチャなおっさんを主人公に据え、ここまで魅力的な物語を描き続けている長尾先生の手腕には、ただただ脱帽するばかりです。この作品を語るなら、やはりこの一言に尽きます。「いいな～柑二郎は」。

接遇スペシャリスト/ライター / 田邊加奈

## 「花四段といっしょ」 増村十七

- ずっと好きなので推します。花四段を始めとする個性的な棋士たちによる勝負の様子も面白いのですが、将棋を通

して描かれるそれぞれの人生に引き込まれます。登場人物全員がメインキャラクターのような気がしていて、みんな愛しいです。最初は鼻につく奴かなあと思った棗八段も、気づけば応援したくなっている、いいキャラクターでした。ホーちゃんとクロエちゃんの今後も気になるところです。

主婦 / 堀江千秋

## 「はにま通信」大山海

■ 同作者さんの「奈良へ」は、そこにいる少しずつズレた人々を「奈良そのもの」で包んだ怪作であり快作だったが、今作は「古墳で青春を包んでいる」！そのギャップのバランスが作中の空気感を明確につくりあげていて、たまらなく心地いいです。なるほど、古墳で青春を包むとこうなるんだなあ、と感動しました。心が静かに騒ぎ出すけれど、それがなんだか気持ちいい。ぜひ読んで、体感してみてください。そういえば近所にも、あると知っていながら行けてなかった古墳があったので、今度行ってみようと思いました。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

## 「パラショッパーズ」福地翼

■ 能力バトルという王道の枠組みの中で、能力を売買できるという仕組みが新鮮で、弱い能力を工夫して使いこなす戦い方が面白いです。さらに、主人公が能力や他人の選択や在り方を肯定してくれる存在なので、読んでいて素直に気持ちよさがあります。

デザイナー／イラストレーター / 鷹嘴終子

■ 異能力バトルマンガ。いわゆるチート的な異能力ではなく、「藁を1本だけ動かせる能力」のように何の役にも立たないようにも思える能力をバトルにおいて、どう役立たせるか、という頭脳戦や戦略性が「柔よく剛を制す」「小よく大を制す」にも近い痛快な心地よさがある。ある意味、作者と読者の間にも「その手があったか」的な知略バトルが展開されているかのよう。

ライター／編集者 / 松浦達也

## 「パラレルリープ・シンドローム」タカハシノブユキ

■ もし、別の世界線に行って願いが叶う可能性があるとしたら。恐らく自分も一縷の望みをかけてその世界線を覗きにいくと思う。でも、今この世界線に生きている自分。その自分をちゃんとしっかり幸せにしてやりたい、そんなことを思いながら読み進めていました。世界観も作風もとっても素敵なこの作品が、まだ読んでいない誰かに届いてほしい。ふとそんなことを思う、大好きな作品です。

会社員 / 杉 佳尚

## 「バルバロ！」岩浪れんじ

■ 風俗店を舞台に、嬢やスタッフたちの仕事・人生・したたかさを群像劇で描く。過剰なドラマ化はせずあくまでも日常を描きながら、キャラクターひとりひとりのエッジが立っていて、ぐいぐいと惹きつけられます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

■ 風俗店を舞台に繰り広げられる話なんですけどとにかくキャラクター達の生き様が凄すぎます。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

## 「盤上のオリオン」新川直司

■ 才能豊かだけれど挫折を知る少年の復活譚であり、同じく才能にあふれながらどこか不器用な少女の成長譚。これは旧作の『四月は君の嘘』にもモチーフが重なるが、前作のような時折ダークサイドに墮ちるシーンはなく、安心して楽しく読むことができる。将棋が舞台の文系スポ根。

ライター／編集者 / 松浦達也

## 「半分姉弟」藤見よいこ

■ 2025年の個人的No.1作品です！日本で暮らすミックスルーツの人々の日常を、当事者である著者が緻密な取材

に基づき描いた傑作！まず驚くのが、重いテーマを扱いながらも一級のエンターテインメントとして成立している点です。とにかくマンガが上手く、テンポの良い明るく愉快的な会話劇に、思わず笑わされ、引き込まれてしまいます。作中では、無自覚な偏見で相手を傷つける「マイクロアグレッション」や、日本社会から透明化された「ハーフ」の葛藤が、現実の社会と地続きの物語として展開されます。しかし、そういった問題提起だけで終わらず、たとえ一生分かり合えなくても、対話を諦めず、一瞬でも心が交差する瞬間の「希望」を鮮やかに描き出してくれています。自分も何らかのマイノリティかもしれないと孤独を感じる時、本作は側に寄り添う光となるはず！分断を越え、手を繋ごうとする作り手の祈りに満ちた本作を、ぜひ今こそ読んでいただきたいです。

芸人 / 吉川きच्छよむ

- 様々な障害やマイノリティーや生きづらさなどに焦点を当て、解説や啓蒙ではなく、きちんとドラマにして面白いエンタメになっている、という「しなやかな社会派」とでも呼ぶべき最近のマンガ界のトレンドを成す一連の作品の中にあって、その旗手と言うべき完成度の高い快作。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 多様性と世間ではよくうたわれているが、文化レベルで自分のアイデンティティが定まらないというのは、とても苦しいこと。もし自分がハーフだったら ...? と、とても考えさせられる作品。

会社員 / 平沼良章

- 読んでいろいろと考えさせられました。私の住んでる地域は外国人が多かったので自然と外国人の子と接する機会が多かったし、今住んでる地域にももっといろいろな国の方が多いたのですが、そこにいる方々のこのような考えがあることには気づきませんでした。日本に住んでる私にとっては感じることがない思いを知る事ができました。

自営業 / 玉澤綾子

- 藤見先生は穏やかな作風が特徴だと思っていたので、web で連載開始されたとき「パワーが強い！」とビックリ！表紙と1話だけでも訴えたいことが明確に伝わってきた。インタビューを読んで「なるほど」と思う部分も。重いテーマを扱いながらも、藤見先生ならではの優しい視点と丁寧な描写のおかげで、自然と読み進められる。多くの人に届いてほしいと感じる作品だった。

営業 / 佐々木つむぎ

## 「BFF」小花オト

- ギャグが尖りすぎて笑いが止まらない作品です。小花オト先生は悲しきモンスター達を生み出す天才です。前作のキャラもちらほらと出てきてくれるのでファンにはたまりません。全人類にオススメしたいコメディ作品ですが、電車などの移動中に読むことはオススメしません。もれなく吹き出します。

会社員 / 竹本慧

## 「光が死んだ夏」モクモクれん

- 「この世に在らざる者」をどのように表現するか。二次元の平面表現であるにも関わらず、見開きの画面に引きずり込まれるような、あるいは「何か」がページから滲みだしてくるような、この作者ならではの独創的なイメージに圧倒される。

コミティア実行委員会 会長 / 中村公彦

## 「ヒジヤマさん 星の音 森のうた こうの史代短編集」こうの史代

- 団地育ちなので、「星のふる里」一篇だけでも古い記憶が様々蘇って来て、今あの場所はどうなってるだろうとか、あの時のアレはなんだっただろう？とか、普段あまり考えなくなっていたアレコレを考えたりしました。ただ、一見するとノスタルジックなだけのお話の中に、あの町を舞台にした短編や、アレを発見した科学者の立場や半生を描いた短編など、真正面から持ち出されると否応なく暗い影がよぎりそうになる題材をさらっと混ぜ込ませて、普段は「もう過ぎたこと」と、まるで無かったことのようにになっている事柄にもふんわりと触れてくる冷静さが、懐古とは違う読後感を連れてきます。漫画表現の多彩さにもさすがと言わざるを得ない1冊です。

中央書店 / 井出麻悠美

## 「ヒト科のゆいか」にことがめ

■「もう一度、前を向こう」とするすべての人に届いてほしい、再生の学園ドラマ。僕はもう、めっちゃくちゃ泣きました！舞台はヒトと亜人種が当たり前に暮らす社会。主人公の結香は、差別なく誰にでも平等に接する明るい子なのですが、その「無自覚な平等」が逆に親友を深く傷つけ、自分も絶望の底に沈んでしまいます。しかし、そこで終わらず、結香は「分かりあえない現実」を認めた上で、相手を知るために一歩踏み出します。種族ごとの特性や個人の事情を学んで、単なる同じ対応ではなく平等の一步先にある「相手に応じた優しさ」を模索する日々が、きらめく学園青春ドラマとして描かれていきます。たとえ傷つくリスクがあっても、共存を諦めず手を繋ごうとする結香の姿には、多様な他者が関わる現代社会をどう生きるか教えられたような気がしました。人間関係に悩み、眠れぬ夜を過ごしてきた人にこそ届いてほしい、いま読むべき傑作です！

芸人 / 吉川きつちよむ

## 「ひねくれ騎士とふわふわ姫様 古城暮らしと小さなうち」葵梅太郎

■やさしさで心の深呼吸ができる1作です。とにかく“ほっこり”。ゆっくりでも確かに近づいていく2人の様子に、くすぐったいドキドキが生まれます。癒されるだけでなく、ちゃんとメリハリがあって読みやすく疲れた心をそっと洗ってくれます。少しでも気になった方は、ぜひ肩の力を抜いて手に取ってみてください。

会社員 / 伊藤千恵

■多少の事件は起これど、終始穏やかな話で、読んでいてほっこりする。黒幕らしき存在はあるものの、出てくる登場人物たちは皆基本的に善い人たちばかりで、疲れた時などに読むと優しい気持ちになれる作品です。辛い状況の少年・少女時代を過ごした主人公たちが、大人になって少しずつ楽しい経験を重ねて幸せになっていくという、王道だけれどそれで良いんだよという物語です。

駿河屋梅田茶屋町店 店員 / 小磯 洋

## 「100年の経」赤井千歳

■今話題の生成AIをテーマにした作品で、表現者する側にとって生成AIは脅威なのか否か。物語を生み出し紡ぐものたちへの希望になるような作品です。絵柄と共に心に染み込んできます。

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

■目まぐるしい勢いで刷新を繰り返すAI周辺とともに目が離せなくなっていたこの物語も、2025年に刊行された2冊をもってエンディングを迎えました。ひとりのデザイナーとして、AIとの関わり方や、自分の手で創作することについて考えながら導かれて辿り着いた結末は、AIをテーマにしているということに関係なく、ひとつの物語としてとても素敵なものでした。人に薦めたいマンガは数あれど、今いちばん読んでほしいマンガがこちらです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

■AIと小説、作家と創作の哲学と愛を描いた傑作。

作家 / 海猫沢めろん

## 「氷核のメテオリア」冬堂誠

■仮説と結果を積み重ね、時には盛大に失敗もする。命を賭けながらバトル中にも思考し、組み立て、検証し続ける構図がバトルマンガの枠を軽々と飛び越えてくるようで…！読んでいて気持ち良く、楽しいです。絵の迫力と容赦のなさも相まって、気づけば一気読み。ページを閉じた瞬間には、もう「続きを読みたい」が残っています。アツくなるタイプのマンガを求めている人には、ぜひ手に取ってほしいです。

会社員 / 伊藤千恵

■スチームパンクの世界観に個性あるキャラクター。個々の能力が魅力的。カナタの検証しながらの戦い方が更によいです。少年マンガ的な、努力・友情・勝利を感じさせてくれる。

デザイナー / 平沼寛史

■王道バトル漫画と思いきや、主人公が敵のメテオリアンを倒すまでに仮定、考察し、結果から更に考察を繰り返す

ながら少しずつ場を切り抜けていくのがとても面白いです。

会社員 / 竹本慧

## 「ファヴェーラの漫画家」樽路実、萩本創八

■ どうしても似通ったリストの使い回しになってしまい、賞の独自性を出すことがだんだん難しくなってきた昨今、まだネット等であまり注目されていない（と思われる）本作を推す。30歳になってもプロマンガ家になれない竹井は、夢を諦めるつもりでブラジル・サンパウロを旅する。迷い込んだファヴェーラ（スラム街）で出会った少年ジョアンは、極貧の底で「日本のマンガカ」になることを夢見ていた。原石のようなジョアンの才能と情熱に打たれた竹井は、彼にマンガを教え始めるが、ギャング抗争が日常であるフェヴェーラの厳しい現実が、二人の前に立ちちはだかる……。昨年5月に出た第1巻ではまだどうかと思ったが、10月に出た第2巻で「推せる」と思った。「メダリスト」に師弟関係の形が似ていると言われればその通りで、今後の課題になりそうだが、決してネタの新奇さだけじゃない、くそ真面目な良作です。

元新聞記者 / 石田汗太

## 「VTuber 草村しげみ～遠くに行ってしまった気がした推しが全然遠くに行ってくれない話～」さかめがね

■ 基本的にVTuberの配信を観ている体の漫画ですが、ひとつひとつのコメントまで楽しく読み応えがすごいです。漫画は単行本で読むのが一番好きではあるのですが、この漫画はSNS連載で読んで、ニコニコ静画で読んで、単行本で読んでと色々な媒体で読むのが楽しい作品だなと思いました。SNS連載で読むとコメントがそのままリスナー風で楽しく、ニコニコはレイヤー状にさらにコメントが流れるのが本当に配信画面風で楽しく、単行本で一気にとめて読むのも楽しくて、色々な楽しみ方をさせてもらえた作品で、それが衝撃だったので今回挙げさせていただきます。

会社員 / 津田圭

## 「FAVORITES フェイバリッツ」mememe

■ とにかくキャラがめちゃくちゃに魅力的で、関西弁で繰り広げられる会話のテンポが心地よくて、彼らのやり取りをずっと聞いていたくなる。主役の河内くんも、松本くんもまじでいいんだけど、合間で支える立花さんや、後に現れるリキヤくんもいい味出して好き。みんな好きになる。手軽に手にとれて、幸せな時間をくれるので、未読の方はぜひ。

会社員 / 伊東敬祐

## 「平成敗残兵すみれちゃん」里見U

■ 毎話色んなすみれちゃんが見られて、いつも楽しく読んでいます。最高と思った次の回でドン引きするようなクズっぷりを見せてきたり、その寒暖差に完全にやられています。すしカルマ先生の作品は読んでこちらの感情までかき乱してくるのですが、それがまたいいです。勧めた人が軒並みハマってくれる、吸引力のある作品です。

声優 / 綾瀬有

■ 深夜、友達からおすすめだよと『平成敗残兵すみれちゃん』がLINEで送られてきて、とりあえず3話まで読み、ひでえwwwと笑いながらLINEを返し、気づいたら朝まで読んでました。その後この1年で1番人に薦めた漫画になりました。1話読んだ時に作者名を見て、八雲さんの先生なんだ！と気づいたのですが... 作風違いすぎてびっくりしました。里見先生の前作『八雲さんは餌づけがしたい。』は八雲さんが部活が大変な男子高校生にご飯を作ってあげるほのぼのあったかい綺麗なお話でしたが、『すみれちゃん』は男子高校生と年上女性という関係性は同じでも、スナックで稼いだ金を酒とタバコとパチンコで溶かす薄汚れた生活をしていて、イトコの高校生雄星が助けてくれるもののいろいろ... ほんといろいろやらかして...。なんだか、押さえ込んでいた欲望を全て解き放ったように感じました。八雲さんもすみれちゃんも大好きです。そんなすみれちゃんですが、雄星にとってはヒーロー。読者にもやっぱりすみれちゃんはカッコいい主人公だ！と思わせてくれる熱い話が忘れた頃にやってきます。しかしその後また落ちるのがすみれちゃん。皆さんとりあえず「ファミファタ任三郎」が出てくるまで読みましょう。いいなと思ったら「すしカルマ」が出てくるまで読みましょう。もう抜け出せませんよ。

声優 / 富岡美沙子

■元アイドル・31歳・無職のすみれちゃんが令和に仲間たちとともに再起する物語。だらしなくて、ギャンブル好きで、強かで、情けない。漢な姿も垣間見え、どこことなくこち亀の両津勘吉みがある。熱くも哀しげ、たくさん笑える漫画です。

デザイナー／シンガーソングライター／平松新

## 「ベー革」クロマツテツロウ

■クロマツテツロウさんの野球マンガはとにかく面白い！限られた練習時間でフィジカルを鍛え、神奈川県大会に挑む高校の野球部に入学した野球バカの主人公が、野球脳を鍛え、野球眼を鍛え、強みを生かし、成長していく姿が見ていて気持ちいい！この先、リアル「ベー革」な高校が出てくるのでは？とワクワクしながら高校野球を見てしまおうと思います。高校野球漫画にも革命を起こすと言っても過言ではない作品です。

書店勤務 / 野口忠義

「ベル・プペーのスパダリ婚約〜「好みじゃない」と言われた人形姫、我慢をやめたら皇子がデレデレになった。実に愛い！〜」セレン、朝霧あさき

■内容はタイトルの通り。主人公の美少女レティシアが聡明で凛々しく、性格も男前で痛快！読んだ女子は宝塚気分になれるのでは。画力も高く、コマ割りも上手で読みやすい。2人がずっと可愛くて、元気が出ます！

営業 / 佐々木つむぎ

## 「放課後ファンタジー」村岡ユウ

■漫画研究部の体験入部で手に取った一冊が、“異世界”への入り口だった。導入だけ聞くとありがちな異世界ファンタジーに思えるが、本作の面白さは、異世界に行ったきりではなく、主人公たちにしっかり「リアルな高校生活」があるところにある。現実と異世界を頻繁に行き来するうえ、異世界にいられる時間は原則として部活動の時間だけ、という制限が効いていて、異世界での冒険譚としてもワクワクできる一方、学園側では部活ならではの人間関係などが描かれ、二つの舞台が互いに響き合うのが気持ちいい。冒険と青春、どちらの軸でも物語を転がせる“二面構造”だからこそ、一粒で二度おいしい読み味がある。今後、異世界側の謎が深まるのか、現実側の部活ドラマが加速するのか、どちらのストーリーにも期待したい。

弁護士 / 田邊幸太郎

## 「放課後、僕らは宇宙に惑う」斉藤ゆう

■ロケット研究部の燃焼実験がバズった——しかし、視線が集まったのは映り込んだ惑あやめの可愛さだったという導入から始まる青春物語。ヒロインの惑あやめがとにかくかわいい。騒がしい外野の称賛に戸惑いながら、あやめが本当に“かわいいと思ってほしい相手”へ向けて気持ちを育てていくのが甘酸っぱくて良い。部員たちの茶化しや細かい宇宙ネタも小気味よく、あやめのかかわいさに花を添える。次の恋の打ち上げを待ちたくなる、そんな青春ラブコメ。

弁護士 / 田邊幸太郎

## 「ボーイッシュ彼女が可愛すぎる」牛乳麦ご飯

■彼女ことあきらが本当にかわいい。それだけでご飯何杯もいけちゃう、そんな作品です。彼氏の大地もまっすぐで思わず応援したくなっちゃいますね。

めがねっ娘教団教務大司教 / 田中海渡

## 「ボールアンドチェーン」南Q太

■4巻まで出ている作品ですが、去年出会い読んだら新幹線の品川京都間の2時間ちょいであっという間に読んでしまいました。繊細な所の表現や、主人公が2人いるところ、体の芯が熱くなるぐらい夢中で読みました。面白いです。

お笑い芸人 / ムーディ勝山

## 「ぼくの好きな人が好きな人」つづら涼、葵せきな

■主人公の少年、先輩のイケイケ少女、後輩の少女（ちょいツン）の三角関係がベースのラブコメ。いまや、三角だ

けではなく、もっと多くの人物が登場してより複雑な関係になっていますが、物語の強度が全く落ちていません。原作の葵せきなさんは、「生徒会の一存」の作者だけに、このあたりの物語の作り込みは、さすが。予想がつかない展開が多いのに、安定しているように感じる点もお見事です。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

## 「没落令嬢の悪党賛歌」柳ゆうと、もちもち物質、ペペロン

■ コミカライズものですが、高い画力と漫画ならではの魅せ方が秀逸です。お話もかなりスカッッッ！！とするので、ぜひモヤモヤする気分の時に読んでみてほしいですね。

会社員 / 畑中瀬路奈

## 「マイペースと歩く」三本阪奈

■ 不器用で不格好でいびつだけれど、そもそも実際世の中全員がそうなんだから足りない者同士みんなで補い合えばいいよね、と感じられるような作品が大好きです。思春期のしょーもないような些細なこと、そのただ中にいる時にはこの世の終わりだ！ってくらい重大事項だと思っていたけど、過ぎ去ってそれを思い返せるような年代になるとまぶしさと共に己の自意識過剰さまで蘇って恥ずかしい！恥ずかしいけれどとっても大切な時間だと思えます。

元書店員 / 内野智未

## 「魔女と傭兵」宮木真人、超法規的かえる、叶世べんち

■ 無骨な傭兵と世間知らずな魔女のやり取りにほっこりします。

教師 / 持丸宏司

## 「瞬きの音」押見修造

■ ここまでの作品の集大成なのかな？と感じるテーマ。何かを創造することや、第三者視点での成功を手に入れることに対しての業について考えさせられる。

イロイロ屋 / 杉本善徳

## 「MAD」大鳥雄介

■ 時折り挟まるシュールなギャグが病みつきになる。主人公の覚醒は昨今の漫画の中でベスト。

会社員 / 齋藤隼

■ 隕石と共に飛来した人喰いエイリアンのせいで、人類存亡の危機に。人類 vs エイリアンのSF サバイバル、と書くとはよくある設定ですが…。この異様な世界で、主人公の言動や行動が「普通」の感覚。それがまたとてもリアル。画風もラフで荒々しくもあり、エイリアンの造形はとても細かい。これもまた異質な世界観を演出してる。

元コミック担当 / 実松由夏

## 「マネマネにちにち」山本崇一郎

■ 野球部女子マネージャーの三人組という群像劇、高木さんが二人の関係に焦点をあてて進んでいくのに対し三者三様に進んでいく日常の何気ないコマという構成は鉄板であるが故に難しいものであるが、普通に引かかることなく読ませる実力派、あとおでこ。

住職・ライター / 蟬丸P

## 「魔法医レクスの変態カルテ」元三大介

■ 舞台は魔王討伐後の、魔法やモンスターが当たり前に存在する異世界。診療所を営む魔法医・レクス先生のもとに集まるのは、性欲や性的嗜好をこじらせきった患者ばかり。触手プレイ、異種恋愛、淫紋、エロトラップなど、ド下ネタのオンパレードでありながら、圧倒的な画力と真面目な医学的視点によって、見事なコメディへと昇華されています。なかでも、“ドラゴンカーセ〇クス”という長年ふわっと消費されてきた概念に、これ以上ないほど合理的で納得のいく説明を与えた回は衝撃的で、推薦の決め手となりました。どんな変態患者を前にしても、医師としての責任と判断を貫くレクス先生が、とにかくカッコいいです。

接遇スペシャリスト/ライター / 田邊加奈

## 「魔法少女イナバ」猫にゃん

- わたしは「純粋な感情」が大好きなのですが、なぜかという「純粋な感情」だけが救済をもたらすことができるからだと思います。「純粋な感情」は、ためらわず、忸度せず、惑わされず、偽らない。だから「純粋な感情」は、人間関係のしがらみや、世の中の空気や、社会的価値観や、法と権力によって辺境に追いやられるひとびと（それは必ず存在する）にとって救いとなるのです。だからこそ、ヒーローとは「純粋な感情」のことであり、「純粋な感情」こそがヒーローである唯一の条件なのです。多くのひとがそれを狂気と呼んだとしても。

作家 / 灰都とおり

## 「マンガラバー」文村公

- 泥にまみれた原石から才能が見出されるというお話は読者の共感を得やすいと思いますが、読者がそこで期待しているのは才能をもった本人そのものではなく、その才能が周囲をどう変えるかというドラマなのだと思います。この物語に登場する「才能」は、きっと穏当な変化を許さないでしょう。その苛烈さを信頼しています。

作家 / 灰都とおり

## 「みいちゃんと山田さん」亜月ねね

- ニューロダイバーシティ的のものに対して、近年で世間的な認知がグンと増した。逆を言えば、少し前まではその個性に対して今以上に偏見があったことと、同時にそこを疑問視している視点もあったことがグラデーション的に描かれている作品。「今」の視点から見ると「過去の過渡期」のようだが、実際は現在もまだ過渡期の中にあると考えれば、今後の展開をどう描いていくのかがとても楽しみです。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- ここ数年世を映してか「子どものころから抱える生きづらさ」にフォーカスした作品が目立つようになったと感じていましたが、その生きづらさの先について、絵柄の雰囲気とは裏腹にここまで残酷に描いた作品はなかったのではないかと思います。笑い事にできない、茶化せない。これは私の知らない街角の隙間に確かにある現実なのかもしれない。目を離せないのは野次馬根性なんだろう、目を逸らしたいのに逸らせない。ストーリーで起きることを拒否すべきか受容すべきか、読んでいらずと迷いがつきまといかなりキツイです。幼いみいちゃんがもし側にいたら、私は心から受け入れられない気がする。でも山田さんがみいちゃんに救われた瞬間やふたりで笑い合った時間まで否定したくない。どうしたって救われないうという諦めの気持ちは最初からあるのですが、それでもどうか幸せになってほしい、愛されてほしいと祈るような気持ちで読み進めました。絵柄のかわいさでえげつなさを隠しきれていないのですが、かわいくなかったら読むの無理です。しかし、躊躇わずにどんどん読ませるマンガとしての底力たるや。おすすめしたいかと言われるとたしかにどんな顔して勤めればいいのか迷うところですが、このような作品が今あることを無視できないです。最後まで見守りたい。

公務員 / 宇田川結衣子

## 「三角兄弟」トキワセイイチ

- ずっとかわいくてずっと不穏だからずっと怖かった。怖いまま終わると思ったら、思ってもみないラストで驚いて嬉しかった。著者のトキワさんが描きたいことを描き切ったように見えて、こちらまで清々しい気持ちになった。このあと、何を描かれるのか、とてもとても興味がある。

ライター / 門倉紫麻

- 好き！！絵もキャラも話も画面作りも扱う題材や発想も装丁も好き！！です！！

ヘリックス・クリエイティブ株式会社 WEB ディレクター / デザイナー / 河本 智芳

## 「みちかとり」田島列島

- 本当に素晴らしい物語でした。何を信仰していますか？と聞かれたら大抵が無宗教だと答える日本人が多いと思いますが、この漫画に出てくる様々な価値観、キャラクター、世界観はまさに日本の古来からある宗教観に通じていると思っています。神様の描き方、神様という存在をどう扱うか、これは世界中の人が読んで日本に根付いてるこの多神教のカオスな感じを楽しんで欲しいと思うぐらい見事に描いていました。読んでいてゾッとするほど神様が

怖い。でも可愛い。でも怖い。神様ってそういう、人の都合なんて一切考えない存在だよなと本能的に理解してる自分のことも知れました。素晴らしい作品をありがとうございました！

OKAMOTO'S / オカモトショウ

## 「みっしょん！！」入江喜和

- 介護・家事・店番に追われて心が擦り減る 50 代の主婦が、車の免許取得（しかも MT 車）という思いがけない目標で新しい人生の可能性を見つけていく。日常のしんどさを丁寧に描きつつ、さまざまな出会いがもたらす「普通の人の劇的な変化」に勇気づけられます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

## 「緑の予感たち」千葉ミドリ

- 最高！こういう新しい作家さんとの出会いが生きがいである。黒田硫黄を彷彿とさせる絵柄。とくに二つ目の短編が好きでした。これから描くものが楽しみでならない。

マンガバー店主 / 岡部愛

- 夢で見たけれど忘れてしまっていたあの世界に、連れ戻してくれるようでもあり、連れ戻されてしまうようでもあり。闇の表現のおどろおどろしさ、質量感が、絶妙なコントラストを生んでいて、それでいて溶けていて、繋がられてしまう感覚。この「繋がられてしまう感覚」が、この作品のすごさだと僕は思いました。夢と現実を行き来するでもなく、混ぜるでもなく、繋げて溶かした短編集。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 面白い。短編集のような、お話が何個か描かれています。コミカルな物語もあれば、少し怖さを感じる物語もあって、凄く楽しい一冊です。中でも幼い頃のうっすらとした記憶を描いた物語が好きです。「こんな感じだったような？」という感じで進むのが面白かった？。不思議な読み応えと読後感が最高でした。

お笑い芸人 / ムーディ勝山

- 描かれている空間そのものの魅力がすごい。リミナルスペースとかドリームコア的な良さもあって、ここにいきたい、というか、いたい、と何度も思った。

ライター / 門倉紫麻

## 「ミハルの戦場」藤本ケンシ、濱田轟天

- 日本が侵略を受けて複数の国に占領されている架空の現代で、日本の主権を取り戻そうとするという設定自体は、そう奇抜なものではないが、政治や戦略・戦術や実際の戦闘などの世界観が大小すべて細部まで作り込まれているため、現実感が強く、続きが気になってしまう。また大人たちは侵略前までの現代の普通の生活を知っており、侵略後の世界しか知らない兵士の若者たちへの視線が読者の視線と重なる部分があり、キャラクターたちへの感情移入を高めている。

駿河屋梅田茶屋町店 店員 / 小磯 洋

- 戦場でのスナイパーを描く、リアル戦争作品。主人公は、映画「ニキータ」を連想させる少女狙撃手。リアルな戦場における凄惨さ、非情さが描かれる。独ソ戦を描いた映画「スターリングラード」やベトナム戦争を描いた映画「プラトーン」を思わせるところがある。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

- 戦場の描写が惹きつけてくれる。射手のミハルと観測手のショウのコンビのストーリーが良い。特に戦闘の時と普段のショウのギャップが好きです。

デザイナー / 平沼寛史

## 「MUJINA INTO THE DEEP」浅野いにお

- 物語の背景も登場人物もデザインも絵も全ページ隅々までカッコいい。人によって好き嫌い分かれるような物語だけれどクオリティーでそんな事は気にならなくなる漫画だと思います。

PENICILLIN / HAKUEI

## 「ムシバミヒメ」東元俊哉

■ なんだかんだ 1 番怖い生き物は人間なんだな。

PENICILLIN / HAKUEI

## 「メイドさんは食べるだけ」前屋進

■ 3年ぶりに推薦できる…だと…！？この作品を推せることがとにかく嬉しい本当に本当にありがとうございます。じゃあ作中の推しは誰かって？スズメちゃんとリコッタちゃんとおばあさまだよ！！(3年ぶり2回目)んもうキャラの可愛さとか伝統についての丁寧な解説とか効果音とか色々推せる要素がこんもりなのですが、抜群に絵が上手です。う、うまっ！！ってよくなります。いいよねえ、こういうのいいよねえ、って人にオススメしたいマンガです。

会社員 / 布施直人

## 「女神の疵痕」シギサワカヤ

■ シギサワカヤ作品を推すことが多いんですが、いつも似たようなコメントになってしまって、浅学菲才のわが身を呪います。逆に言うと、いつも通りにどろどろ恋愛模様が展開されておりますので、安心して(?)お楽しみください！

めがねっ娘教団教務大司教 / 田中海渡

## 「メルヘンクラウン」赤坂アカ、あおいくじら、アジチカ

■ 塔の中で暮らすラプンツェルが外の世界へ踏み出すも、その先は“めでたしめでたし”とは程遠かった。読み進めて数十ページ、抱きかけた印象が途中でガラッと変わる瞬間があり、思わず目次を見ると「第0話」とある。なるほど、まだ物語は始まってすらいなかったのかと気付かされる。世界を何も知らない無垢で美しいラプンツェルは不穏かつ異様な空気感が漂う世界で理不尽・不条理を突きつけられる。ラプンツェルに救いはあるのか。彼女はこの世界で何を信じ、何をを選び取るのか、今後どのように物語が展開されていくのか大変楽しみな作品。

弁護士 / 田邊幸太郎

## 「メンタル強め美女白川さん」獅子

■ こんな風にモヤモヤした気持ちを切り替えられたら。そして自分を褒める！サラッと描かれているけど実は大事なことが沢山かいてある！

カメラマン / 平沼久奈

## 「MOGAKU」グミマル

■ 週刊少年チャンピオンという雑誌は、少年マンガ界のガラパゴスのように他誌とは全く異なる思想をもち、価値観を保存しています。だからこそそこには、現代的感性からすると異形の、そしてその実、化石のように王道中の王道である、とてつもないエネルギーをもった作品が生息しています。本作の連載が始まったときから、この圧倒的に王道を疾走し続ける異形の作品の熱に焼かれ続けています。

作家 / 灰都とおり

## 「モノクロのふたり」松本陽介

■ 一度は諦めた夢を追いかける二人の熱量が凄い。モノクロの世界が色づいて見えます。

教師 / 持丸宏司

## 「百瀬アキラの初恋破綻中。」晴川シント

■ 週刊少年サンデーといえば、やっぱりラブコメ！最近は特にラブコメが豊作なのですが、その中でも群を抜いて心に全力アタックしてくるのがこの作品。めちゃくちゃ美しい絵からは想像のつかない激しいコメディというギャップに降参です。百瀬さんの勢いと久我山くんの鈍感さで発生する空回りすれ違いドタバタコメディシーンと、百瀬さんの可愛らしさに胸がギュンとつぶれそうになるラブのシーンで大忙し！カラーイラストが本当にきれいで、百

瀬さんの瞳の中に吸い込まれそうになります。ふたりの純愛のゆくえをいつまでも見守ってたいです。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

## 「野球・文明・エイリアン」山岸菜、へじていと

■「読んだことのないマンガが見たい！」と常に思っているのですが、2025年最大の衝撃作。野球マニアの女の子と、そこに出会って野球の面白さに目覚めてゆく理系男子カップルがカワイイ、あ、めちゃくちゃディティールが細かい野球ファンあるあるの作品なのね、と試してみたら!!! 野球を見に来た幕張で、なんと異世界、異星に飛ばされます!そこから始まるDr.Stoneバリの理系知識アリのサバイバル。そのサバイバルの先にあるのが、なんと、異世界で、異星人(?)たちと、存在しない野球を、そこでやり始めようとするのです!!!異星人たちが捕る・投げる・打つ、が出来なければ野球できない、平らな場所・グラウンドがなければプレイできない、ゴムがなければボールは作れない、という野球の根源を物理現象で問合せる野球マンガ、見たことない!さらに、嬉しい擬音も悲しい擬音も、「やきゅ」という言葉であらわす表現力も、主人公二人が異世界でやっぱりラブラブなのも、異星人(?)ヤルルたちの造形も言動も、全部かわいい!

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

■野球×SFという意外な組み合わせに驚かされる一作。主人公がエイリアンのヤルルたちに人間の文明や野球を教える中で、少しずつ信頼が深まっていく関係性が愛らしい。知的好奇心を刺激される展開に加え、ヒロインの野球バカっぷりも可愛くて魅力的です。

会社員 / 小野塚博之

## 「やめろ好きになってしまう」もりぐちあきら

■そういえばなんで好きになったのかよくわからない、クラスも部活も違うのになんで仲良くなったのかよくわからない、なんで怒ってるのか、なんで機嫌がよくなったのかわからない。でも、好きになってしまう。誰しもが通る甘酸っぱい思い出はこんな感じだったかもしれません。見えているようで見えない展開にドキドキします。

弁護士 / 三葛敦志

## 「ゆげたつらん」遠浅よるべ

■満たされない勝ち組男が、地図アプリの温泉レビューに導かれて、謎につつまれた孤高のレビュアー「癒しん坊」へ弟子入りし、全国の名湯・秘湯を巡る師弟ロードもの。男二人の絶妙な距離感と、全国各地のひなびた温泉の旅情にじんわり癒されます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

■温泉や人との出逢いがとても丁寧に描かれているところがステキです。時間や労力をかけて得られる体験の魅力がこの作品には溢れています。ゆっくり時間をかけて温泉を楽しむなんて、なんて贅沢な時間な時間の使い方だー。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

## 「陽光ヲ待ツ」ななせ悠

■先の大戦を題材としたマンガでも、戦時中の生活を描くものはそう多くはないが、さらに本作は「たぬきの置物」で著名な滋賀県の信楽焼を物語の軸に据えているたいへん希有な作品だ。しかも信楽焼は登場人物たちの生活の背景として描かれるのではなく、むしろ信楽焼という産業が戦争によってどのように揺さぶられ、変化を迫られたかを主題とした一種の産業史になっている。滋賀県だけではなく、窯業が盛んな地域の図書館や児童館にはぜひ蔵書してほしい作品です。

会社員 / やのこうじ

## 「楽園をめざして」ふみふみこ

■双極性障害という題材を、単なる知識の説明ではなく、リアルな生活として描き切った稀有な作品です。躁と鬱、それぞれの状態が日常にどのような影響を及ぼすのかが丁寧に描かれており、その筆致には、作者であるふみふみこ先生が当事者であるからこそその説得力を感じました。各話のラストに添えられた豆知識的なページも、理解を深める助けとなっています。読んでいてしんどくなる場面も多い作品ですが、物語は暗闇に閉じこもったままではあ

りません。不完全で歪なまま支え合う家族や他者との関係、生活の中の小さな工夫、そして助けを受け取る勇気が重なっていき、その先に、この作品なりの「樂園」が示されます。

接遇スペシャリスト／ライター / 田邊加奈

## 「らくごのこ」会田薫

- 人気のイケメン落語家が、天才たちに圧倒されながらも、自分の才能の平凡さに直面して、もがき苦しむ姿に共感してしまう作品です。テーマは落語ですが、これは社会の人に共通する悩みではないでしょうか。自信を失っている人にぜひ。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

## 「林檎の国のジョナ」松虫あられ

- 他人から決めつけられたら腹が立つのに、自分自身がそれを他人に押し付けていないか。人を見かけだけで評価していないか。読みながら何度も自分を省みる。ルッキズム、コンプレックス、正しさの押し付け。投げつけた方は放った直後に忘れてしまっているような言葉や態度が、刺さった棘になってジクジク痛み続けるような呪いになることがあることを常に念頭に置いておきたいと思う。ジョナや正市をはじめとした登場人物が感じているであろう息苦しさ、閉塞感、疲れて諦めてしまうような感覚に、いつか春がきますように、と思いながら読んでいます。

元書店員 / 内野智未

- リアルが見えなくなりがちに時代に、この作品を読んでいると、息苦しさやせつなさに加えて安心感を覚える。きっとそんな人も多い作品。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 2巻のコピー「『美しい顔』に生まれた人間の地獄…」。正市が抱えていた地獄が明かされた2巻、衝撃でした。わたしはアイドルファンなので実に気軽に「顔がいい」と言いがちです。でも、職業としてそれを武器にしているわけではない人にその言葉を向けることで、褒めているつもりが傷つけてしまうことがあると想像したことがあります。大人としてだいぶ遅かったとは思いますが、この作品を読んでルッキズムについての考え方が変わりました。他人を無意識に傷つけてしまった経験、逆に傷ついてしまった経験、どちらにも共感する部分があり、あらためて自分の行いを見つめ直すきっかけになりました。松虫あられさんが、こどもや生きづらい事情を抱えている人たちを守りたいんだなということが伝わってくる、やさしい作品です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 現代社会のルッキズムに傷つく人へ届いてほしい、再生の物語。東京で見た目へのコンプレックスに苦しみ、心が折れかけた25歳の女性・アリスが逃げるように辿り着いたのは、祖母のいる青森。田舎のあたたかい空気に癒やされる一方で、家族間の軋轢や、特別支援学級の教師として働く日常をリアルに描き出していきます。「田舎で癒やされて終わり」のその先。人間関係のギスギスした痛みや、自分自身の価値観と正面から向き合っていく主人公の姿には、他者や自分を愛するための希望が詰まっています。見た目のコンプレックスの苦しみと、美しさで持ち上げられる弊害。ルッキズムの両面を真摯に描く、今こそ読まれるべき一冊です！

芸人 / 吉川きつちよむ

## 「るなしい」意志強ナツ子

- 人間の嫉妬、三つ巴で織りなすドラマ、それぞれのキャラクターの生々しい感情、かわいい絵柄とは裏腹にドス黒いものをリアルに描かれた漫画で、読んでいると自分の周りには1人もいなかったタイプのこのキャラクター達の感情がグッと心に入り込んできて、気づいたら共感して一緒に泣いたり笑ったりしていました。最高！

OKAMOTO'S / オカモトショウ

## 「ルリドラゴン」眞藤雅興

- なにか、人と違うものがあるとき、どう生きていくか。どう他者と関わるか、リアルな10代の感覚が描かれているようで心がギュッとしたり暖かくなったりします。

女優 / 齋藤明里

- 連載再開できてよかったねえ。でてくる子らがみんないい子たちばかりで、この子らの心持の洗練を生み出すことができたんなら戦後日本はまんざらでもなかったんじゃないかなと思う。このままクラスみんなの「ドラゴンのいる日常」をちゃんと描いてほしい。

流しのソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- ずっと応援している作品です。ルリちゃん的能力がどんどん進化してドラゴンとして成長しているのにどんどん友達が増えて学校に馴染んでるのが面白い。ルリちゃんがクラスメイトとちゃんと話せるコミュ力も凄いし、そこでちゃんと意見を言えたり受け入れられるクラスメイトも良い子が多くて見てて羨ましいです。アニメ化も決まって本当に楽しみです。

自営業 / 玉澤綾子

- ドラゴンの能力発現という外連味のある起点から、思春期らしい繊細で複雑で面倒くさいコミュニケーションと可愛くて切なくてキラキラして笑える人間関係を紡ぎ出してみせる。作者の技量と引き出しの多さに感嘆。

朝日新聞記者 / 小原篤

## 「瑠璃の宝石」 渋谷圭一郎

- 少女たちの鉱物採集と小さなエピソード群を優しい筆致で紡いだ佳品。アニメ化もされた有名作だが、学習漫画としての質の高さを改めて強調すべく、七巻が刊行されたタイミングで挙げておきたい。

書評家・ライター / 福井健太

## 「令和のダラさん」ともつか治臣

- アニメ化した！ 流行れ！ ラッピングバスとか電車とか走れ！洒落怖由来の怪異があなたのお隣で見守るよマンガ。細部へのこだわり、どんな卑小なものであれ『世界』を描いてやろうという心意気が好い。オカルト青春群像劇としても面白いです。

流しのソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- もう今回が最後の推薦かと思うと感慨深い。姦姦蛇螺というネットミームからよくここまで長く連載が続いたものだ。それには作者の画力、シリアスとギャグのバランス感覚の良さのおかげだと思う。これからも詠んでいきたい作品

鳥取県高等学校教員 / 佐川由加理

## 「レコード大好き小学生カケル」 おおひなたごう

- いやいや、こんな小学生がいるなら本当にお友だちになりたい！って言うくらいマニアック過ぎて心揺さぶれます。時間も手間もかかるアナログレコードだけど、仕舞い込んだものを引っ張り出してまた音を奏でてもらおうかな。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

## 「レジスタ！」 藤丸

- 年の差ラブコメは近年特に目立ち、どれも面白いのですが、同作は軽め？の群像劇を持ち込んでいるのが魅力的です。失恋経験のあるフリーの作曲家を主人公にすることで物語に深みがありますし、さらに立場の異なる人々の心の動きを描写することで、お話が面白く回っています。今後も先が気になります……ということで推挙。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

## 「ロードマギアの弟子」 FLIPFLOPs

- 変化球なファンタジー作品が多いなか、ド直球なファンタジー作品話も、描写もしっかり描かれていて、評価に値する作品だと思います

tetote 代表 / カ丸真

- サンデー系では藤田和日郎先生の『シルバーマウンテン』を推すのはあまりにも容易いのですが、やはりその前に「サンデーうぇぶり」発で、ここまで本当にじっくり丁寧にストーリーを描き進められてきた本作を推すべきでしょう。入念に世界観が練られたファンタジー作品で、2025年までの既刊4冊と一気読みにも頃合いです。主人公の

ガル君が初めて魔法を使う場面は、ストーリーの単純な進行を超えた、まさに様々な要素の結節点ともいえる描写で鳥肌ものです。

会社員 / やのこうじ

## 「ROCA コンプリート」いしいひさいち

- いつも通りの面白四コマをひたすら読んでいただけなのに、気がつくとな人の女性の人生を垣間見ていた。まさかいしいひさいちに泣かされる日が来ようとは！

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- あっさり・淡々と描かれたストーリーと人物なのに、読後にはなんとも言えない熱量のようなものが胸に残ります。ポルトガルのファドを聴きたくなる、映画のような物語。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 巨匠いしいひさいちが齢 70 代にして、これほど瑞々しいシスターフッドの物語を描くとは、いったい誰が想像しただろうか。そして主人公 2 人に突き付けられるどうしようもない「リアル」に涙せずにはいられない。さらに驚くのは長年 4 コマという定型フォーマットにこだわってきた氏が、意識的にその枷から逸脱してみせた大胆な画面表現だ。普通のギャグ漫画のサイズではなく、ストーリー漫画の頭身で描かれるロカの歌唱シーンはドラマチックで美しく、見開きの俯瞰で描かれた港湾の事故のシーンは衝撃的でした。 「孤高の天才」という印象の強いいしい氏だが、その地位に安住せず、いまだ漫画表現への挑戦者であることに心から敬服する。

コミティア実行委員会 会長 / 中村公彦

## 「んば！」熱焼江うお

- クレイジー過ぎて大好き。

PENICILLIN / HAKUEI

- このスピード感と、それでいて日本の島国ならではの不気味な暗さ、そして間違った正義感を持った主人公、巻き込まれる時の不自然な自然さ、どれも面白かったです！ いがらしみきおさんの Sink という漫画などを思い起こさせるような世界観が好物で、楽しませてくれました。

OKAMOTO'S / オカモトショウ

- なんだかぜんぜんわかんないんだけど？？と思いながら読み始めて 2 巻の「宇都宮駅のホーム」でああああそういうことか！となったのに、やっぱりぜんぜんわからないのかも…となって情緒を不安定にしてくる。どのコマの絵も等しく全部（人間も背景も異形のものも）よすぎるのも情緒を不安定にしてくる。私は一体どうしたらいいのか…

ライター / 門倉紫麻

- いわゆるパニックものと断ずるなかれ。ぐるぐるんとぶん回されて、放り投げられるような衝撃作。作者さんの執念めいたエネルギーの蠢き？…というよりは、魂の解放！を感じてしまう。この作品は、読者をどこに連れて行ってしまうのか。人間とは、人生とは、幸せとは、という問い、というよりはもはや讃歌なのか。なんなのかわからないけれど、この先も楽しみにしています。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文